

令和6年度
(2024年度)

講義要項

農学ビジネス学科

保 育 学 科

拓殖大学北海道短期大学

学科別索引

農学ビジネス学科（1年生）	・・・1～47
環境農学コース（2年生）	・・・48～81
地域振興ビジネスコース（2年生）	・・・82～121
保育学科	・・・122～195

科目別担当教員索引

農学ビジネス学科（1年生）

【基礎科目】

アカデミック・スキル・・・1
S D G s 基礎・・・2
情報リテラシーⅠ・・・3
情報リテラシーⅡ・・・4
キャリア・プランⅠ・・・5
現代社会の憲法・・・6
現代社会論・・・7
インターンシップ・研修・・・8
ミュージカルⅠ・・・9
総合英語Ⅰ・・・10
総合英語Ⅱ・・・11
英語コミュニケーションⅠ・・・12
英語コミュニケーションⅡ・・・13

日本酒学・・・42
食プロジェクトA・・・43
食プロジェクトB・・・44
フィールドワーク論・・・45
地域づくりの経済学・・・46
地域プロジェクトⅠ・・・47

【専門科目（必修科目）】

サステナブル・アグリカルチャー・・・14
農業の基礎科学・・・15
農業基礎実習・・・16
農産加工実習・・・17
地域振興論・・・18
社会調査の手法・・・19
1年ゼミナール・・・20

【専門科目（選択科目）】

初級簿記・・・21
農業簿記・・・22
異文化交流Ⅰ・・・23
異文化交流Ⅱ・・・24
海外研修・・・25
キャリア技能A・・・26
キャリア技能B・・・27
キャリア技能C・・・28
キャリア技能D・・・29
キャリア技能E・・・30
キャリア技能F・・・31
キャリア技能G・・・32
作物栽培概論・・・33
土壌管理学・・・34
病害虫管理学・・・35
スマート農業論・・・36
農業機械研修・・・37
作物育種学概論・・・38
農産物利用学・・・39
世界の食と文化・・・40
食農社会論・・・41

農学ビジネス学科（2年生）

環境農学コース

【基礎科目】

日 本 国 憲 法	・・・48
法 学	・・・49
総 合 英 語 III	・・・50
総 合 英 語 IV	・・・51
英語コミュニケーションIII	・・・52
英語コミュニケーションIV	・・・53

【専門科目（必修科目）】

2 年 ゼ ミ ナ ー ル	・・・54
---------------	-------

【専門科目（コース選択必修科目）】

農 業 研 修	・・・55
---------	-------

【専門科目（選択科目）】

水 稻 生 産 学	・・・56
畑 作 物 生 産 学	・・・57
野 菜 生 産 学	・・・58
花 卉 生 産 学	・・・59
水 稻 実 習	・・・60
畑 作 実 習	・・・61
野 菜 実 習	・・・62
花 卉 実 習	・・・63
施 設 園 芸 学	・・・64
土 壌 作 物 診 断 実 習	・・・65
日 本 酒 製 造 実 習	・・・66
植 物 資 源 応 用 実 習	・・・67
農 業 機 械 研 修	・・・68
作 物 栄 養 生 理 学	・・・69
グリーン・ツーリズム論	・・・70
食 品 ・ 農 産 物 流 通 論	・・・71
キャリア技能Ⅰ（玉掛け技能）	・・・72
キャリア技能Ⅱ（小型クレーン）	・・・73
キャリア技能Ⅲ（フォークリフト）	・・・74
キャリア技能Ⅳ（車両系建設機）	・・・75
キャリア技能Ⅴ（食品衛生責任者）	・・・76
キャリア技能Ⅵ（ガス溶接技能）	・・・77
キャリア技能Ⅶ（農業用ドローンオペレーター教習）	・・・78
キャリア技能Ⅸ（ミュージカル）	・・・79
海 外 研 修	・・・80
卒 論 演 習	・・・81

農学ビジネス学科（2年生）

地域振興ビジネスコース

【基礎科目】

心 理 学	・・・82
政 治 学	・・・83
地 方 政 治 論	・・・84
総 合 英 語 III	・・・85
総 合 英 語 IV	・・・86
英語コミュニケーションIII	・・・87
英語コミュニケーションIV	・・・88
総 合 中 国 語 III	・・・89
総 合 中 国 語 IV	・・・90
中国語コミュニケーションIII	・・・91
中国語コミュニケーションIV	・・・92
総合日本語Ⅲ（留学生用）	・・・93
総合日本語Ⅳ（留学生用）	・・・94
日本語コミュニケーションⅢ（留学生用）	・・・95
日本語コミュニケーションⅣ（留学生用）	・・・96

【専門科目（必修科目）】

ク リ ー ン 農 業 論	・・・97
2 年 ゼ ミ ナ ー ル	・・・98

【専門科目（コース選択必修科目）】

ビ ジ ネ ス 実 務 演 習 I	・・・99
ビ ジ ネ ス 実 務 演 習 II	・・・100
経 営 学 総 論	・・・101
現 代 企 業 論	・・・102
マ ク ロ 経 済 学	・・・103
ミ ク ロ 経 済 学	・・・104

【専門科目（選択科目）】

日 本 酒 学	・・・105
グリーン・ツーリズム論	・・・106
食 品 ・ 農 産 物 流 通 論	・・・107
N P O 論	・・・108
地 域 観 光 ビ ジ ネ ス 論	・・・109
ボ ラ ン テ ィ ア 論	・・・110
会 計 学	・・・111
情 報 技 術 の 運 用 I	・・・112
情 報 技 術 の 運 用 II	・・・113
政 治 理 論 史	・・・114
経 済 学 史	・・・115
キャリア技能Ⅴ（食品衛生責任者）	・・・116
キャリア技能Ⅸ（ミュージカル）	・・・117
イ ン タ ー ン シ ッ プ	・・・118
地 域 特 別 演 習 A ～ D	・・・119
海 外 研 修	・・・120
卒 論 演 習	・・・121

科目名	アカデミック・スキル	教員名	わが妻 きみひろ 我妻 公裕	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
アカデミック・スキルとは大学での学びの作法・技法のことである。 学生は、自主的かつ自律的に学んでいく必要があり、テーマを設定し、情報を収集し、自らの主張を支える根拠を見だし、議論や助言を通して考えを深め整理して、論文やプレゼンテーションにまとめることで、その学びの成果を自らのものにすることになる。 そのため、文章を読む力、情報を活用する力、文章にまとめ発表する力などの必要な知識と技能を身につけると目的として、読解力、ロジカルシンキング、クリティカルシンキング、表現力を高める課題に取り組む。 到達目標は以下のとおりである。 ・自主的、自律的に学ぶ力を身につけ、課題に積極的に取り組むことができる。 ・読解、表現に関する基礎的な知識と技能を身につける。 ・レポート、プレゼンテーション作成に必要な基礎的な知識と技能を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 授業ガイダンス							
2. アカデミック・スキル 学び方を理解する (教科書第1章、第2章、第3章、第4章)							
3. 読解力と論理的思考力① ロジカルシンキング (教科書第5章、第6章)							
4. 読解力と論理的思考力② クリティカルシンキング (教科書第5章、第6章)							
5. 情報活用能力① 文章を読む (教科書第7章、第8章、第9章)							
6. 情報活用能力② データを読む (教科書第7章、第8章、第9章)							
7. 表現力① グループワーク① (教科書第10章、第11章)							
8. 表現力② グループワーク② (教科書第10章、第11章)							
9. レポート作成① テーマ設定、情報収集 (教科書第13章)							
10. レポート作成② 概要、項立て (教科書第13章)							
11. レポート作成③ 課題の発表 (教科書第13章)							
12. プレゼンテーション① テーマ設定、概要作成 (教科書第12章)							
13. プレゼンテーション② 発表資料の作成 (教科書第12章)							
14. プレゼンテーション② 課題の発表 (教科書第12章)							
15. まとめと振り返り							
III. 講義の進め方							
スライド、プリントを用いる。小テスト、レポート・プレゼンテーションなど演習課題に取り組む。 なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト (30%)、レポート (30%)、プレゼンテーション (30%) のほか、グループワーク等の取り組む姿勢を評価する。							
V. 授業外学修							
国内外の政治・経済の情勢が揺れ動いている。日常的に「何が起きているのか」に関心を寄せることで、原因や経緯から将来を予見することで、「論理的思考力」、「課題解決能力」を養うことができる。SMS 等により、情報が溢れているがその情報の真偽、憶測、予測などを見極める「情報活用能力」も高めなければならない。大学での学びは、主体的で自律的であるので、講義中の課題に積極的に取り組めるよう日頃から学修の醸成に努めること。							
VI. 使用教材							
教科書：拓殖大学政経学部 編『大学生 学びのツール 改訂版 (新入生ガイドブック)』 参考書：井下千以子『思考を鍛えるレポート・論文作成法』(慶應義塾大学出版会) 佐藤肇『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』(慶應義塾大学出版会)							

科目名	S D G s 基 礎	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
「貧困、紛争、気候変動、感染症。人類は、これまでになかったような数多くの課題に直面しています。(中略)課題を整理し、解決方法を考え、2030 年までに達成すべき具体的な目標を立てました。それが『「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals : SDGs)』です」(ユニセフ協会のサイトより) 本講義ではこの SDG s について解説し理解を深めることを目的としている。 到達目標は以下のとおりである。 ・SDGs が出てきた背景やその基本的な概念が理解できる。 ・SDGs の概念を表す構造モデル「SDGs ウェディングケーキ」の土台に位置する環境問題の内容が理解できる。 ・持続的な社会の達成・環境保全に向けて人類がどう対処すべきかを理解する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥水・衛生 ⑦エネルギー ⑨イノベーション ⑩都市 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑭海洋資源 ⑮陸上資源 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. SDGs とは何か? 2. 地球規模の環境問題 3. 地球の温暖化問題 4. 気候変動と感染症・パンデミック 5. 生物多様性の喪失 6. 深刻化する砂漠化問題 7. 地下水枯渇と塩害・土壌流亡 8. 日本の環境問題とエネルギー 9. ジェンダー平等 10. 平和を構築するために 11. 人工化学物質のリスク管理 12. 海洋プラスチック問題 13. 森林の働きと森林破壊 14. 過放牧・加工型畜産 15. 地球環境問題とグローバルな生き方							
III. 講義の進め方							
対面授業を基本とするが、オンデマンド授業で行う可能性もある。 授業計画に沿って、資料を配布し、パワーポイントを用いて講義する。 7 名の教員が各 2 回ずつ担当する方式で行うことを予定している。 授業方法については、掲示板と Active mail で連絡するので、必ず確認すること。							
IV. 試験と成績評価							
中間レポート (50%) と期末レポート (50%) によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。							
V. 授業外学修							
SDGs が解決をめざす諸問題の原因・対策の方向性を考えられるように、普段からグローバルな視点に立って自ら考え行動できるようなヒントを得られるように授業を進めるが、日常的に社会や環境問題に関する体験や記事をノートに書き出して出席すると理解が深まるのでぜひ実行してもらいたい。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない。適宜資料を配布する。 参考書 : 改訂 8 版 環境社会検定試験 eco 検定公式テキスト。							

科目名	情報リテラシー I	教員名	よねの 米野 祐司	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
リテラシーとは「読み、書き」という誰でも持っている基本的な能力を意味する言葉である。情報リテラシーとは「読み、書き」という誰にでも持っている基本的な能力と同じように、パソコンによる情報処理能力を持つということである。本科目では、実習を通じ、基礎的なコンピュータの知識と利用技術を習得する。大学での情報活用能力の教育は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の瓢窃などの「倫理」への配慮、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・文書作成技術を習得し、レポート作成や卒業論文等に活用できる。 ・プレゼンテーションに係る双方向コミュニケーションの基礎的な技能を習得し表現できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 情報ガイダンス コンピュータ環境の利用（第1章） 2. 情報倫理とセキュリティ（第1章） 3. 情報収集とコンピュータ（第1章） 4. コンピュータの基礎知識（第1章） 5. Microsoft Word の基本操作（第2章） 6. 文書作成の基礎（第2章） 7. 文字列の検索／置換・画像や図形の編集（第2章） 8. 表とグラフの作成と編集（第2章） 9. レポート・論文を書くときに利用する機能（第2章） 10. レポート・論文を書くときに利用する機能（第2章） 11. Microsoft PowerPoint の基本操作（第4章） 12. スライドデザインとレイアウトの選択・図やサウンド、ビデオの挿入（第4章） 13. 表とグラフの作成・効果的なプレゼンテーション（第4章） 14. スライドの編集・プレゼンテーションの実行（第4章） 15. プレゼンテーション資料の作成（第4章）							
III. 講義の進め方							
Microsoft Word・Microsoft PowerPoint の基礎的な知識について実習する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎日の実習課題提出（80％）授業への参加（意欲）状況（20％）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修							
教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材							
教科書：『大学生の知の情報スキルーWindows10・Office2016 対応ー』共立出版							

科目名	情報リテラシーⅡ	教員名	よねの 米野 祐司	開 講	農学ビ ジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
リテラシーとは「読み、書き」という誰でも持っている基本的な能力を意味する言葉である。情報リテラシーとは「読み、書き」という誰にでも持っている基本的な能力と同じように、パソコンによる情報処理能力を持つということである。本科目では、実習を通じ、基礎的なコンピュータの知識と利用技術を習得する。大学での情報活用能力の教育は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の瓢窃などの「倫理」への配慮、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・表作成における正確な操作や、基本的機能が活用できる。 ・数値データを整理し、分析、考察することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. Microsoft Excel の基本操作、データ分析とその表現（第1章） 2. データの入力と表示形式（第1章） 3. オートフィル機能の活用、表の作成と印刷（第1章） 4. 関数の利用（第2章） 5. 関数の利用（第2章） 6. 関数の利用（第2章） 7. 関数の利用（第2章） 8. 関数の利用（第2章） 9. グラフの作成と編集（第4章） 10. グラフの作成と編集（第4章） 11. データの並べ替えと抽出（第3章） 12. データの並べ替えと抽出（第3章） 13. データベースとしての取扱い（第3章） 14. データベースとしての取扱い（第3章） 15. データベースとしての取扱い（第3章）							
III. 講義の進め方							
Microsoft Excel の基礎的な知識について実習する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎日の実習課題提出（80％）授業への参加（意欲）状況（20％）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修							
教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材							
教科書：『大学生の知の情報スキルーWindows10・Office2016 対応ー』共立出版							

科目名	キャリア・プラン I	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、就農・農業法人就職、農業関連産業等への就職、四年制大学への編入など、卒業後の進路希望に応じたクラスごとで展開する。 自己の生き方を探求するという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度やコミュニケーション能力を養う。自己の充実や生き甲斐を目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を育成しながらビジネススキル(文章力、話す力、論理構築力など社会に出てからの仕事遂行能力)を高める。 到達目標は以下のとおりである。 ・自分を知り、社会・職業・学問等を学ぶことで将来の進路を考え、自分の興味・関心・能力・適性にあった進路計画を立てることができる。 ・「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」を向上させて、自己のライフプランが形成できる。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 大学での授業の受け方、過ごし方、履修指導 2. 進路学習セミナー、資格取得ガイダンス 3. 進路別特別演習 4. 進路学習セミナー、自己紹介発表 5. 自己分析、性格適性検査 6. 適性検査(クレペリン) 7. 未来の自分探し、進路探し、我が道等自己 PR 8. 課題「環境問題と農業」発表、意見交換 9. 課題「果たしたい社会貢献」発表、意見交換 10. 進路別特別演習 12. 進路別特別演習 13. 進路別特別演習 14. 進路別クラスガイダンス (合同) 15. 進路別クラス編成について (ゼミ別)							
III. 講義の進め方							
授業形態は、学年一斉、進路希望別等で学生の発表に基づく討論を中心に展開するとともに、進路別の取組課題を中心とした演習(進路別特別演習)を実施する。							
IV. 試験と成績評価							
学生個々の資質を高める取組を積極的に推進できたかを学生個々が行う発表・レポート (90%) 及び各種検定試験成績 (10%) を基に評価する。なお、発表・レポートについては、自分の興味・関心・能力・適性にあった進路計画を立てることができたか、「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」を向上させて、自己のライフプランが形成できたか、を評価する。							
V. 授業外学修							
「発表課題」について事前に充分調べることでそれぞれの発表者の考えが理解しやすくなる。また、意見交換での内容も深まります。 授業前に教科書を自ら読み込み、大学での学び方の理解を深めておくと、講義の受け方等の方法等に役立ちます。							
VI. 使用教材							
教科書 : 『大学生 学びのツール 改訂版 (新入生ガイドブック)』 拓殖大学政経学部編 参考書 : 各担当教員が適宜指示する。							

科目名	現代社会の憲法	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
憲法は、国家の権力を規制し、国民の自由を守るために制定されている。講義では、1. 国家を規制する法としての憲法の役割について解説すること、2. これから学習する社会科学（経済学、経営学、政治学、法学、心理学等々）の基礎を身につけることを目標として展開する。後半の講義は憲法の条文などの解説ではなく、現代社会における具体的な憲法の論点を取り扱う。4 年制大学編入希望者は受講を推奨する。 到達目標は以下のとおりである。 ・立憲主義的憲法の意味や役割、機能を理解できる。 ・基本的人権の歴史的な成立過程を理解し、日本国憲法における基本的人権の意味を理解できる。 ・現代社会における憲法の役割と法律の役割を区別して説明することができる。 ・公務員試験等で要求される憲法の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑩不平等 ⑤ジェンダー ①貧困 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. ガイダンス／憲法と社会科学 2. 社会科学の目的と学習方法 3. 概念と歴史 1：立憲主義憲法の意味 4. 概念と歴史 2：人権の成立 5. 概念と歴史 3：人権の限界 6. 概念と歴史 4：新しい人権 7. 概念と歴史 5：日本国憲法の誕生 8. 人権と平等 1：平等の概念 9. 人権と平等 2：アファーマティブ・アクション 10. 人権と平等 3：婚姻 11. 人権と平等 4：貧困と平等 12. 統治機構論 1：国家財政と民営化 13. 統治機構論 2：選挙と政策決定 14. 統治機構論 3：司法への国民参加 15. 統治機構論 4：安全保障と自衛隊							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知識の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの 3 つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1 と 2 は講義形式で行う。3 についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回については Blackboard を確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回については Blackboard を確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない。 参考書：必要な資料については授業中で適時紹介する。							

科目名	現 代 社 会 論	教員名	みなみ たかのり 南 孝典	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義の主たる目的は、現代社会の様々な問題について、そうした問題が引き起こされる要因や背景を理解することにある。現代社会の問題は非常に複雑なものになっているので、講義の中で様々な事例を取り上げて、そうした社会問題の背後にあるものを考えていく。 到達目標は以下のとおりである。 ・社会問題に関心を持ち、問題の解決に向けて粘り強く考えぬくことができる。 ・社会問題が生じる要因にも目を向けつつ、そうした問題について自分の考えを表明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑩不平等 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. ガイダンス 2. 性的マイノリティの問題 (1) 3. 性的マイノリティの問題 (2) 4. 教育をめぐる問題 (1) 5. 教育をめぐる問題 (2) 6. 少子高齢化をめぐる問題 (1) 7. 少子高齢化をめぐる問題 (2) 8. 生命倫理の問題 (1) 9. 生命倫理の問題 (2) 10. 生命倫理の問題 (3) 11. 現代の家族をめぐる問題 (1) 12. 現代の家族をめぐる問題 (2) 13. 表現の自由をめぐる問題 (1) 14. 表現の自由をめぐる問題 (2) 15. 現代の社会問題とその構造							
III. 講義の進め方							
プリントや映像資料などを活用する。毎回終了時にその日の内容に即した設問を提示するので、それに答える形で自分の考えをリアクションペーパーにまとめて理解を深める。							
IV. 試験と成績評価							
リアクション・ペーパー (50%) と試験 (50%) の結果をもとに成績評価を行う。それらの詳細については授業時に説明する。							
V. 授業外学修							
授業で取り上げるテーマに関連する日々のニュースに関心を持ち、自分の考えを整理しておくこと。また、授業時の配布プリントに示した参考図書なども参照して、授業内容の復習に努めること。							
VI. 使用教材							
教科書 : 特に指定しない。必要な資料を適宜配布する。 参考書 : 松野弘『現代社会論』ミネルヴァ書房、井上俊・伊藤公雄『自己・他者・関係』世界思想社、見田宗介『現代社会はどこに向かうか』岩波書店など							

科目名	インターシップ・研修	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は地域の担い手の育成および学生の職業能力の向上を、実地研修を通して養成することが目的である。企業・団体・事業所・農家・農場など、自分の関心に応じて研修先を選択し、実習計画を作成する。 研修先の紹介や検討、事前の準備などは1年の後期に配当される「キャリアプランⅠ」の授業と連動して行われる。基本的には長期休暇を利用し、合計で10～15日間の実地研修を行う。研修先により泊まり込みや日帰りなど実施形態は異なる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 勤労観や職業観の理解の深化を図り、将来の進路について考え、職業選択能力を養う。 ・ 新たな産業形成と雇用創出に向けた現状を理解し、農業および実務についての技術と知識を身につける。 ・ 社会人・農家・企業の人々との協働をととして、社会性やチームワーク力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2単位、研修日数：] 1. インターンシップ・研修の目標について 2. インターンシップの心構えについて 3. 研修先の選びかた・研修先の概要 4. 研修先の選択と確定 5. 研修先の調整 6. 研修基本資料の準備 7. 研修基本資料の作成 8. 研修先別の座学（企業・団体・農家・法人・その他） 9. 北海道農業の現状 10. 北海道農業の課題 11. 北海道における地域産業の現状 12. 北海道における地域産業の課題 13. 研修開始へ向けた準備作業（全体説明） 14. 研修開始へ向けた準備作業（研修日誌記入法、研修先ごとの準備、礼状等の書き方など） 15. 研修開始へ向けた準備作業（準備作業の点検）							
III. 講義の進め方 インターンシップ・研修の授業は、1年後期から開始されるキャリアプランと連動して実施される。全員での座学の講義、研修先毎のクラス別講義、一人毎の実地研修を通じて行われる。							
IV. 試験と成績評価 インターンシップ・研修の成績評価は、①研修中に作成する研修日誌、②教員による巡回指導状況、③研修先から返送される研修生評価表、④授業の取り組み状況の4つを総合して評価する。							
V. 授業外学修 研修先に応じて事前に課題を指示する。その内容のレポート作成と発表を行う。また、日頃から新聞・ニュースなどを通じて北海道の農業や産業などについて意識しておくこと。							
VI. 使用教材 教科書：指定しない 参考書：事前学習時に適宜指示する。							

科目名	ミュージカル I	教員名	担当教員	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	集中
I. 目的と内容および到達目標 拓大ミュージカルは全学科の学生からなる実行委員会形式によって運営されている。公演は毎年 2 月中旬に行われる予定である。実行委員会は、担当教員の指導の下、毎年 9 月下旬に結成され、5 か月間に渡って設定された授業時間および課外時間を使って活動している。公演を成功させるための活動は、演者以外にも衣装、大道具、小道具の製作、音響、チケット販売、パンフレット広告募集など多岐に渡るため、各部署に分かれて活動している。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標の達成のため努力することができる。 ・集団活動での責任感や協調性、主体性などを常に意識して活動することができる。 ・所属部署での役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、集中〕 〔後期〕 公演日は 2025 年 2 月中旬を予定。 以下の活動分野(所属部署)があり、それぞれの活動計画によって後期から制作が進められる。 <制作スタッフ> 1 キャスト 2 音響 3 舞台美術(大道具・小道具) 4 衣装 5 舞台監督 <事務局スタッフ> 1 総務・会計 2 広報渉外 各担当教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 ○ 菊地清大 講師（演技指導・舞台製作指導） ○ 藤井綾子 講師（衣装製作指導・ダンス指導） ※その他、演技指導アドバイザー・衣装製作アドバイザー等を置く。 ※キャストを含め、演目に見合う参加者が集まらない場合は、開講できないことがある。							
III. 講義の進め方 9 月下旬から 2 月中旬の公演日に向けて活動する。 通常時間中の活動は原則として月・金(16:00～17:20)、土曜(9:10～16:00)。 なお、土曜日、休暇期間中の活動は授業時間外(課外)活動となっている。 休暇期間を利用した活動は、日曜・祭日を除く平日(9:10～16:00)。ただし、年末年始の活動は実施しない。							
IV. 試験と成績評価 試験は実施しない。成績評価は活動実践(90%)及び活動記録シート(10%)で行う。							
V. 授業外学修 活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材 教科書：台本や楽譜など、必要な資料は、授業で配付する。 参考書：毎年、活動過程・公演を収録した DVD が製作されるので参考にして欲しい。							

科目名	総 合 英 語 I	教員名	平尾 政幸 ひらお まさゆき	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
学生達の中には高校時代に学習した英文法や講読は現場の英語で役に立たないと考えている人がたくさんいる。これは大きな間違いで、文法、講読の力は英語力の向上にとって不可欠である。大切なことは基礎力で、それを確立することがこの講義のねらいである。「読んで訳すことができれば満足」ではなく、それを生かして楽しみながら英語を使ってみることが大切である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基本的な英文法である不定詞、現在分詞を修得し、英文の基本的構造を理解することができる。 ・基本的な英文法である過去分詞、疑問を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・遺伝子工学、食物と健康、野生動物、テレビの影響に関する科学や社会に関する英文を和訳することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. オリエンテーション 2. 不定詞の用法（構文と練習問題）教科書：Lesson 1. 3. 不定詞の用法（語彙演習）（本文：遺伝子工学）教科書：Lesson 1. 4. 不定詞の用法（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 1. 5. ーing の用法（構文と練習問題）教科書：Lesson 2. 6. ーing の用法（語彙演習）（本文：野生動物）教科書：Lesson 2. 7. ーing の用法（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 2. 8. 過去分詞の用法（構文と練習問題）教科書：Lesson 3. 9. 過去分詞の用法（語彙演習）（本文：食物と健康）教科書：Lesson 3. 10. 過去分詞の用法（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 3. 11. 過去分詞の用法（語彙や表現を中心とした復習）教科書：Lesson 3. 12. 疑問を表す形（構文と練習問題）教科書：Lesson 4. 13. 疑問を表す形（語彙演習）（本文：テレビの影響）教科書：Lesson 4. 14. 疑問を表す形（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 4. 15. 疑問を表す形（語彙や表現を中心とした復習）教科書：Lesson 4.							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて熟読をしながら読んで、問題については、可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『In Plain English』佐藤 誠司 著（南雲堂） 参考書：少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	総合英語Ⅱ	教員名	平尾 まさゆき ひろお まさゆき 政幸	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
後期におけるこの科目については、語学学習の絶好の機会と考えて受講することが大切である。学生達の中には、前期を終了した時点での自分の語学力がそれほど伸びていないことに気付いてとまどっている学生もいることであろう。そのような時には、この授業で学ぶ文法、講読の力は英語の理解力の向上にとってとても重要な基礎力になるものであることを再認識するべきである。そしてこれら利用して英語の雑誌を読むであるとか小説を読むであるとか何か具体的な目標を立ててそれを実行していくことも大切である。「教科書だけできれば満足」ではなく、それを生かして楽しみながら実際の英語の理解に取り組んでみるのが大切である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基本的な英文法である 5 文型を発展させた文型を修得し、英文の基本的構造を理解することができる。 ・基本的な英文法である仮主語 it を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・手洗いと衛生、日本の商習慣社会、英語の聞き間違いをテーマとした文化に関する英文を和訳することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑥水・衛生 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. SVX（構文と練習問題）教科書：Lesson 5. 2. SVX（語彙演習）（本文：英語における聞き間違い）教科書：Lesson 5. 3. SVX（音読や筆記を中心とした復習）：Lesson 5. 4. SVOC（構文と練習問題）教科書：Lesson 6. 5. SVOC（語彙演習）（本文：手洗いと衛生）教科書：Lesson 6. 6. SVOC（語彙や表現を中心とした復習）教科書：Lesson 6. 7. SVOC（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 6. 8. SVOX（構文と練習問題）教科書：Lesson 7. 9. SVOX（語彙演習）（本文：日本の商習慣）教科書：Lesson 7. 10. SVOX（語彙や表現を中心とした復習）：Lesson 7. 11. SVOX（音読や筆記を中心とした復習）：Lesson 7. 12. it の用法（構文と練習問題）教科書：Lesson 8. 13. it の用法（語彙演習）（本文：アメリカ社会の銃）教科書：Lesson 8. 14. it の用法（語彙や表現を中心とした復習）教科書：Lesson 8. 15. it の用法（音読や筆記を中心とした復習）教科書：Lesson 8.							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて熟読をしてながら読んで、問題については、可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『In Plain English』佐藤 誠司 著（南雲堂） 参考書：少なくとも 7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株）大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅠ	教員名	平尾 まさゆき ひらお まさゆき	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 本授業は、Listening comprehension（聴解力）を始めとして、会話、筆記、読解力を含めた総合的な英語によるコミュニケーション能力を増強することを主たる目的としている。 到達目標は以下のとおりである。 ・仕事について話し合う時に使われる基本的な英語を聞き取ったり、伝えたりすることができるようになる。 ・レストランにおいて使われる基本的な英会話を聞き取ったり、英語で表現したりすることができる。 ・仕事のスケジュールに関して必要なことを簡単な英語で表現したり、聞き取ったりすることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [前期] 1. オリエンテーション 2. Jobs & Careers (Key Vocabulary and Listening, Conversation) (教科書：Unit 1.) 3. Jobs & Careers (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 1.) 4. Jobs & Careers (Short Reading) (教科書：Unit 1.) 5. Jobs & Careers (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 1.) 6. Entertainment (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 2.) 7. Entertainment (Conversation) (教科書：Unit 2.) 8. Entertainment (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 2.) 9. Entertainment (Short Reading) (教科書：Unit 2.) 10. Entertainment (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 2.) 11. Work Schedule (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 3.) 12. Work Schedule (Conversation) (教科書：Unit 3.) 13. Work Schedule (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 3.) 14. Work Schedule (Short Reading) (教科書：Unit 3.) 15. Work Schedule (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 3.)							
III. 講義の進め方 授業は、コミュニケーション能力の増強を目的として教科書やCDを使用しながら会話を中心に聴解を加え総合的能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価 学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）とクラス別の試験やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修 授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材 教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 参考書：少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（大修館）。 電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅡ	教員名	平尾 政幸 ひらお まさゆき	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 本授業は、前期で養った Listening comprehension（聴解力）を更に発展させながら、会話、筆記、読解力を含めた総合的な英語力を更に応用する形でコミュニケーション能力を増強することを主たる目的としている。 到達目標は以下のとおりである。 ・病院で医師に対して自分の言いたいことを簡単な英語で表現し、医師の言うことを聞き取ることができる。 ・買い物で使われる基本的な英語を聞き取ることができるようになる。 ・買い物で基本的なことを、英語で伝えることができる。 ・仕事のミーティングに関して基本的な英会話を聞き取ることができる。 ・仕事のミーティングに関して基本的なことを英語で表現することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑪実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. Health & Fitness (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 4.) 2. Health & Fitness (Conversation) (教科書：Unit 4.) 3. Health & Fitness (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 4.) 4. Health & Fitness (Short Reading) (教科書：Unit 4.) 5. Health & Fitness (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 4.) 6. Shopping (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 5.) 7. Shopping (Conversation) (教科書：Unit 5.) 8. Shopping (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 5.) 9. Shopping (Short Reading) (教科書：Unit 5.) 10. Shopping (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 5.) 11. Business Meeting (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 6.) 12. Business Meeting (Conversation) (教科書：Unit 6.) 13. Business Meeting (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 6.) 14. Business Meeting (Short Reading) (教科書：Unit 6.) 15. Business Meeting (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 6.)							
III. 講義の進め方 授業は、コミュニケーション能力の増強を目的として教科書やCDを使用しながら会話を中心にして聴解を加えて総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価 学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）とクラス別の試験やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修 授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材 教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 参考書：少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株大修館							

科目名	サステナブル・アグリカルチャー	教員名	たなか ひでひこ 田中 英彦	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
人類は、今世紀半ばには百億人を超える人口を養っていくことはできるのか、カロリーベースの総合食料自給率 38%の我が国は、今後も食料を海外に依存していくのか、持続可能な農業とはいかなるものか。本講義は、このような問題意識のなかで農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき農業のあるべき姿について環境保全型農業を中心とした理念と具体像を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 人類の農耕開始から現代に至るまで、農業が環境とどのようにかかわってきたかを正しく認識する。 ・ 急速に近代化した農業がどのような環境問題を抱え、これからの農業がどうあるべきかを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑧経済成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. サステナブルアグリカルチャーとは 2. 地球は人類を養うことができるのか 3. 自然生態系と農業生態系の違い 4. 実践編① 放牧酪農 5. 化学肥料の基礎知識 6. 減化学肥料の考え方 7. 実践編② 地域の有機質資源の有効活用 8. 化学合成農薬の基礎知識 9. 総合的有害生物管理（IPM）を理解する 10. 実践編③ 有機農業 11. 実践編④ 多品目有機農業 12. 実践編⑤ 野菜生産植物工場 13. 実践編⑥ 水稻の省力栽培・湛水直播栽培 14. 実践編⑦ 農業が地域を支える ～ CSA から ASC へ 15. 持続可能な農業をいかに実践するか							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施する。							
IV. 試験と成績評価							
毎回の小テスト（50%）と期末試験（50%）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。なお、期末試験については、自分のプリントやノートは持ち込み可とする。							
V. 授業外学修							
毎回配布するプリントだけではなく、ルーズリーフ等を活用して、授業ファイルを作成することを勧めます。予習として、関連する参考書を読んで生じた疑問点などをファイルに書きだして出席し、積極的に質問すること。復習として、プリントの記載だけではなく、ファイルに重要事項をまとめておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：プリントを毎回配付する。 参考書：『2020 年農業が輝く』相馬 暁（北海道新聞社）、							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における持続可能な農業と環境保全型農業の理念及び具体像、現代農業の環境問題について教授します							

科目名	農 業 の 基 礎 科 学	教員名	やまくろ 山 黒 よしひろ 良 寛	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 実習、演習を含めた環境農学コースの授業を理解するための基礎的スキルを学ぶことが本科目の目的である。 本科目の前半では農業生産に係る用語、単位および計算方法について学ぶ。次に、これまでに勉強してきた生物・化学をベースにして、農業生産に必要な植物の生理生態および作物の特性や光合成・遺伝などの分野について学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業を学ぶ上での生物・化学の基礎的リテラシーを身につける。 ・単位の変換、パーセントの計算を活用できる。 ・日常生活と関係の深い生物現象を通して、科学技術の進歩と農業生産の発展について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業週数：1 5 回] [前期] 1 農業現場で用いる単位、長さ、面積、重さ、体積、時間など単位の基礎と相互変換の考え方 2 単位を用いた計算の方法、パーセントの活用、肥料計算の基礎 3 物質の構成、物質の量と反応 ： 身の回りの物質、原子、分子 4 人間生活と農業と環境 ： 農業・農村の多面的な役割と農耕文化 5 日本農業の特徴 ： 農業総産出額と食糧自給率 6 農業と生物 ： 農業とは？ 生命現象とは？ 7 地球環境と生き物の形質 ： 進化と生き物の多様性 8 光合成 ： 生命の源・光合成、環境条件と光合成 9 植物の組織と器官 ： 器官と組織系、分裂組織、維管束系の細胞 10 遺伝 ： 連続する生命、メンデルの法則、ヒトの形質の遺伝、遺伝子と染色体 11 微生物と農業 ： 微生物の発見、微生物の発生、農業と微生物、病気と微生物 12 山野草 ： 農産物以外の食利用 13 日本農業基礎検定模擬試験Ⅰ ： 農業基礎検定の模擬試験と答えの解説 14 日本農業基礎検定模擬試験Ⅱ ： 農業基礎検定の模擬試験と答えの解説 15 農業の現状と農業の役割・機能、学習のまとめ							
III. 講義の進め方 プリントをベースに様々な関連資料を活用して講義をすすめる。単調な知識の羅列にならないように食料、環境問題などのトピックスを学んだ内容から解き明かすなど、考える授業としたい。理解度を確認するために小テストを実施する。 農業の基礎知識を習得させるため、日本農業技術検定の基礎問題に取り組む。							
IV. 試験と成績評価 小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。							
V. 授業外学修 「授業計画」にある内容について、参考図書を読んでから授業に参加すること。 配布されたプリントは、次の授業までに再度読み直して授業に参加すること。							
VI. 使用教材 教科書 ： 使用しない（プリントおよび関連資料を配付） 参考書 ： 鈴木正彦「園芸学の基礎」（農文協）							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業改良普及員としての実務経験を有し、当該科目における農業生産に係る用語、単位および計算方法、植物の生理生態について教授します。							

科目名	農 業 基 礎 実 習	教員名	岡田 佳菜子 上西 孝明	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
農業基礎実験・実習は、一年間をととして圃場および実習棟内で作物を扱い、農業の基礎を学ぶことを目的とする。圃場実習では、栽培経験が全くない学生を想定し、作物ごとに播種から栽培管理、収穫・出荷調製までを実習する。また、農作業機械の基礎についても学ぶ。 栽培試験では作物の計測方法、データの取り方、まとめ方、考え方を学ぶ。また、屋外・室内における植物の観察をととして、植物の体のしくみを学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物栽培の基礎を習得し、栽培暦を作成し、基本的な栽培管理が実践できる。 ・作物の生育調査・収穫調査をととして、作物の収量構成要素・内部品質について理解し説明ができる。 ・植物各器官の観察をととして、科学的思考力を伸ばし植物の体の仕組みについて理解し説明できる。 ・作物の栽培調査をととして、農業分野の発展を図る能力と態度を身につける。 ・科学レポートの書き方を理解し、科学レポートの作成ができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫生産・消費							
II. 授業計画（実習）[単位数：2単位、授業回数：30回]							
[前期]				2コマ連続授業			
1. オリエンテーション、ミニトマト播種 2. ミニトマト鉢上げ、ハウス展張、肥料計算 3. 水稻播種、葉物野菜播種、土壌改良資材計算 4. カボチャ、ストック播種、ミニトマトハウス準備 5. カボチャ鉢上げ、ミニトマト定植準備（灌水チューブ設置、マルチ設置）、ストック八重鑑別 6. ミニトマト定植準備（支柱立て、穴あけ）、バレイショ植え付け、タマネギ定植 7. 田植え、ミニトマト定植、葉物収穫調査、レポートの書き方 8. カボチャ定植、水稻苗観察、ニンジン播種 9. スtock定植、ソバ・コーン播種 10. ミニトマト整枝誘引、カボチャ整枝 11. バレイショ培土、農業機械説明 12. 水稻幼穂観察、ニンジン他除草、 13. タマネギ除草 14. スtock採花、ニンジン除草 15. エダマメ根粒菌調査、ミニトマト整枝誘引				[後期] 1. バレイショ収穫・調整、調査 2. コーン、エダマメ収穫 3. カボチャ収穫・調製 4. タマネギ収穫・調製 5. ソバ収穫・乾燥・脱穀・調整 6. ニンジン収穫・調製 7. 水稻収穫・乾燥・脱穀 8. 収穫物の製品作り 9. ミニトマトハウス片付け 10. 水稻収量構成要素の調査 11. バレイショレポート 12. 水稻レポート 13. 農業用語の整理 14. そば打ち 15. 栽培ごよみの作成			
III. 講義の進め方							
1. 気象条件により予定が変更されることがある。 2. 圃場実験は同じテーマに関して数回にわたって行われ、終了後にレポートを提出する。 3. 本実習はすべての講義科目と連動し、基礎となる科目である。意識して受講することを望む。 4. 圃場での実習は各回連続性があるので遅刻や無断欠席のないこと。 5. 実習服の指定はないが、清楚で実習しやすい服装であること。長靴は各自用意し、特に寒い時期は温かい服装を心がける。実習棟には各自のロッカーを用意するので整理整頓に努める。 6. 屋外での実習中は、教員が全体に目が届かないことがあるので、農場職員の指示・指導にも従うこと。							
IV. 試験と成績評価							
提出された実験・実習記録ファイル(10%)、レポート(40%)、小テスト(10%)、普段の実験・実習への達成度(40%)で評価する。また、無断で欠席しデータを得られない場合は、成績に係る。							
V. 授業外学修							
授業後に実習記録ファイルを整理し、農業用語および作業の意味に対する理解を深めること。事前学修として次週の授業テーマにあった課題を随時提出することから、積極的に取り組むこと。							
VI. 使用教材							
日誌・資料：各自に配布。但し、持ち帰り不可、所定の場所に保存する。							

科目名	農 産 加 工 実 習	教員名	畠山・二木 山黒・藤田	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
農産物加工・食品製造に関する知識、技術の中で本実習では基礎的、基本的な加工食品を体験的、実践的に学び食品素材の性質や加工方法の原理などを科学的な目で捉えながら実習を行い、食品製造や食品加工についての知識を深める。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品製造に関わる基礎的な技術と知識を体験的に理解する。(加工品の原理を説明できる) ・食品の主成分である炭水化物・脂質・蛋白質の化学や機能性等、農産物の加工をとおり化学的な意義について基礎的な理解を深める。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育、⑥水・衛生、⑫生産、消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：2 3 回]							
[前期]				[後期]			
1. 小麦に含まれるタンパク質(グルテンの抽出)				1. 麹菌、乳酸菌の顕微鏡観察			
2. 手ごねパンの製造実習				2. 豆乳を活用したフェイクミート製造実習			
3. 機械打ちパンの製造実習				3. マヨネーズ製造実習			
4. ロールパンの製造実習				4. 調理パンの製造実習Ⅲ			
5. 編みパンの製造実習Ⅰ				5. 手打ちウドンの製造実習（北海道産小麦）			
6. イチゴジャムの製造実習				6. 手打ちウドンの製造実習(本州産小麦)			
7. 編みパンの製造実習Ⅱ				7. 食パンの製造実習			
8. 菓子パン製造実習Ⅰ				8. カッテージチーズの製造実習			
9. ゆめぴりかを使用したパン製造							
10. 菓子パン製造実習Ⅱ							
11. 菓子パン製造実習Ⅲ							
12. 調理パン製造実習Ⅰ							
13. 水あめ（麦芽あめ）の製造							
14. 調理パン製造実習Ⅱ							
15. 乳酸飲料の製造実習							
III. 講義の進め方							
導入段階で製造 実験、製造実習の手順や方法を集中して説明した後、製造実習を中心に授業を展開する。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎回の実習レポート(80%)実技（20%）で評価することから、レポートには実習材料、方法、結果、考察を記述する。なお、実習レポートの作成に当たっては、実習中の観察記録に特に留意し、考察等を整理することが必要である。							
V. 授業外学修							
次週の製造実習内容について説明するので事前に調べることで食品製造の理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書 ：プリント適宜配布 参考書 ：							

科目名	地 域 振 興 論	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の目的は、地域振興の理論と実践を学び、多様な地域課題に対する理解を深めることである。日本のさまざまな地域が抱える社会的・経済的問題について、それらに対する総合的な視点と解決策を探る。受講生は自分の出身地域や関心のある地域の特徴を調査し、具体的な振興案を立案する能力を培うほか、地域の商店街振興活動への参画を通じて、地域振興の現場感を体験しつつ、当事者意識をもって地域の問題を検討する。 到達目標は以下のとおりである。 ・「地域」の課題を発見できる。 ・地域の課題の多様な考え方を知っている。 ・地域の課題解決を検討することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑨イノベーション ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑰実施手段 他							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 「地域」と地域振興 2. 人口減少と少子高齢化 3. 都市化・過疎化 4. 地域政策の歴史 5. 「地方創生」の総合戦略 6. 地域づくりの変遷 7. 地域課題の分析ツール 8. 地域の課題と分析 9. 地域の産業構造とその活性化 10. 地域移動と移住政策 11. 地域経済の分析視角 12. 地域活性化の実際 13. 地域経済の現状 14. 持続可能なまちづくり 15. まとめ：地域振興の多様性と近年の動向							
III. 講義の進め方							
スライド形式で講義を進行し、課題に毎回取り組んでもらう。また、関連する動画を副教材として用いて講義を進行する。なお、授業回の一部は学外実施授業・遠隔授業で開講する予定である。							
IV. 試験と成績評価							
授業時におこなう課題・平常点(80%)・小レポート(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
授業時または Blackboard 等で適時配信する資料には必ず目を通し、授業時に毎回提示する課題の復習をすること。また、市内の地域イベント等に積極的に参加し、地域コミュニティとの関わりをもってほしい。それによって、地域の課題を私事として考え、ひいては、出身地域その他への理解を深める機会となろう。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない。 参考書 : 資料とともに適時紹介する。							

科目名	社会調査の方法	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講	農学ビジネス学科	1年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
社会調査とは社会で起こっている出来事を、客観的に把握するための手法である。それはアンケート調査であったり、自治体などの人口の増減であったり、農地面積の変化であったり、大規模には国勢調査として全国民への調査だったり様々な種類がある。この講義では、社会に溢れているデータにはどのような種類があるのか、それらはどのように集められているのか、それはどのように活用できるかをあつかう。 到達目標は以下のとおりである。 ・世の中にはどのような調査があるのかを知る。 ・調査の基礎的な手法や種類を知っている。 ・調査で集められたデータがどのように活用できるのかを知る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 社会について「正しく」知ること 2. 調査されるという迷惑 3. 公的統計にはどのようなものがあるか 4. 社会調査の歴史 5. 社会調査の種類 6. 質的調査と量的調査 7. フィールドワーク 8. 社会調査のプロセス 9. 社会調査のデザイン 10. 実査の方法 11. 調査票の作成 12. 調査の実施 13. データの集計方法 14. データの分析方法 15. 調査をもとにしたレポートの作成							
III. 講義の進め方							
講義主体で進める。講義で使用したスライドなどは授業終了後にブラックボードに掲載する。毎回講義内容に関連する内容のリアクション・ペーパーを提出する。また、必要に応じて資料映像などの視聴も行う。講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
毎回講義後に課されるリアクション・ペーパー（60%）と学内で実施する調査に基づいたレポート（40%）で評価を行う。							
V. 授業外学修							
講義後に課されるリアクション・ペーパーが復習の課題となる。また、講義を欠席した場合は必ず欠席回の課題内容を確認して次の授業に参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 必要に応じて授業内で紹介する。							

科目名	1 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 ゼミナールは、各教員ごとに少人数のクラスで編成され、各学生はいずれかのゼミナールに所属する。1 年次に各学生が所属するゼミナール(以下、ゼミという)では、大学生生活を円滑に送るための支援をするとともに、他の科目の補助となる基礎を学ぶ。また、見学研修、農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会にはゼミ活動として参加し、農業への理解を深めるとともに、レポート作成をとおして「自ら学び・成長していく能力」(スタディ・スキル)の基礎を身につける。なお、ゼミ授業の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。学生には自己のスタディ・スキルを日常的に向上させる取組を奨励する。 到達目標は以下のとおりである。 ・履修科目の選定ができ、学習目標を設定できる。 ・設定された課題についてレポートにまとめることができる。 ・文章読解、文章表現、議論、調査、発表などの技法の基礎力を備えている。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 など							
II. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回] [前・後期] 授業は各ゼミの内容展開に応じて特定の課題に制約されずに展開される。なお、見学研修、農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会等への参加は「1 年ゼミナール」に位置づける。							
III. 講義の進め方 各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などを基に、各学生の自発・自主的な学習を中心とした進め方となる。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、ゼミ課題レポート (60%)、見学研修報告 (10%)、農場公開デー研修報告 (10%)、農業セミナー研修報告 (10%)、ゼミ成果発表会研修報告 (10%) で行う。 履修科目の選定ができ、学習目標を設定できたか、また、設定された課題についてレポートにまとめることができたか、評価する。							
V. 授業外学修 実習農場で栽培している作物の種類や試験課題を理解するとともに、図書館で保管されている先輩方の卒論を読んで自分自身で学習目標を出来るだけ早く設定することが大切です。							
VI. 使用教材 各ゼミ担当教員が「1 年ゼミナール」の時間に具体的に指示する。							

科目名	初 級 簿 記	教員名	わがつま きみひろ 我妻 公裕	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
生産したり、販売したりするビジネス活動の成果を貨幣で表す会計書類の作成技術を身につける。 その作成過程を通して、ビジネス活動（経営管理）にかかる知識を獲得し、課題解決につながる方策について考察できる論理的思考力を身につける。「簿記」を取引を記帳する技術として捉えるのではなく、経営資源の効率的な運用を記録するものとして捉えることで、「会計言語」の役割を理解する。 到達目標は以下のとおりである。 ・ビジネス活動における会計記録の役割を理解する ・ビジネス実務（取引）上の専門用語とその性質を理解する ・ビジネス活動の目的と評価のあり方を理解する <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：1 5 回]																																					
[前期] <table><tr><td>1. 簿記の役割、簿記の基礎と仕組み</td><td>(教科書スタートアップ 1、2)</td></tr><tr><td>2. 仕訳の基本（貸借対照表と損益計算書）</td><td>(教科書スタートアップ 2)</td></tr><tr><td>3. 資産・負債・資本、収益・費用の性質と区分</td><td>(教科書 Chapter 0 1)</td></tr><tr><td>4. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）</td><td>(教科書 Chapter 0 2)</td></tr><tr><td>5. 現金預金取引</td><td>(教科書 Chapter 0 3)</td></tr><tr><td>6. 手形・電子債権取引（債権・債務取引）</td><td>(教科書 Chapter 0 4)</td></tr><tr><td>7. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）</td><td>(教科書 Chapter 0 5)</td></tr><tr><td>8. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）</td><td>(教科書 Chapter 0 6)</td></tr><tr><td>9. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）</td><td>(教科書 Chapter 0 6)</td></tr><tr><td>10. 帳簿組織①（主要簿）</td><td>(教科書 Chapter 0 7)</td></tr><tr><td>11. 帳簿組織②（補助記入帳）</td><td>(教科書 Chapter 0 7)</td></tr><tr><td>12. 帳簿組織③（補助元帳）</td><td>(教科書 Chapter 0 7)</td></tr><tr><td>13. 帳簿組織④（試算表、貸借対照表、損益計算書）</td><td>(教科書 Chapter 0 8)</td></tr><tr><td>14. 決算①（決算整理）</td><td>(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)</td></tr><tr><td>15. 決算②（財務諸表の作成）</td><td>(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)</td></tr></table>								1. 簿記の役割、簿記の基礎と仕組み	(教科書スタートアップ 1、2)	2. 仕訳の基本（貸借対照表と損益計算書）	(教科書スタートアップ 2)	3. 資産・負債・資本、収益・費用の性質と区分	(教科書 Chapter 0 1)	4. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）	(教科書 Chapter 0 2)	5. 現金預金取引	(教科書 Chapter 0 3)	6. 手形・電子債権取引（債権・債務取引）	(教科書 Chapter 0 4)	7. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）	(教科書 Chapter 0 5)	8. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）	(教科書 Chapter 0 6)	9. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）	(教科書 Chapter 0 6)	10. 帳簿組織①（主要簿）	(教科書 Chapter 0 7)	11. 帳簿組織②（補助記入帳）	(教科書 Chapter 0 7)	12. 帳簿組織③（補助元帳）	(教科書 Chapter 0 7)	13. 帳簿組織④（試算表、貸借対照表、損益計算書）	(教科書 Chapter 0 8)	14. 決算①（決算整理）	(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)	15. 決算②（財務諸表の作成）	(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)
1. 簿記の役割、簿記の基礎と仕組み	(教科書スタートアップ 1、2)																																				
2. 仕訳の基本（貸借対照表と損益計算書）	(教科書スタートアップ 2)																																				
3. 資産・負債・資本、収益・費用の性質と区分	(教科書 Chapter 0 1)																																				
4. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）	(教科書 Chapter 0 2)																																				
5. 現金預金取引	(教科書 Chapter 0 3)																																				
6. 手形・電子債権取引（債権・債務取引）	(教科書 Chapter 0 4)																																				
7. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）	(教科書 Chapter 0 5)																																				
8. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）	(教科書 Chapter 0 6)																																				
9. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）	(教科書 Chapter 0 6)																																				
10. 帳簿組織①（主要簿）	(教科書 Chapter 0 7)																																				
11. 帳簿組織②（補助記入帳）	(教科書 Chapter 0 7)																																				
12. 帳簿組織③（補助元帳）	(教科書 Chapter 0 7)																																				
13. 帳簿組織④（試算表、貸借対照表、損益計算書）	(教科書 Chapter 0 8)																																				
14. 決算①（決算整理）	(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)																																				
15. 決算②（財務諸表の作成）	(教科書 Chapter 1 0、1 1、1 2)																																				
III. 講義の進め方																																					
積み重ね学習のため、講義を欠席しないこと。 毎時の講義後半に小テスト（理解度の確認）を実施する。 配布したプリントに記入しながら講義を進める。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（3 0 %）、小テスト（2 0 %）、前期終了テスト（5 0 %）を基本とする。 日本商工会議所主催の簿記検定に合格した学生（商業簿記 3 級以上の取得者）は、単位取得とする。																																					
V. 授業外学修																																					
毎時間に使用したプリントは本時了後に回収、次時の始めに採点後に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示するので、予め教科書にめを通してしておくこと。 教科書に掲載の練習問題に忘れずに取り組み、知識の定着を図ること。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書 ： みんなが欲しかった簿記の教科書（日商 3 級）（TAC 出版） 参考書 ： 理解度、検定試験受験級に合わせて別途指示する。																																					

科目名	農 業 簿 記	教員名	わがつま きみひろ 我妻 公裕	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
農業経営は栽培と飼育の生産物管理と経営管理の二面性から成り立っている。 経営管理（ビジネス・マネジメント）には、経営資源の配分が最も重要であり、持続と成長をもって農業経営管理かなされている。ここでは、個人経営事業主に必要な、会計上の管理能力を理解するため、農業簿記の基礎・基本を修得することで、国内の農業政策、世界情勢の変化による輸出入制限、気候や消費者の食生活動向等の影響などの課題解決に資する素養を身につける。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業簿記の仕組みを理解し、記帳技術を身につける。 ・農業ビジネスで行われる各種取引の理解を深め、利益獲得への方策を考えることができる。 ・税金、補助金等の処理について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：1 5 回]							
[後期]							
1. ガイダンス、農業簿記の基礎							
2. 農業経営		税務申告		(教科書第 1 章)			
3. 農業の取引と勘定科目				(教科書第 2 章)			
4. 簿記の手続きの流れ①		仕訳と転記		(教科書第 3 章)			
5. 簿記の手続きの流れ②		試算表		(教科書第 3 章)			
6. 収益・費用		農業の収益		(教科書第 4 章)			
7. 流動資産				(教科書第 5 章)			
8. 補助記入帳・補助元帳				(教科書第 5 章)			
9. 負債				(教科書第 5 章)			
10. 固定資産				(教科書第 6 章)			
11. 決算書作成① 棚卸表				(教科書第 7 章)			
12. 決算書作成② 決算整理①		資産評価・償却資産		(教科書第 7 章)			
13. 決算書作成③ 決算整理②		費用の見越・繰延		(教科書第 7 章)			
14. 決算書作成④ 課税所得				(教科書第 8 章)			
15. まとめ（原価計算の役割）							
III. 講義の進め方							
積み重ね学習のため、講義を欠席しないこと。 毎時の講義後半に小テスト（理解度の確認）を実施する。 配布したプリントに記入しながら講義を進める。							
IV. 試験と成績評価							
授業プリント（30％）、小テスト（20％）、前期終了テスト（50％）を基本とする。 詳細は、講義時に説明する。							
V. 授業外学修							
復習に重点を置き、取引の内容の理解とともに、反復して仕訳の学習を行うこと。 特に、仕訳から取引を想起できることで、記帳上のケアレスミスを減らせることにつながる。 農業簿記特有の用語が多いので、性質を含め理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：農業簿記検定教科書 3 級（大原出版株式会社） 著者 一般社団法人 全国農業経営コンサルタント協会 学校法人 大原学園大原簿記学校 参考書：必要に応じて指示する。							

科目名	異文化交流 I	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
これまでの生活圏や、文化、言語の異なる学習者同士が、協働学習により交流を経験するための科目である。この授業で扱う協働学習は、日本人と留学生だけでなく、日本人同士、留学生同士の協働も含む。この交流により多様性、文化、他者、自己の理解を考える。授業の展開は履修する学生により多少変動する場合もある。多様な学生が集まるのが短期大学の特徴でもあるので、お互いの理解を深めることを目的である。授業は学生間のコミュニケーションを中心に進む。 到達目標は以下のとおりである。 ・異なる文化との交流の意義を理解する ・論理的・批判的思考を身につける ・コミュニケーション能力を向上させる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑰ パートナリシップ							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 授業概要と異文化交流の重要性 2. 文化の定義と特徴 3. 文化の相違点と類似点 4. 国・言語と文化 5. ケース・スタディ：文化の衝突？ 6. 性差と文化 7. ケース・スタディ：性差の衝突？ 8. 世代と文化 9. ケース・スタディ：世代の衝突？ 10. 職業と文化 11. ケース・スタディ：職業の衝突？ 12. 地域と文化 13. ケース・スタディ：地域の衝突？ 14. 文化的バイアスと偏見 15. 多様性を理解するには							
III. 講義の進め方							
この講義は「講義」と「ディスカッション・パート」(DP) の二つからなる。DP では時事的な問題や学生の体験を交えながら、受講者で議論をおこなう。受講学生は主体的な議論への参加が求められる。毎回ディスカッションを行うため遅刻者には十分注意をすること。講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業への貢献度 (60%) と毎回課すリアクション・ペーパー (40%) により評価をする。授業への貢献度の詳細は、ディスカッションと発表であるが、評価方式の詳細は授業で説明する。							
V. 授業外学修							
日頃から日本国内外や各地域で起こっているニュースなどに関して接していることが重要である。授業で扱う事例や時事問題などは、事前・事後に資料を配付する。それらを読むことが授業外の学習となる。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 必要に応じて紹介する。							

科目名	異文化交流Ⅱ	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講	農学ビジネス学科	1年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 これまでの生活圏や、文化、言語の異なる学習者同士が、協働学習により交流を経験するための科目である。異文化交流Ⅰで学習した内容をさらに広げることを目的とするが、Ⅰを受講していない学生も履修可能である。Ⅰでは事例やお互いの体験を「知る」ことに主眼が置かれているが、Ⅱでは「知った」あとどのように考え、行動をしたら良いのかにも踏み込んで検討を行う。授業は学生間のコミュニケーションを中心に進む。 到達目標は以下のとおりである。 ・異なる文化が対立する理由を考えられる ・対立を解消するための基礎的な手法を理解する ・無意志のバイアスの存在を意識できる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑪ パートナリシップ							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [後期] 1. 授業概要と異文化交流の重要性 2. 文化の多様性と変化の理解 3. グローバル化と文化の影響 4. 宗教と文化 5. ケース・スタディ：宗教の衝突？ 6. 食と文化の関わり 7. ケース・スタディ：食文化の衝突？ 8. 環境と文化 9. ケース・スタディ：環境の衝突？ 10. 家族と文化 11. 教育システムと文化 12. 家族構造と文化の違い 13. 文化的誤解とその解決方法の実践 14. 文化的バイアスと偏見の克服法の探求 15. 多様性と共生の促進方法の検討							
III. 講義の進め方 III. 講義の進め方 この講義は「講義」と「ディスカッション・パート」(DP)の二つからなる。DPでは時事的な問題や学生の体験を交えながら、受講者で議論をおこなう。受講学生は主体的な議論への参加が求められる。毎回ディスカッションを行うため遅刻者には十分注意をすること。講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 IV. 試験と成績評価 授業への貢献度(60%)と毎回課すリアクション・ペーパー(40%)により評価をする。授業への貢献度の詳細は、ディスカッションと発表であるが、評価方式の詳細は授業で説明する。							
V. 授業外学修 V. 授業外学修 日頃から日本国内外や各地域で起こっているニュースなどに関して接していることが重要である。授業で扱う事例や時事問題などは、事前・事後に資料を配付する。それらを読むことが授業外の学習となる。							
VI. 使用教材 VI. 使用教材 教科書 : 使用しない 参考書 : 必要に応じて紹介する。							

科目名	海外研修	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、海外における研修および諸活動を対象とし、海外研修前後に単位認定に関わる所定の申請を行った者を対象に、学科会議等の審査を経て単位を付与するものである。 拓殖大学で実施される海外研修については、あらかじめ所定の手続きを済ませ、参加の可否は学内及び主催者による選考によっている。 到達目標は以下のとおりである。 ・本学開講科目と関連する研修において研鑽につとめ、研修後に本学学習に生かせる。 ・海外生活を体験することにより、グローバルな視点を養い、広く社会に貢献できる人間になる。 ・海外生活における必要なコミュニケーション能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、現地研修日数：2～3 週間程度]							
・拓殖大学が実施する海外研修の場合は、事前研修は拓殖大学において実施されるが、本学においてもレポート課題説明等の事前研修を他コース・他学科と合同で行う。 ・研修後にはレポート提出指導、報告会等の事後研修を他コース・他学科と合同で行う。 1. 海外研修応募のための書類作成・申し込み 2. 履修指導 3. 海外研修の単位認定の学務学生課への事前申請 4. 海外研修に関する諸手続き指導 5. 事前研修（現地事情、研修課題、外国語、危機管理） 6. 海外研修参加 7. 事後研修（修了報告書作成・提出） 8. 口頭発表 9. 修了報告書の学務学生課への提出 10. 単位認定の申請手続き							
III. 講義の進め方							
・海外研修申請書の記入に当たっては、選考に関わる重要書類であることから、ゼミ担当教員の指導を受けた上で内容を精査して行うこと。所定のスケジュールに従い選考手続き書類を提出する。 ・その他事務的な手続きについても学内の掲示などに注意が必要である。							
IV. 試験と成績評価							
・事前研修・現地研修・事後研修に関する評価をもとに、学科会議にて審議の上単位認定の可否を判定する。研修終了後はその旨ゼミ担当教員に申し出た上で、学務課窓口にて申請の手続きを行わなくてはならない。 ・拓殖大学実施の海外研修への参加の最終的な選考は学内で決定する。							
V. 授業外学習							
訪問地の地理的、文化的概況を事前に調査することで、語学以外のスキル向上につながる。 「百聞は一見にしかず」であるが、物見遊山ではないので、事後のまとめに必要な情報のメモを忘れない。 獲得した能力の活用方法、目的を明確にすることで、効果的な研修と進路実現に結びつけられる。							
VI. 使用教材							
教科書 : 担当教員の指示に従うこと。 参考書 : 担当教員の指示に従うこと。							

科目名	キャリア技能 A	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【玉掛け技能】 産業界の発展に伴い、生産及び流通段階では多様な荷物の運搬が増加し、クレーン等の運搬荷役機械の使用も増えている。農業分野においても、規模の拡大にともないクレーン等を使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、玉掛け作業に従事する者には玉掛けに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第 61 条では、つり上げ荷重 1t 以上の揚貨装置の玉掛け作業に従事する際には、玉掛け技能講習修了者等、一定の資格を持つ必要がある。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・玉掛け作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証の取得 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業日数：3 日]							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。小型移動式クレーン運転技能講習修了者は一部講習が免除となる。							
1 日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2 日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（ワイヤーと荷重、玉掛け作業） 3 日目 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（揚貨装置と玉掛け作業） 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 7~20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。6 名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2 枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能 A」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：玉掛け作業教本（株）PCT 参考書 ：							

科目名	キャリア技能B	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【小型移動式クレーン】 産業界の発展に伴い、生産及び流通段階では多様な荷物の運搬が増加し、クレーン等の運搬荷役機械の使用も増えている。農業分野においても、規模の拡大にともないクレーン等を使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、クレーン作業に従事する者には移動式クレーンに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第 61 条において、つり上げ荷重 1t 以上 5t 未満の小型移動式クレーンの運転業務に従事する際には、移動式クレーン運転士免許所持者または、小型移動式クレーン運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・移動式小型クレーン運転作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による移動式小型クレーン運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1 単位、授業日数：3 日〕							
〔後期〕 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。玉掛け技能講習修了者は一部講習が免除となる。 1 日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2 日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（運転のための合図） 3 日目 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（クレーンの運転と荷作業） 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 7～20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。6 名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2 枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による小型移動式クレーン運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能B」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書：小型移動式クレーン運転者教本（(株)PCT） 参考書：							

科目名	キャリア技能C	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【フォークリフト】 近年、物流システムの合理化と運搬荷役作業の省力化の進展に伴い、フォークリフトの普及が著しく進んでいる。農業分野においても、規模の拡大にともないフォークリフトを使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、フォークリフト作業に従事する者にはフォークリフトに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第 61 条において、最大荷重 1t 以上のフォークリフトの運転業務に従事する際には、フォークリフト運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・最大荷重 1t 以上のフォークリフト運転作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になる ・労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1 単位、授業日数：2 日〕							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1 日目 学科 フォークリフトに関する知識、原動機・走行装置に関する知識、荷役装置の構造・点検整備について 2 日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したフォークリフト作業 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 7~20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。6 名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証（大特）写し、写真（30×24mm）2 枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能C」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：フォークリフト運転者教本（株）PCT 参考書 ：							

科目名	キャリア技能D	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【車両系建設機械】 建設機械の導入は省力化や作業時間の短縮をもたらし、建設業、土石採種業、農林業など幅広い業種で広く使用されている。農業分野においても掘削用機械（油圧式ショベル等）や整地・運搬・積み込み用機械（トラクターショベル等）の導入が拡大しており、作業の安全性を確保するためには、それら機械に関する知識と技能の習得が不可欠である。また、労働安全衛生法第 61 条において、機体質量 3t 以上のショベル等の車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）の運転業務に従事する際には、車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1 単位、授業日数：2 日〕							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1 日目 学科 車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）に関する知識、油圧装置・走行装置に関する知識、トラクタ系、ショベル系建設機械の構造・取り扱いについて 2 日目 学科 車両系建設機械の安全、関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用した車両系建設機械（パワーショベル、ホイール式トラクタショベル）作業 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 7～20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。6 名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証（大特）写し、写真（30×24mm）2 枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能D」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書：車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転者教本（(株)PCT） 参考書：							

科目名	キャリア技能E	教員名	はたけやま 晶山 佳幸	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【食品衛生責任者】 食品衛生責任者は食品衛生責任者養成講習を受講した者などで、食品衛生責任者として選任されている者と定義している。食品衛生法に定められた許可営業者(食品衛生管理者の設置義務がある業種以外の飲食店営業など)は、営業許可施設ごとに食品衛生責任者を選任し保健所に届け出ることになっていることから、本養成講習を受講し、資格を取得する必要がある。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品衛生責任者養成講習会を受講し、食品衛生責任者資格を取得する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、集中講義]							
[集中] 1. 衛生法規(伝染病、疾病予防) 2. 衛生法規(環境衛生、労働衛生) 3. 公衆衛生学(食品衛生法、施設基準、管理運営基準等) 4. 食品衛生学(食品事故) 5. 食品衛生学(食品の取扱い) 6. 食品衛生学(施設の衛生管理、自主管理等) 7. 修了考査							
III. 講義の進め方							
社団法人 北海道食品衛生協会が企画・運営する食品衛生責任者講習会を受講する。講習会の開催日時や講習会場については別途連絡する。なお、本養成講習会受講者は別途講習料(8,000 円)を支払って受講する。							
IV. 試験と成績評価							
本養成講習会を欠かさず受講し、修了考査に合格した者は、食品衛生責任者資格が取得できると共に「キャリア技能E」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
食品を取り扱う際の衛生管理や過去に起きた食中毒や食品事故について事前学習しておくことにより講習会の内容理解が深まる。							
VI. 使用教材							
教科書 : 受講テキストは講習会当日、北海道食品衛生協会から支給される。							

科目名	キャリア技能 F	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講	農学ビジネス学科	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【ガス溶接技能】 可燃性ガスおよび酸素を使用して行う溶接や溶断の作業は、各現場で広く行われているが、使用機材の欠陥や不適切な作業方法による爆発や火災が発生することがある。農業分野においても各種機械や施設の修理・作成にガス溶接は欠かせない技能であり、その安全性を確保するためには、ガス溶接作業に従事する者にはガス溶接に関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第 61 条に基づく労働安全衛生規則では、可燃性ガスと酸素を用いて行う金属の溶接・溶断・加熱の作業に従事する者は、ガス溶接作業主任者の免許又はガス溶接技能講習の修了等であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・ガス溶接、溶断の作業に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1 単位、授業日数：2 日〕							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1 日目 学科 設備の構造・取扱いの知識、可燃性ガス及び酸素の知識について 学科 関係法令 学科試験 2 日目 演習 ガス溶接等の設備の取扱い実技							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 7～20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。6 名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2 枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能取り扱いに合格した者は、労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能 F」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：ガス溶接技能教本 ((株)PCT) 参考書 ：							

科目名	キャリア技能G	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講	農学ビジネス学科	1年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
【農業用ドローンオペレーター教習】 ドローンをはじめとするロボットやAI 技術を駆使した新しい農業スタイル「スマート農業」は、高齢化や人手不足が問題視されるなか、作業の効率化やコスト削減を実現する施策として期待されている。 農業用ドローンでの農薬散布が年々増加しているなか、適正な管理、操縦技術、法律を守った運用が望まれている。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業用ドローンでの農薬散布に必要な知識、技能の習得により安全に作業が行える。 ・農業用ドローンオペレーターの技能認定証を習得（対象機種 DGI 社 MG-1、T-10、T-20、T-30） <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業回数：5日〕							
出張技能講習依頼先のカリキュラムによる。							
1日目 学科 運用管理①（ドローンの概要）②（関連法律について） 散布飛行の知識①（オペレーターの心構え・機体の基礎知識・散布飛行について） 演習 散布飛行練習①～⑤（ドローンの操作実技） 2日目 学科 散布飛行の知識②③ 演習 散布飛行練習⑥～⑪ 3日目 学科 散布飛行の知識④ 農薬の知識①（農薬について使用に伴う注意事項） 演習 散布飛行練習⑫～⑰ 4日目 学科 農薬の知識② 作物保護の知識①②（作物保護、病害などについて） 筆記試験 演習 散布飛行練習⑱・実技試験 5日目 学科 自動航行について①～③（自動航行を活用した農薬散布について） 筆記試験（自動航行） 演習 自動航行の練習①～④（自動航行を活用した農薬散布についての実技）							
III. 講義の進め方							
教習の時期は8月下旬～後期開始までの5日間に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。本学にて出張技能講習を依頼先講師で行う。 事前に受講説明会を開き、受講費用（教科書、試験費含む）、受講申請書の書き方などを指導するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板に張り出すので見落とさないこと。							
IV. 試験と成績評価							
農業用ドローンオペレーター教習を受講し、合格した者は農業用ドローンオペレーターの技能認定証が交付されるとともに「キャリア技能G」1単位を付与する。							
V. 授業外学修							
技能講習は出張講習（北短分校）の形を取っており、学外の教習講師の指導を受けるので、学生らしい態度、実技の出来る服装を心掛け、講習をより良く理解するためドローンの基礎用語の予習をすること。							
VI. 使用教材							
教科書 : DJIA GRAS 教習所 学科テキスト 参考書 :							

科目名	作物栽培概論	教員名	岡田 佳菜子	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
人類は植物が生産する物質に依存して生きている。 作物とは何か、農作物の形態と機能そして発育の特性を学び、栽培環境との関わりに触れ、高生産的で持続的な作物生産を行うための基礎とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物を基本的な器官の形態と生長、役割について理解している。 ・収穫物の基本的な特性とその発現について理解している。 ・基本的な作物栽培管理技術の意味を理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓、⑨イノベーション、⑬気候変動、⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 作物とは何か 2. 作物の分類 3. 作物の品種 4. 作物の発育①発育とは 5. 作物の発育②発育と環境 6. 作物の形態と機能①種子、発芽、葉、茎 7. 作物の形態と機能②根、花芽形成、受精・受粉、子房、イモ 8. 作物の生長と光合成 9. 作物の生長と養水分吸収 10. 作物の品種改良と目標 11. 作物栽培の基礎①播種・育苗・定植 12. 作物栽培の基礎②生育制御 13. 作物栽培の基礎③収穫と調整 14. 作物栽培の基礎④作型・作付体系 15. 作物栽培計画							
III. 講義の進め方							
教科書、プリント、プロジェクターを使用。 予習（小テスト）と復習（小テスト、スライド）をふくむ反復学習。							
IV. 試験と成績評価							
成績の評価は、小テスト（20%）、定期試験（80%）から評価する。							
V. 授業外学修							
作物は生命力にあふれた、素晴らしい機能と形態をもつ。作物の合理的な生長の姿に感心すること、そしてその作物を自分で育てたいという気持ちは、農業をはじめるスタートである。農場の作物を定期的に観察しながら理解をすすめてほしい。 新しく学ぶ農業用語はノートに整理をしながら復習をしてください。次週の内容に関わる予習課題を出しますので、挑戦してください。							
VI. 使用教材							
教科書：園芸学の基礎（農文協） 参考書：みんなの農業教室（農文協）							

科目名	土 壌 管 理 学	教員名	あさひ だいじ 安積 大治	開 講	農学ビ ジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
土壌は作物生産の基盤であるとともに、地球上の様々な物質循環に大きな役割を果たしている。しかしながら我が国の教育課程では土壌について学ぶ機会ほとんどない。近年世界的に土壌の劣化や生産性の低下が大きな問題となっており、土壌の持続的な管理の重要性が増している。土壌に関する知識は農業生産にとどまらず、環境問題を考える上でも重要である。 本科目では、土壌の種類、成り立ちや特徴、環境問題との関わりなど、土壌に関する広範な知識を学び、特に農業生産における土壌の役割や、生産力を将来にわたって持続していくために必要な土壌管理に関する知識を習得することを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・土壌に関する基礎的な用語を習得し、土壌の種類とその成り立ち、特徴などに関する基礎的な知識を理解する。 ・土壌の物理性、化学性、生物性と、農作物の生産性との関わりについての知識を理解する。 ・土壌の持続的な生産性を維持するための土壌管理に関する知識を理解する。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ②飢餓 ③保健 ⑥水・衛生 ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 土壌とは何か 2. 土壌の生成 3. 土壌の種類と分類、代表的な土壌とその特徴 4. 土壌の物理性1 土性、三相分布、 5. 土壌の物理性2 保水性 排水性 6. 土壌の物理性3 診断と改善対策 7. 土壌の化学性1 pH EC 8. 土壌の化学性2 CEC 9. 土壌の化学性3 交換性塩基（カリウム、カルシウム、マグネシウム） 10. 土壌の化学性4 リン酸 11. 土壌の化学性5 窒素 12. 土壌の化学性6 微量元素・重金属 13. 土壌の生物性 14. 有機物 15. 土壌と環境 ※進捗状況や理解度などにより、講義順等を変更する場合がある。							
III. 講義の進め方							
プリント資料に沿って、パワーポイント等で内容を補足しながら講義を行う。毎講義後に小テストを実施して理解度を確認しつつ授業を進める。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト成績（50%）、課題レポート（30%）、授業への出席状況および授業態度（20%）などを総合的に勘案して評価を行う。							
V. 授業外学修							
・講義で配布するプリント資料の内容は次週以降の講義とも深くかかわることから、特に講義で指摘した事項については、復習を行って次の講義に備えること。 ・講義において、広範な知識や理解を深めるための参考書籍等を紹介するので、積極的に活用すること。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない。プリント資料を配付する。さらに理解を深めるには以下の参考書を学習されたい。 参考書：「新版 土壌学の基礎」松中照夫（農文協） ISBN 9784540171055 「新版 土壌肥料用語事典 第2版」藤原俊六郎ら（農文協） ISBN 9784540082207 「北海道施肥ガイド2020」北海道農政部（北海道農業改良普及協会） ISBN 2300100274706							

科目名	病 害 虫 管 理 学	教員名	堀田 治邦 ほりた はるくに	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
農作物を栽培すると必ず病害虫が発生し、被害を受ける。これら被害を軽減するにはさまざまな防除手段を講ずる必要がある。この授業では病害虫管理学を初めて学ぶ学生に対して、原因となる病害虫の種類や特徴、発生様式などを紹介し、基礎的な知識の習得を図る。また、防除手段の種類（耕種的、物理的、生物学的および化学的）を体系的に学び、病害虫の診断から防除までの一連の流れを習得する。加えて、防除の中心と位置付けられる農薬について、その種類や効果を解説し、安全な使用に当たっての基礎知識を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・病害虫に関する基礎知識を身につける。 ・病害虫を防除するに当たって、さまざまな防除法の知識を身につける。 ・農薬の種類や使用法を学習し、その安全性や効果的な防除体系を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫生産・消費 ⑬気候変動							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 病害虫による被害と社会的影響 2. 病害による被害 3. 害虫による被害 4. 病害虫発生の3要因 5. 病害虫の診断と予察 6. 耕種的防除法 7. 物理的防除法 8. 生物的防除法 9. 化学的（農薬）防除法 10. 殺菌剤の種類と効果 11. 殺虫剤の種類と効果 12. 農薬の正しい使い方 13. 農薬への耐性を持つ病害虫 14. 総合防除の考え方 15. 有機農業と病害虫管理							
III. 講義の進め方							
授業計画に従ってパワーポイントで講義を行う。講義資料（15回分）をまとめた冊子を初回講義時に配布する。各回の講義から得られた追加情報があればメモをとっていただく。途中にトイレタイムの休憩を設ける。							
IV. 試験と成績評価							
講義の理解度を評価するため毎回小テストを行う。また、冬休み前にレポート問題を配付し、最終講義までに提出していただく。評価は小テスト50%、レポート30%、授業への参加状況（意欲・発表）20%の配分で総合的に勘案する。							
V. 授業外学修							
講義資料は授業の単位ごとに章立てしてあるので、これを基に予習に取り組んでいただく。講義から得られた情報は資料等にメモ書きするなど、理解を深めてもらう。章末に復習問題が設けてあるので、適時取り組んでいただき、より理解を深めていただく。							
VI. 使用教材							
教科書：使用せず、講義資料を配付する。 参考書：「北海道病害虫防除提要」北海道植物防疫協会							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における病害虫の基礎知識、防除法、及び農薬の使用方法・効果について教授します。							

科目名	スマート農業論	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
農業では人間の労働を軽減し、生産性を高めるために種々の農業機械が開発されてきた。現在、農業機械のない農業は考えられず、農業機械なしに農業経営を行うことは不可能である。労働の効率化、省力化、低コスト化、環境との調和を推し進め、安全・安心な農産物の生産が求められている。 この授業では、農業機械の基本的な原理とともに、各種作業機械について基本構造、作業について講述するとともに最新のロボット、AI、IoT 等の先端技術を活用したスマート農業技術の研究開発、社会実装に向けた取組等を紹介する。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物毎の機械化作業体系を理解し説明できる。 ・各作業機について理解し効率的作業を進めることができる。 ・スマート農業の基礎を理解する。 ・作業規模に合わせたスマート農業導入の検討ができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫持続可能な生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 基本単位系、農業の歴史と農業機械、スマート農業発達史 2. 機械化作業体系 3. トラクタの構造と機能 4. 内燃機関の種類と原理、主要構造と性能 5. その他の動力および農業機械 6. 耕耘整地作業機、播種、施肥機、移植機・栽培管理作業機（防除機） 7. 栽培管理機（中耕除草機）、収穫機、その他作業機 8. スマート農業の概要 9. リモートセンシング技術とその活用 10. GPS による自動制御について 11. 環境制御技術とその活用 12. 遠隔操作技術とその活用 13. 農業用ロボット技術とその活用 14. 農業用ドローン等について 15. 農作業の安全							
III. 講義の進め方							
一般的な板書、ppt と補足プリント資料の説明による授業を行う。 必要に応じて外部専門家からの話を聞く。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト・リアクションペーパー(30%)、レポート(30%)、授業に対する姿勢（40%）により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
営農に不可欠な農業機械・スマート農業を効率的に行うため、予習・復習により理解を高める。 授業の進行に合わせて予習・復習の内容を適時指示する。							
VI. 使用教材							
教科書 ： 参考書 ：授業内で紹介する							

科目名	農 業 機 械 研 修	教員名	じょうにし 上西 孝明	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
道立農業大学校農業機械研修センターにおいて、トラクタ基本操作+機械作業スキルアップ研修の講習に参加して研修を行う。トラクター、作業機の操縦及び農業機械の構造と整備方法、安全利用など専門知識について、学科と実技を習得する。本研修受講者は農業機械学（1 年前期）の単位を取得していることが必須である。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業機械に関する専門知識を習得し、自分で簡易な修理を行うことができる。 ・トラクタ、トレーラーの運転操作、作業技術を習得し実践する力を備える。 ・自動操舵運転等の農業機械のICT技術の理解が進む。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、研修日数：5 日]							
[前期]							
1 日目 学科 農作業事故の実態とトラクタ作業の安全確保、危険予知トレーニング（KYT） 基本作業と耕法（プラウ、ロータリー）							
2 日目 演習 工具取扱い、トラクタの仕業点検							
3 日目 演習 トラクタの簡易整備 1 作業機の着脱と調整 8（プラウ、ロータリー、ディスク）							
4 日目 演習 耕起・整地作業の実践、自動操舵システム							
5 日目 演習 ガイダンスシステムと航空写真に基づく可変施肥、トラクタの簡易整備 2							
III. 講義の進め方							
研修の時期は 1, 2 年次 8 月下旬～9 月上旬の 5 日間であり、道立農業大学校農業機械研修センター（中川郡本別町）にて全寮制で行う。拓大では研修前に事前授業を実施する。研修日程の詳細は各学期始めに農業大学校より提示されるので、事前授業で連絡する。事前授業では研修の概要を説明し、各自願書を書いて提出してもらう。願書提出時には免許証サイズの証明写真（3.0cm×2.5cm）1 枚、本人及び現住所の証明できる公文書の写しが必要。その他連絡事項は必要に応じて掲示板に掲示する。							
IV. 試験と成績評価							
農業機械研修センターからの成績 (80%) と受講中の寮生活における研修態度 (20%) の報告をもとに評価する。							
V. 授業外学修							
農業機械研修受講には「農業機械学」（1 年前期科目）の単位が必須。受講者はトラクター等の運転をするので大型特殊免許の取得を推奨する 営農に不可欠な農業機械を効率的に使用するため 予習、復習により理解を高める。							
VI. 使用教材							
教科書 : 農大推薦教科書使用							
参考書 :							

科目名	作物育種学概論	教員名	佐藤 毅 さとう たかし	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
人類はこれまで生活の中でさまざまな植物と関わりを持ち、栽培環境下で最大限の特性を発揮できるように作物を改良してきた。経験の蓄積と鋭い感性（勘）のもとに行われてきた作物育種は、メンデルの法則の発見に端を発する遺伝学をもとに、遺伝子を念頭においた意図的・計画的なものに変貌した。その作物育種学を体系的に理解するために、栽培植物の起源・品種改良の歴史から入り、遺伝学・育種学の基礎を示す。そのあとに自殖性・他殖性および栄養繁殖性作物を例に育種技術を解説する。また、生物工学技術（バイオテクノロジー）を概説し、細胞組織培養技術の基礎と品種改良への事例を紹介する。さらに、技術的進歩が著しい分子育種の基礎を示し、DNA マーカーや遺伝子組換え、ゲノム編集を利用した分子育種の実際を解説する。最後に作物育種や栽培に重要な植物遺伝資源について学ぶ。 本講義では、作物育種学の基礎、農作物で利用されているバイオテクノロジーの基本知識と利用状況、さらに今後の方向性について考える。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物における遺伝の原理と品種開発の方法について説明できる。 ・生物工学分野を理解し、農業に役立てるための知識を備えている。 ・作物の遺伝子組換えとゲノム編集技術の基礎を理解し、農作物での利用と問題点について考察できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ③保健 ⑥水・衛生 ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期]							
1. 作物育種学の歴史・基礎 2. 遺伝学および育種学の基礎 3. 農作物の品種開発 (1) 育種の原理 と自殖性作物 4. 北海道水稻育種の実際（道総研農試の良食味品種育成について） 5. 農作物の品種開発 (2) 他殖性作物と一代雑種育種 6. 農作物の品種開発 (3) 栄養繁殖性作物と突然変異の利用 7. 栄養繁殖性作物の育種の実際（西洋わさびの育種について） 8. 細胞組織培養技術の概要 9. 細胞組織培養技術を利用した農作物の育種 10. 分子育種（ゲノム育種）の基礎 11. 分子育種（ゲノム育種）の実際 12. 遺伝子組換え技術とゲノム編集 13. 遺伝子組換え技術の安全性と規制 14. 夢の品種開発と食糧生産および植物遺伝資源 15. 作物育種学とは：おさらい							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってパワーポイント(内容はプリントで配布)で講義する。毎回の講義の最後に 10 分程度の小テストを行う。その日の講義のポイントを出題し、次回の講義日に採点した答案を返却する。小テストの問題が期末テストの問題の一部になるので、理解が不十分だったところを復習する必要がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎回の講義での小テスト（50%）及び期末テスト（50%）で行う。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある参考書の該当する章を読んで授業に参加すること。 授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示するので、読んだ上で生じた疑問や理解できなかった点を事前にノートに書き出して出席すると理解が深まる。							
VI. 使用教材							
参考書：『植物育種学 農学系のための基礎』 國武久ら（講談社）、『図解でよくわかる 品種・育種のきほん』 西尾剛（誠文社新光社）、『遺伝子とは何か』 中屋敷均（講談社ブルーバックス）、『日本の品種はすごい』 竹下大学（中公新書）、『農学基礎セミナー 植物バイオテックの実際』 大澤勝次・久保田旺（農文協）							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係]							
担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における作物育種の進化と技術、遺伝学・生物工学技術について教授します。							

科目名	農 産 物 利 用 学	教員名	はたけやま 島山 佳幸	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
人間は古くから様々な農産物を原料として各種加工食品を作り出してきた。本講義では、農産物等に含まれる成分の科学的な性質や各種加工食品の製造方法及び製造工程上における食品成分の変化を学び、農産物利用食品の問題点や特に穀類（小麦）の基礎的な加工方法と発酵食品について学ぶ。 農産物を利用し加工することというのは付加価値をつけるだけではなく、農産物の価値を下げないという利点もあることから 6 次産業化の大きな柱になり得る事を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・農産物、農産食品を構成している主成分の種類、性質の基礎的な知識を理解する。 ・農産物を利用した加工食品の特徴を理解し、加工技術と利用方法の基礎について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. (水分) 食品中の水の状態と働き（結合水・準結合水・自由水） 2. 小麦粉とは（小麦の構造・形状と種類・製造工程） 3. 小麦粉の成分（ビタミン・ミネラル・アミノ酸・澱粉） 4. 小麦粉の製粉工程と小麦フスマの利用と成分 5. 麦の違いと特徴・日本の小麦と世界の小麦 6. 強力粉と薄力粉の違い・小麦に含まれるタンパク質の違いと使い分け 7. 硬質小麦と軟質小麦の違い・小麦粉のブレンド・賞味期限 8. 小麦の澱粉（老化・パンの硬さ）アミロースとアミロペクチン・グルテン形成 9. 小麦から作られる加工食品（うどん・パン・パスタ等） 10. グルテンとアレルギー（アレルギー反応と小麦） 11. 発酵とは（微生物の働き・発酵食品をつくる微生物）発酵のしくみと化学反応 12. 腐敗・食中毒と微生物 13. 発酵食品の種類と製造法（味噌・醤油・ワイン・日本酒・チーズ・ヨーグルト等） 14. 豚肉の加工食品と種類別製造方法 15. 発酵・熟成で造られる肉製品（生ハム・ドライ・セミドライソーセージ）							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってプリント(参考資料)を中心に講義する。							
IV. 試験と成績評価							
農産物を構成している化学物質、農産物を利用した食品製造の特徴及び食品を構成している物質の特性について説明できることを到達目標とし、成績評価は、3～4 回の小テスト(33%×3・25%×4)で行う。							
V. 授業外学修							
授業の進行状況に合わせて次回の授業内容を説明するので興味、関心のある部分、疑問に思う部分についてノートにまとめておくと授業の理解度が高まります。 授業の進行に合わせて予習の範囲を適時指示する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 適宜プリント配布							

科目名	世界の食と文化	教員名	はたけやま よしゆき 畠山 佳幸	開 講	農学ビジネス学科	1年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
食文化の発展、普及をテーマに、調理、技術の研究、改善、栄養の確保に努め。広く健康文化に寄与するする司 厨士協会北海道地方本部の一流シェフが特別講師を務め、ライフ（食と文化、食と社会）ビジネス（食とプランニ ング、食とプロデュース）体験（食と理論、食と感性）の三つの側面から領域横断的に学びます。 到達目標は以下のとおりである。 ・食をとおして人や社会を幸せにする企画力や創造力を養う。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫持続可能な消費と生産 ⑨産業化・イノベーション							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. オリエンテーション・宗教や思想が関与する食生活 2. 世界と日本、北海道の食文化比較 3. 日本食文化と民族 4. 北海道郷土料理学 5. 北海道食産業発展の歴史と西欧料理変遷 6. 発酵食品学 7. 食・健康論 8. 食・健康栄養学 9. 食・サービス、ホスピタリティ論 10. 食卓マナーとプロトコール 11. 食・日本における食育論 12. 食・地域活性論 13. 食・観光ビジネス論 14. 食・商品開発論 15. これからの日本の食事・食生活・食文化							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿って三人のシェフが講義を行う							
IV. 試験と成績評価							
レポート（70%）及び課題（30%）の提出で評価を行う							
V. 授業外学修							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 :							

科目名	食 農 社 会 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
飢餓と飽食の併存、食の安全と安心が関心事となって久しいが、問題解決ははるかに遠いようにみえるなかで、国連でも確認されている「食料主権」という考えが注目を集めている。講義ではこの考えを意識しながら、主として現代日本を対象に「食と農」に関する現状と課題解決にむけた取り組みや条件などについて採りあげる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 飢餓と飽食が生み出される社会的要因・構造について基本的な理解ができる ・ 現代日本の食生活と農業の特徴についての基礎知識を持っている。 ・ 現代の食生活改善の取り組みについて理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ⑩不平等 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 「飢餓」「飽食」「安全」「楽しみ」——食に関するキーワードから 2. 現代日本の食生活は「豊か」か？——進行する「食の貧困」（教科書 1 章） 3. 「豊かな食」を作る人の「貧困」（教科書 2 章） 4. 現代日本の食生活——作られたのか？欲したのか？——「学校給食」を手がかりに（教科書 1 章） 5. 世界と日本の飢餓と貧困の実情紹介 6. 食品ロスの現状とそれが生まれる背景 7. SDGs からみた食と農——フードマイレージ、バーチャルウォーターなどを事例に 8. 食とコミュニティ——フードデザート問題を中心に 9. 産消提携、CSA(教科書 5 章) 10. 地域における食の問題解決の新しい取り組み事例紹介 11. 地産地消と北海道における地域経済循環（教科書 7 章） 12. スローフードと食育 13. フェアトレード、フードバンク、子ども食堂(教科書 1 章) 14. 「食料主権」とは？——その形成過程と食農問題解決における有効性(教科書 12 章) 15. 貧困、不平等、飢餓、健康格差、地球環境破壊、の解決をめざす食のあり方とは							
III. 講義の進め方							
講義形式で教科書、スライドを中心に用い、プリント配布、動画視聴などを適宜行う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)の合計で行う。							
V. 授業外学修							
・ 教科書の章が明記されている授業回では事前に該当する章を読んで授業に臨むこと。 ・ 食料・農業に関するニュースについて意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：冬木勝仁・岩佐和幸・関根佳恵編『アグリビジネスと現代社会』（筑波書房）。 参考書：大塚茂他『現代の食とアグリビジネス』（有斐閣）、藤原辰史『給食の歴史』（岩波書店）、藤原辰史『縁食論』（ミシマ社）、池上甲一他『食と農のいま』（ナカニシヤ出版）、池上申一他『食の共同体』（ナカニシヤ出版）							

科目名	日 本 酒 学	教員名	専任教員 非常勤講師	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 日本酒学をととして、日本酒の歴史・文化・分類・楽しみ方・風土など日本酒を育む背景を理解するとともに、酒米生産、醸造技術など日本酒ができるまでの過程を学習する。また、アルコール飲料にかかる法規制、アルコールと健康、販売戦略、日本酒による地域振興など、日本酒を題材にして幅広い内容を分野横断的に学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本酒醸造は我が国が誇るべき食品加工技術及び文化であることを理解する。 ・地域で生産された米を活用した日本酒造りの基礎的な知識と技術を理解する。 ・日本酒検定 3 級取得レベルの知識を得る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源 ③健康と福祉							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. 概説（清酒の歴史と文化、なぜ日本酒学を学ぶか） 2. 酒類総説（製造法・糖化、発酵、酒税法による分類） 3. 酒を科学し造り手を支える国税局鑑定官室の取り組み 4. 北海道における酒造好適米の生産と販売 5. 北海道における酒造好適米の品種改良と今後の課題 6. 北海道における酒造好適米の栽培技術 7. 発酵とは ～ 酵母と麹・微生物の世界 8. 日本酒の製造工程 9. 私の目指す酒造り 10. 酒蔵の経営とマーケティング戦略 11. 食彩豊かな日本の食卓 ～ 料理と酒のハーモニー 12. アルコール飲料にかかる法規制 13. アルコールと健康 14. 日本酒と地域振興 15. 総括 ～ 日本酒検定 3 級に向けて							
III. 講義の進め方 授業は、本学専任教員が専門分野に係る講義を行うほか、各界の専門家を非常勤講師に招いて、オムニバス形式で実施する。主に対面の講義形式で実施するが、場合によって Zoom 等を用いたオンライン授業を行う。 講師の都合などで、授業計画に変更があることに留意する。							
IV. 試験と成績評価 各授業における小テスト（100%）により評価する。							
V. 授業外学修 オムニバス形式のため、事前にプリントを配布することは難しいので、授業外学修は復習中心となる。 予習については、参考書等により関連する内容を予習し、疑問点を整理したうえで授業に臨むこと。 日本酒検定 3 級取得をぜひ目指してほしい。							
VI. 使用教材 毎回プリントを配布する。 参考書として、「新訂 日本酒の基 酒師必携」NPO 法人 FBO（料飲専門家団体連合会）を推薦する。							

科目名	食プロジェクトA	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
食料を生産し人の健康を守る一次産業、その中で北海道や地域にある農産物を活用し企業や自治体等と連携し新商品の開発に取り組み、様々な角度から物事を見る力を養い社会人としての基礎力を身につける。							
到達目標は以下のとおりである。							
・問題や課題を発見する能力、またどうすれば解決できるのかを考える力							
・							
・							
<SDGs（持続可能な開発目標）との関連>							
②飢餓 ⑫持続可能な消費と生産 ⑨産業化・イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 実施の場合				[後期] 後期実施の場合			
1. オリエンテーション（取組を考える）				1. オリエンテーションガイダンス（取組を考える）			
2. 取組についての計画立案				2. 取組についての計画立案			
3. 取組についての実技研修				3. 取組についての実技研修			
4. 取組についての実技研修				4. 取組についての実技研修			
5. 取組についての実技研修				5. 取組についての実技研修			
6. 実技研修での問題点、課題				6. 実技研修での問題点、課題			
7. 課題への取組実施				7. 課題への取組実施			
8. 課題への取組実施				8. 課題への取組実施			
9. 課題への取組実施				9. 課題への取組実施			
10. 課題への取組実施				10. 課題への取組実施			
11. 課題への取組実施				11. 課題への取組実施			
12. 実施後の評価と改善				12. 実施後の評価と改善			
13. 実施後の評価と改善				13. 実施後の評価と改善			
14. 商品試作				14. 商品試作			
15. 問題や課題、解決策を発表				15. 問題や課題、解決策を発表			
III. 講義の進め方							
オリエンテーション時に取組内容を説明し、座学と実技、企業や自治体等での実技または見学授業となる。							
IV. 試験と成績評価							
レポートの提出（60％）と発表（40％）とし評価する。							
V. 授業外学修							
企業や自治体等に出向く際は企業や自治体、また、使用する食材について事前学習しておく。							
VI. 使用教材							
教科書：							
参考書：各担当教員が適宜プリントを配布							

科目名	食プロジェクトB	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
食料を生産し人の健康を守る一次産業、その中で北海道や地域にある農産物を活用し企業や自治体等と連携し新商品の開発に取り組み、様々な角度から物事を見る力を養い社会人としての基礎力を身につける。							
到達目標は以下のとおりである。							
・問題や課題を発見する能力、またどうすれば解決できるのかを考える力							
・							
・							
<SDGs（持続可能な開発目標）との関連>							
②飢餓 ⑫持続可能な消費と生産 ⑨産業化・イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 実施の場合				[後期] 後期実施の場合			
1. オリエンテーション（取組を考える）				1. オリエンテーションガイダンス（取組を考える）			
2. 取組についての計画立案				2. 取組についての計画立案			
3. 取組についての実技研修				3. 取組についての実技研修			
4. 取組についての実技研修				4. 取組についての実技研修			
5. 取組についての実技研修				5. 取組についての実技研修			
6. 実技研修での問題点、課題				6. 実技研修での問題点、課題			
7. 課題への取組実施				7. 課題への取組実施			
8. 課題への取組実施				8. 課題への取組実施			
9. 課題への取組実施				9. 課題への取組実施			
10. 課題への取組実施				10. 課題への取組実施			
11. 課題への取組実施				11. 課題への取組実施			
12. 実施後の評価と改善				12. 実施後の評価と改善			
13. 実施後の評価と改善				13. 実施後の評価と改善			
14. 商品試作				14. 商品試作			
15. 問題や課題、解決策を発表				15. 問題や課題、解決策を発表			
III. 講義の進め方							
オリエンテーション時に取組内容を説明し、座学と実技、企業や自治体等での実技または見学授業となる。							
IV. 試験と成績評価							
レポートの提出（60％）と発表（40％）とし評価する。							
V. 授業外学修							
企業や自治体等に出向く際は企業や自治体、また、使用する食材について事前学習しておく。							
VI. 使用教材							
教科書：							
参考書：各担当教員が適宜プリントを配布							

科目名	フィールドワーク論	教員名	みなみ 南 孝典	開 講	農学ビジ ネス学科	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
フィールドワークは、他者と接合しつつ地域や人々について深く知る方法として文化人類学などで実践されてきた。この講義の目的は、そのようなフィールドワークの理念や方法を学び、それを実践できるスキルを身につけることにある。 到達目標は以下のとおりである。 ・フィールドワークの理念と方法について自分の言葉で説明できる。 ・フィールドワークの方法を用いて、地域社会などのフィールドを調査・研究することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑪持続可能な都市 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. ガイダンス 2. フィールドワークの理念と歴史 (1) 3. フィールドワークの理念と歴史 (2) 4. フィールドワークの理念と歴史 (3) 5. フィールドワークの実践例 (1) 6. フィールドワークの実践例 (2) 7. フィールドワークにおける様々な方法 (1) 8. フィールドワークにおける様々な方法 (2) 9. フィールドワークにおける様々な方法 (3) 10. 調査の準備 (1) 11. 調査の準備 (2) 12. 調査 (1) 13. 調査 (2) 14. 調査 (2) 15. データ整理の方法							
III. 講義の進め方							
PowerPoint・プリント・映像資料などを活用して授業を行う。また実践を重視する授業であるため、実際に地域に調査へ出かけることも検討している。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト (20%) と調査研究の成果としてまとめた課題レポート (80%) をもとに成績評価を行う。詳細については授業時に説明する。							
V. 授業外学修							
フィールドワークの理念や技術を身につけるため、配布プリントを見直すなどして事後学習に努めること。また調査の事前準備が非常に重要なので、そのような準備学習にも力を注ぐこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない。必要な資料を適宜配布する。 参考書 : 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社、箕曲在弘ほか『人類学者たちのフィールド教育』ナカニシヤ出版、須藤廣『観光化する社会 観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版							

科目名	地域づくりの経済学	教員名	むらかみ りょういち 村上 良一	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
「ひとり一人が輝き、自然環境と人間社会が持続的に発展できるような地域づくりをするためにはこの地域内再投資力を住民自治と結びつけて、そのネットワークを押し広げることが決定的に重要である」(参考文献①はじめにより)本講義ではこのことを解説する。このことを通じて地域づくりに役立つ経済学を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・グローバル化によってなぜ地域は多大な影響を被ったのか、それを理論的に把握する。 ・過去の地域開発政策の失敗を教訓に、ありうべき地域づくりの方向性を考えられるようになる。 ・持続的な発展の経済的基礎となる地域内再投資力と地域内経済循環について基本的な理解ができるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑪都市 ①貧困 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 地域と地域づくり 2. 経済のグローバル化と地域の変貌 3. 地域社会の持続可能性の危機 4. グローバル化による影響の具体的事例紹介 5. 戦後開発政策の展開と地域 6. プロジェクト型開発と地域 7. 企業誘致で地域は豊かになるのか 8. 地域開発から地域の持続的発展へ 9. 地域内再投資力とは？ 10. 「一村一品」から地域内産業連関の構築へ 11. 地域内産業連関の事例紹介 12. 小さいからこそ輝く自治体 13. 都市の「空洞化」とまちづくり 14. 市町村合併で地域は豊かになったのか 15. 地域づくりと地域住民主権							
III. 講義の進め方							
講義を中心的行いながらも、地域の課題や思いなどについて尋ねたり、考えてもらい、意見交換する機会を設けることを予定している。 また一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
小レポート(30%)・期末レポート(70%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
過疎化が進む深川市において、受講生なりに住民本位のまちづくりとはどのようなものか、考える習慣を身に着けてもらいたい。そのためには、人口や産出高など地域の各種基礎的データにアクセスし、時系列変化をグラフ化するなどの作業を自主的に行ってもらいたい。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない(適宜資料を配布する)。 参考書 : ①『地域づくりの経済学入門 増補改訂版』岡田知弘(自治体問題研究所) ②『国際化時代の地域経済学 第3版』岡田知弘他(有斐閣)							

科目名	地域プロジェクトⅠ	教員名	各専任教員	開 講	農学ビジネス学科	1 年次	前・後期
Ⅰ. 目的と内容および到達目標							
域活動に積極的に参加し、企画・運営のスタッフの一員として主催担当者や市民とともに、協働しながら、自己啓発や地域貢献できる人材の育成を目指す。また、地域の実状に直接触れることで、課題を発見・解決する手順や得られる成果を通じて、地域振興に役立つ「地域活性化プラン」策定の一助とする。地域活動の一部を担うとともに地域活動の改善策などの作成を通じて、地域をデザインすることができる人材の養成を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域社会の実状を理解し、地域協働の活動を円滑に遂行することができる。 ・地域社会の実態に対応する地域活性化プランを作成することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
Ⅱ. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回]							
[前期] 実施の場合				[後期] 実施の場合			
1. オリエンテーション（取組を考える）				1. オリエンテーション（取組を考える）			
2. 取組についての計画立案				2. 取組についての計画立案			
3. 取組についての事前研修①				3. 取組についての事前研修①			
4. 取組についての事前研修②				4. 取組についての事前研修②			
5. 事前研修の振り返り、課題解決				5. 事前研修の振り返り、課題解決			
6. 課題の取り組み・実施①				6. 課題の取り組み・実施①			
7. 課題の取り組み・実施②				7. 課題の取り組み・実施②			
8. 課題の取り組み・実施③				8. 課題の取り組み・実施③			
9. 課題の取り組み・実施④				9. 課題の取り組み・実施④			
10. 課題の取り組み・実施⑤				10. 課題の取り組み・実施⑤			
11. 課題の取り組み・実施⑥				11. 課題の取り組み・実施⑥			
12. 課題の取り組み・実施⑦				12. 課題の取り組み・実施⑦			
13. 課題の取り組み・実施⑧				13. 課題の取り組み・実施⑧			
14. 課題の取り組み・実施⑨				14. 課題の取り組み・実施⑨			
15. 実施後の評価と改善				15. 実施後の評価と改善			
Ⅲ. 講義の進め方							
オリエンテーション時に取り組み事例を紹介し、学生の希望によって実施する。 座学と実技または見学授業となる。 実際の取り組みの場面は、学外や週末を活用することが多いため、移動や実施に際して安全に配慮して行う。							
Ⅳ. 試験と成績評価							
深川市等の地域の活動、及び事前・事後の研修に真摯に、積極的に取り組んだか。また、その成果としての報告・レポートの作成・発表を課す。 生成評価の方法は、オリエンテーション時に説明する。							
Ⅴ. 授業外学修							
地域活動の目的を果たすには事前に地域を知ることが肝要であるため、文献等で調査しておくが良い。 関わった分野への理解を深めることで、自己のスキルを一層高めることができる。							
Ⅵ. 使用教材							
教科書 ：使用しない。 参考書 ：各担当教員が適宜指示する。							

科目名	日 本 国 憲 法	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
憲法は、国家の権力を規制し、国民の自由を守るために制定されている。講義では、1. 国家を規制する法としての憲法の役割について解説すること、2. これから学習する社会科学（経済学、経営学、政治学、法学、心理学等々）の基礎を身につけることを目標として展開する。後半の講義は憲法の条文などの解説ではなく、現代社会における具体的な憲法の論点を取り扱う。4 大編入希望者は受講を推奨する。 到達目標は以下のとおりである。 ・立憲主義的憲法の意味や役割、機能を理解できる。 ・基本的人権の歴史的な成立過程を理解し、日本国憲法における基本的人権の意味を理解できる。 ・現代社会における憲法の役割と法律の役割を区別して説明することができる。 ・公務員試験等で要求される憲法の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑩不平等 ⑤ジェンダー ①貧困 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. ガイダンス／憲法と社会科学 2. 社会科学の目的と学習方法 3. 概念と歴史 1：立憲主義憲法の意味 4. 概念と歴史 2：人権の成立 5. 概念と歴史 3：人権の限界 6. 概念と歴史 4：新しい人権 7. 概念と歴史 5：日本国憲法の誕生 8. 人権と平等 1：平等の概念 9. 人権と平等 2：アファーマティブ・アクション 10. 人権と平等 3：婚姻 11. 人権と平等 4：貧困と平等 12. 統治機構論 1：国家財政と民営化 13. 統治機構論 2：選挙と政策決定 14. 統治機構論 3：司法への国民参加 15. 統治機構論 4：安全保障と自衛隊							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知識の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの 3 つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1 と 2 は講義形式で行う。3 についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
講義ごとに提出するリアクション・ペーパー（100%）によって評価をする。また、任意提出のレポートを 1 回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回については Blackboard を確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない。 参考書：必要な資料については授業中で適時紹介する。							

科目名	法 学	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
現代の社会では、意識せずとも日常生活は法的な仕組みによって成り立っている。しかしながら、普段の生活の中で法を意識することは難しい。本講義では、社会生活に必要な法律学の基礎を身につけ、理解することを目指す。また、前半は多くの学生が関わる就職活動やアルバイトに関連する法律、後半は刑罰と裁判員として関わる刑事裁判に関するテーマを扱う予定である。4大編入希望者は受講を推奨する。 到達目標は以下のとおりである。 ・日常生活が法によって成り立っていることが理解できる。 ・法学的な思考法の基礎が理解できる。 ・時事的な問題についての法的側面を理解できる。 ・公務員試験等で要求される法学の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑤ジェンダー ⑩平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. ガイダンス／リーガル・マインド 2. 基礎法学1：法の分類 3. 基礎法学2：民事法 4. 基礎法学3：刑事法 5. 労働法1：就活・アルバイトのための法律 6. 労働法2：女性の社会参加と法律 7. 刑法1：なぜ人を罰するのか 8. 刑法2：刑罰の目的と再犯 9. 刑法3：どんなときに犯罪は成立するのか 10. 刑法4：罪を犯しても罰せられないとき 11. 権利の実現と裁判1：刑事手続きと民事手続き 12. 権利の実現と裁判2：警察の役割 13. 権利の実現と裁判3：検察官の役割 14. 権利の実現と裁判4：裁判所の役割 15. 権利の実現と裁判5：上訴と再審							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知式の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの3つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1と2は講義形式で行う。3についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
講義ごとに提出するリアクション・ペーパー（100%）によって評価をする。また、任意提出のレポートを1回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回については Blackboard を確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない 参考書：初回に配布するシラバスを参照のこと。							

科目名	総 合 英 語 Ⅲ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 これまで学んできた 4 スキル (listening, speaking, reading, and writing) をさらに向上させ、これからの学業や仕事を進めていくうえで、役にたつような英語能力の獲得を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・実生活に役立つ英語スキルを向上させ、英語で表現できるようになる。 ・real-life documentary videos を活用して身近な話題にふれ、cross-cultural awareness、critical thinking を身につける。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [前期] 1. UNIT1 Countries SPEAKING(Introductions) GRAMMAR(The verb be) 2. U.1 Countries LISTENING(Information questions) READING(Biographies) 3. U.2 Jobs SPEAKING(Comparing jobs) GRAMMAR(The simple present) 4. U.2 Jobs LISTENING(Personal information) READING(Three jobs) 5. U.3 Food SPEAKING(Likes and dislikes) GRAMMAR(Questions with do) 6. U.3 Food LISTENING(Ordering in restaurants) READING(Street food) 7. Review(documentary videos, further reading) 8. U.4 Sports SPEAKING(Habits and routines) GRAMMAR(Frequency adverbs) 9. U.4 Sports LISTENING(Leisure activities) READING(professional sports) 10. U.5 Daily activities SPEAKING(Daily activities) GRAMMAR(Present continuous) 11. U.5 Daily activities LISTENING(Describing activities) READING(Taking selfies) 12. U.6 Problems SPEAKING(Past events) GRAMMAR(Past tense of be) 13. U.6 Problems LISTENING(Problems) READING(Tribute bands) 14. Review(documentary videos, further reading) 15. まとめとプレゼンテーション							
III. 講義の進め方 積極的な授業への参加を促し、双方向のコミュニケーションをはかる。また、4 スキルの獲得と向上をはかるためグループワーク、documentary videos, conversation videos などを利用する。授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、定期テスト (80%)、課題ワーク・発表 (20%) で行う。							
V. 授業外学修 ・授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する。							
VI. 使用教材 教科書 : Smart CHOICE 4 th edition Level 1 (OXFORD UNIVERSITY PRESS) 参考書 : オリエンテーションで説明する							

科目名	総 合 英 語 IV	教員名	しばた 恵美子 新発田	開 講 コース	環境農学	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
これからの学業や仕事を進めていくうえで、役にたつような英語能力の獲得を目指す。そのため、これまでの 4 スキル (listening, speaking, reading, and writing) を実践形式で学んでいく。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 4 スキルを向上させ、実生活での英語表現の幅を広げる。 ・ real-life documentary videos を活用して身近な話題にふれ、cross-cultural awareness 、critical thinking を身につける。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. UNIT 7 Clothes SPEAKING (Talking about clothes) GRAMMAR (Comparative adjectives) 2. U. 7 Clothes LISTENING (Clothes comparisons) READING (Clothes shopping) 3. U. 8 Appearance and personality SPEAKING (Describing people) GRAMMAR (Be like and look like) 4. U. 8 Appearance and personality LISTENING (Describing people) READING (Describing friends) 5. U. 9 Local attractions SPEAKING (Tourist sites) GRAMMAR (Can and can't) 6. U. 9 Local attractions LISTENING (Describing attractions) READING (A famous city) 7. Review (Documentary videos and further reading) 8. U. 10 Places around town SPEAKING (Places around town) GRAMMAR (There is and there are) 9. U. 10 Places around town LISTENING (city facilities) READING (An airport) 10. U. 11 Vacation activities SPEAKING (Vacation activities) GRAMMAR (simple past) 11. U. 11 Vacation activities LISTENING (Describing vacations) READING (Hotel description) 12. U. 12 Transport SPEAKING (Further plans) GRAMMAR (Be going to +verb) 13. U. 12 Transport LISTENING (Transportation) READING (Driverless cars) 14. Review (Documentary videos and further reading) 15. まとめとプレゼンテーション							
III. 講義の進め方							
積極的な授業への参加を促し、双方向のコミュニケーションをはかる。また、4 スキルの獲得と向上をはかるためグループワーク、real-life documentary videos などを利用する。授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、定期テスト (80%)、課題ワーク・発表 (20%) で行う。							
V. 授業外学修							
・ 授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・ オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する							
VI. 使用教材							
教科書 : Smart CHOICE 4th edition Level 1 (OXFORD UNIVERSITY PRESS) 総合英語Ⅲに同じ							

科目名	英語コミュニケーションⅢ	教員名	新発田 恵美子	開講 コース	環境農学	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標 自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・自信を持って英語でコミュニケーションをすることができる。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認し、広げていく。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [前期] 1. Lesson 25 Do you eat much fruit?-Listen for eating habits 2. Lesson 25 Asking and talking about quantities -Reading & Writing 3. Lesson 26 We need onions.-Reduction of <i>what do</i> 4. Lesson 26 Asking about needs & describing needs-Reading & Writing 5. Lesson 27 Do you eat a big lunch?-Regular noun plural endings 6. Lesson 27 Describing what I eat/talking about healthy eating habits- Reading & Writing 7. Lesson 28 How does it taste?-Listen for descriptions 8. Lesson 28 Asking about food & describing food- Reading & Writing 9. English in Action(Tom Cooks Dinner) 10. Speak Now L. 25-26 11. Speak Now L. 27-28 12. Confidence Booster L. 25-28 Do we have any rice? 13. Lesson 25-28 Food: Grammar Count and noncount nouns 14. Talking about food まとめ 15. Talking about food プレゼンテーション							
III. 講義の進め方 ・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、定期テスト（80%）、課題ワーク・発表（20%）で行う。							
V. 授業外学修 ・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材 教科書 : Speak Now 1 (Oxford University Press)							

科目名	英語コミュニケーションⅣ	教員名	しばた 恵美子 新発田 恵美子	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・自信を持って英語でコミュニケーションをすることができる。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認し、広げていく。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. Lesson 29 I had a great weekend.-Listen for past events 2. Lesson 29 Talking about past events-Reading & Writing 3. Lesson 30 What time did you call?-Past tense endings 4. Lesson 30 Asking about past events- Reading & Writing 5. Lesson 31 You won' t believe this!-Listen to people' s reactions 6. Lesson 31 Introducing news & Reaction to news- Reading & Writing 7. Lesson 32 What are your plans?-Reduction of <i>going to</i> 8. Lesson 32 Asking about future plans/Describing future plans- Reading & Writing 9. Lesson English in Action(Jill' s Trip) 10. Speak Now L. 29-30 11. Speak Now L. 30-31 12. Confidence Booster L. 29-32 What happened on Monday? 13. Lesson 29-32 Past & Future: Grammar A(simple past tense)/Grammar B(future time) 14. Past & Future まとめ 15. Past & Future プレゼンテーション							
III. 講義の進め方							
・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、定期テスト（80％）、課題ワーク・発表（20％）で行う。							
V. 授業外学修							
・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材							
教科書 : Speak Now 1 (Oxford University Press)							

科目名	2 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各専任教員	開 講 コース	環境農学	2 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年次は専門的なゼミが展開される。1 年次の 1 月に各ゼミの内容説明を受けた後、志願票を提出して、所属するゼミが決定する。卒論演習(選択科目)を履修する学生は、ゼミ担当教員の指導を受けることになる。 この科目の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。また、農場公開デーにおいては、各学生は取り組んでいる研究概要を来場者に説明しなければならない。後期末の 1 月下旬のゼミ成果発表会では、各学生が 1 年間の成果を学会形式を模した形で発表する。 到達目標は以下のとおりである。 ・自己が取り組む研究について理解し、説明できる。 ・設定された課題について十分な根拠に基づいたレポートにまとめることができる。 ・文章読解、文章表現、議論、調査、発表などの技法の基礎力を備えている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回]							
[前・後期] 授業は各ゼミの内容展開に応じ特定の課題に制約されずに展開する。農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会等は「2 年ゼミナール」活動に位置づける。							
III. 講義の進め方							
各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などを基に、各学生の自発・自主的な学習を中心とした進め方となる。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、ゼミ毎に提示された課題レポート(60%)、農場公開デー準備・実践(10%)、農業セミナー研修報告(10%)、ゼミ成果発表会発表準備・発表(20%)で評価する。 また、ゼミ成果発表会では、学会形式に従った発表をすることができたか、評価する。							
V. 授業外学修							
農業の現状を理解することで、適切な研究課題の設定や試験結果の結論に結びつけることができます。農業白書や農林水産省のホームページなどを参考に、現状や課題を整理してみましょう。							
VI. 使用教材							
各ゼミ担当教員が「2 年ゼミナール」の時間に具体的に指示する。							

科目名	農 業 研 修	教員名	二木 浩志 山黒 良寛	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年次の 7 月末から 8 月前半（場合によっては 1 年次 3 月からの休暇期間内または 2 年次前期の休日）の計 15 日間、農家または農業関連企業等に 1 人ずつ滞在（農家においては宿泊）し、実務研修を受けるのが科目「農業研修」の本体部分である。 2 年次前期に実施する農業研修授業は、研修先の確定作業と農業研修に必要な心構えや農業情報の事前学習等を行う場である。 到達目標（15 日間の農業研修終了時）は以下のとおりである。 ・新たな産業形成と雇用創出にむけた農業・企業経営体の現状を理解し、実務についての技術と知識を身につける。 ・農家、企業の人々との協働をととして、社会性やチームワーク力を身につける。 ・実社会に対応できる自立した社会人となるための心構えや実践力を身に付ける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 既（春期）研修者による体験報告 2. 研修先の確定（稲作） 3. 研修先の確定（畑作） 4. 研修先の確定（野菜・花卉） 5. 研修先の確定（畜産、農業関連企業等） 6. 研修先の再調整 7. 農業研修基本資料の作成（“研修生紹介カード”等） 8. 農業研修基本資料の作成（“我が家の経営”等） 9. 農業現場対応の座学（農家経営など） 10. 農業現場対応の座学（法人化など） 11. 農業現場対応の座学（農地法など） 12. 農業現場対応の座学（農作業安全など） 13. 研修開始へ向けた準備作業（全体説明） 14. 研修開始へ向けた準備作業（研修日誌記入法、病虫害蔓延防止対策、礼状等の書き方など） 15. 研修開始へ向けた準備作業（準備作業の点検）							
III. 講義の進め方							
PowerPoint 資料を中心に講義するが、適宜プリントも配布する。 農業研修授業は、1 年次後期と 2 年次前期の 2 部構成になっており、2 年次後期は、各自の研修先を確定させる重要な作業が含まれている。従って、全員での座学もあるが、少人数に分けての協議も行う。							
IV. 試験と成績評価							
農業研修の最終的な成績評価は、以下の 4 つを総合して行う。 ①15 日間の研修中に作成する研修日誌(25%)、②研修中の教員による巡回指導状況(25%)、③研修先から返送される研修生評価表(25%)、④1 年後期・2 年前期の農業研修「授業」の取り組み状況(25%)の 4 つを総合して評価する。							
V. 授業外学修							
農業用語等については、事前に課題を指示（4 回）する。次授業時冒頭で発表出来るよう準備する。レポートとして提出する。							
VI. 使用教材							
教科書 : なし。研修日誌を配布する。 参考書 : なし。座学の資料は随時配布する。							

科目名	水 稻 生 産 学	教員名	おかだ かなこ 岡田 佳菜子	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
お米は世界 38 億人の主食であり、エネルギー供給源として重要な役割を果たしている。日本人は、カロリーの 25%をお米に頼っている。本講義では、日本のお米の生産地である北海道における水稻栽培体系を、播種から収穫、調整まで各生育時期の水稻の生育特性をしり、どのような管理がなぜ必要かを理解できるよう講義を進める。 到達目標は以下のとおりである。 ・水稻における各栽培管理の役割を理解する。 ・水稻の生育と収量、品質の関係について理解する。 ・水稻栽培に関わる専門用語を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション、⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 米の生産状況 2. 北海道の水稻の特徴 3. 水稻の遺伝と品種改良 4. 育苗と移植 5. 耕起と施肥 6. 水管理 7. 雑草・病害虫防除 8. 収穫・乾燥・脱穀・貯蔵 9. 外観品質・食味 10. 気象と栽培管理 11. 北海道の水田土壌 12. 直播栽培 13. 田畑輪換 14. 糯（もち）品種の特性と栽培 15. 加工用米、飼料米の特性と栽培							
III. 講義の進め方							
プリント、プロジェクターを使い講義をすすめる。 講義内容の理解度を確保するため、毎回、小テストを行う。							
IV. 試験と成績評価							
成績の評価は、小テスト（20%）、定期試験（80%）から評価する。							
V. 授業外学修							
毎回の授業内容の積み上げ式で理解が進みます。「復習」がもっとも大切である。 ・1 年次に学んだ農業用語をもう一度見直して受講する。 ・新しくならう専門用語は、毎回復習して意味を確認して、次の授業を受講する。 ・授業で理解したことは、聞いたことも含め自己流にノートを取り復習に活用する。 授業の進行に合わせて予習の範囲を適時指示する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 北海道の米づくり（北海道）pdf 版を配信する							

科目名	畑作物生産学	教員名	ふたつき ひろし 二木 浩志	開講 コース	環境農学	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
本講で扱う畑作物とは、主要畑作4品である小麦、豆類、ばれいしょ、てんさいである。これらの作物はヒトに生存と活動のためのエネルギーを供給するため、広い面積で極力手間をかけずに粗放的に栽培される。面積当たりの利益も大きくない。それだけに、なるべく労力と経費をかけずに、少しでも収穫量を多くする技術が重要となる。併せて、作物を原料として受け入れる実需者側の品質上の要求にも応えなければならない。それぞれの作物ごとに由来、利用法、特性、栽培暦、栽培技術、品質上の栽培目標、品種などを逐次解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・畑作物にかかわる主要用語を理解し、学習を深めるためおよび生産現場などで活用できる。 ・個々の畑作物の由来と特性を理解し、世界の食糧事情に関心を持つ。 ・畑作物の栽培管理の要点と課題を知り、栽培に活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 世界の畑作物 2. 輪作と雑草対策 3. 小麦の特性 4. 小麦の生産技術 5. 小麦の品質評価項目と栽培法 6. 豆類の特性 7. 豆類の生産技術 8. 豆類の品目と品種 9. ばれいしょの特性 10. ばれいしょの生産技術 11. ばれいしょの生産技術と品種 12. てんさいの特性 13. てんさいの移植栽培 14. てんさいの直播栽培 15. 畑作物低コスト生産技術							
III. 講義の進め方							
PowerPoint 資料を主体に講義するが、プリントも適宜配布する。							
IV. 試験と成績評価							
定期考査（30%）、小テスト(50%)、課題レポート発表(20%)で評価する。							
V. 授業外学修							
授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示する。 作物栽培についての課題レポート提出のため、事前に資料を収集すること。予習範囲は別に指示する。 配布したプリントは必ずファイルして、それ以降の講義に持参すること。講義中に過去のプリントを用いて復習することがある。畑作実習を履修する学生は本授業の単位を必ず取得すること。							
VI. 使用教材							
教科書：プリントおよび関連資料を配付する 参考書：2020 北海道の作物管理、北海道農業入門「畑作編」北海道農業改良普及協会							

科目名	野 菜 生 産 学	教員名	やまくろ 山 黒 よしひろ 良 寛	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
野菜は種類、栽培法、作型が多岐にわたっている。農業後継者や新規就農者の中に高収益を目指して野菜を導入することが多い。この授業では、野菜園芸の歴史や発展および輸送、品質保持など基本技術を中心に学ぶとともに、さらに個々の野菜品目、品種、作型について学ぶ。農業経営の中で野菜栽培管理に応用できる実践的栽培技術の習得に力をいれた内容である。 到達目標は以下のとおりである。 ・野菜園芸の意義を理解しその生産状況や栽培の基礎が説明できる。 ・主要な野菜について生育と生理を理解し、栽培方法が説明できる。 ・持続可能な農業技術を理解し、その目的を説明できる。 ・主要な野菜栽培ができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 野菜園芸の意義、経営様式の分化、産地形成、生産状況 2. 品種と作型 3. 生長と発育 (1) 種子、茎葉 4. 生長と発育 (2) 地下部 5. 生長と発育 (3) 花成と抽だい 6. 生長と発育 (4) 果菜類の花と果実の発育 7. 生長と発育 (5) 品質 8. 生長と発育 (6) 貯蔵 9. 野菜栽培の実際：養液栽培と植物工場 10. ナス科野菜の栽培 11. ウリ科野菜の栽培 12. バラ科野菜の栽培 13. アブラナ科野菜、根菜類の栽培 14. マメ科、葉物野菜の栽培 15. ユリ科野菜の栽培、病虫害防除と IPM							
III. 講義の進め方							
テキスト、プリント資料、ppt による実際の栽培状況および一般的な板書の説明による授業を行う。							
IV. 試験と成績評価							
随時レポート(20%)、数回の小テスト(20%)、講義毎のリアクションペーパー (20%)、授業に臨む姿勢・取り組み態度(40%)により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある内容について、参考図書を読んでから授業に参加すること。 配布されたプリントは、次の授業までに再度読み直して授業に参加すること。							
VI. 使用教材							
参考書：「北海道野菜地図その 47」北海道農業協同組合中央会							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業改良普及員としての実務経験を有し、当該科目における野菜園芸の歴史、基本技術、さらに個々の野菜品目、品種、作型について教授します。							

科目名	花 卉 生 産 学	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
花卉は農業総生産額の 4%を占める農業の重要な一分野であり、地域ごとに異なる気候や土壌条件を活かした栽培がなされている。花卉は、観賞用作物であることから嗜好性が強く、種類・品種が極めて多く、また、品質に対する要求が高いことから、資本と労力を投入し、高度な技術を駆使して良質の生産物を生み出す必要がある。さらに、流通の変化に対応した経営も求められている。 本講義では、花卉の分類と形態、光周性・温周性と開花調節、光合成、老化と品質保持などの基礎の理論を取り上げ、その後、道内で栽培されている主要な切り花類の栽培を紹介しながら、実践的な花卉栽培方法について解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・花卉の形態や生理・生態に関する基本事項を理解し、それらを明確に説明することができる。 ・専門用語を正しく理解し、指導書や専門書を読解することができる。 ・花卉生産を制御する手法とその特徴を理解し、それらを説明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ⑪都市							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期]							
1. 花きの生産、消費の現状 (教科書 第1章-1)							
2. 花きの利用とデザイン (教科書 第1章-3)							
3. 花きの分類と形態 (教科書 第1章-2)							
4. 花きの成長・開花と環境 (教科書 第2章-2)							
5. 花きの開花調節技術（温度） (教科書 第2章-2)							
6. 花きの開花調節技術（日長） (教科書 第2章-2)							
7. 花きの成長と草姿の調節 (教科書 第2章-2)							
8. 花きの繁殖方法 (教科書 第2章-3)							
9. 花きの育種 (教科書 第2章-4)							
10. 土壌の性質と施肥 (教科書 第2章-5)							
11. 花きの品質と品質保持 (教科書 第2章-7)							
12. 苗の生産 (教科書 第3章-1)							
13. 鉢物生産 (教科書 第3章-2)							
14. 切り花生産（1年草、宿根草） (教科書 第3章-3)							
15. 切り花生産（球根類、花木） (教科書 第3章-4)							
III. 講義の進め方							
教科書を参考に、パワーポイントを利用した講義を中心に進める。講義ごとに数人が前回講義の内容に関連する問題を出し、全体でそれに対する議論をする。講義の理解を確認するため数回の小テストも実施する。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト（40%）、期末テスト(40%)、講義中の発表態度（20%）により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
教科書を使用する授業の際は、事前に指定された章を読んで予習しておくこと。小テストは復習材料として利用し、間違えた箇所は教科書や配布資料、参考書等で再確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：樋口春三「新版 草花栽培の基礎」（農文協） 参考書：鈴木正彦著「園芸学の基礎」（農文協）、腰岡政二著「花卉園芸学の基礎」（農文協） 北海道フラワーガイド その32 北海道農業協同組合連合会							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係]							
担当教員は、農業改良普及員としての実務経験を有し、当該科目における花卉の基礎理論、道内で栽培されている主要な切り花類の栽培を紹介しながら、実践的な花卉栽培方法について教授します。							

科目名	水 稲 実 習	教員名	おかだ かなこ 岡田 佳菜子	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
自分の家のイネや水田が、どのような状態にあるか理解することは重要である。この授業では直播栽培、減化学肥料栽培、熟期の異なる品種の栽培を体験し、いろいろな姿のイネを観察する。収穫物がどのように成長するか、調査と観察を通して理解すること。学外視察を通して、良い水田・悪い水田について、自ら考える機会としてください。 到達目標は以下のとおりである。 ・水稲の管理作業の要点を理解する。 ・収穫物に関わる調査の意味を理解する。 ・良いイネの姿、良い水田を知る。 ・イネの収量・品質の決定要因を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 稲栽培計画書（作業暦）の作成				1. 刈り取り適期診断			
2. 土壌診断・資材計算				2. 移植収穫			
3. 育苗				3. 直播収穫			
4. 有機物管理				4. 収量構成要素調査（穂数）			
5. 直播栽培				5. 収量構成要素調査（登熟歩合・千粒重）			
6. 移植（機械と手植え）				6. 農家視察・施設視察			
7. 除草				7. 収量調査			
8. 深水の灌漑について				8. 品質調査			
9. 生育調査				9. 食味官能試験			
10. 農家視察				10. 本年の水稲生育の特徴			
11. 生育調査				11. 熟期の異なる品種の比較（レポート課題）			
12. 病虫害防除				12. 有機物を使用した水稲の特徴（レポート課題）			
13. 生育調査				13. 直播と移植栽培の比較（レポート課題）			
14. 初期生育データまとめ				14. 餅米の食味官能試験			
15. 出穂・開花の観察				15. 栽培ごよみの作成			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、圃場作業の前に講義を行う。 作業中に得たこと・知ったことを毎回作業ノートに記録する。							
IV. 試験と成績評価							
意欲（50%）、作業ノート（20%）、レポート（30%）から評価する。							
V. 授業外学修							
毎回ノートを整理して、調査や作業がどのような意味をもつかを理解してください。 収量調査後は3つのレポート課題を課す。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：適宜紹介する							

科目名	畑 作 実 習	教員名	ふたつき 二木 ひろし 浩志	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
畑作物栽培の主要4作物（小麦、てんさい、ばれいしょ、大・小豆）の生育特性と栽培方法の実際を学ぶ。実際の畑作生産では機械化が進んでいる中、直接作物に触れ、じっくり観察する機会は意外に少なくなっている。実習では作物を自らの手で播種、移植、植付け、栽培管理することにより、畑作物の生育特性を理解し、より効果的・効率的な畑作物栽培方法について学修する。 到達目標は以下のとおりである。 ・畑作物の栽培管理をととして、生育特性を習得する。 ・栽培管理の要点を把握し、実践できる。 ・畑作物の生育調査方法等を習得し、まとめることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：23回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. ガイダンス、肥料秤量と施肥準備				1. ばれいしょ収穫、調査			
2. 秋まき小麦栽培管理、圃場区画				2. 秋まき小麦播種			
3. てんさい播種（直播栽培）				3. 小豆収穫			
4. ばれいしょ植付				4. 小麦脱穀、収穫調査			
5. 秋まき小麦止葉期調査、分肥				5. 大豆収穫			
6. 豆類播種、				6. てんさい収穫、大・小豆類脱穀			
7. ばれいしょ培土、除草				7. てんさい糖分など調査、データ取りまとめ			
8. 小麦出穂期調査、栽培管理				8. 肥料工場、土壌分析施設視察研修			
9. てんさい初期生育調査、栽培管理							
10. ばれいしょ初期生育調査、栽培管理							
11. 畑作物根圏調査、栽培管理							
12. 豆類生育調査、栽培管理							
13. てんさい生育調査、栽培管理							
14. 秋まき小麦収穫、緑肥調査、栽培管理							
15. ばれいしょ生育調査、栽培管理							
III. 講義の進め方							
は種、植付け、除草など栽培管理、収穫調査など農作業とデータのとりまとめを中心に授業をすすめる。圃場実習であるので天候等の影響を受けることが考えられるので、臨機応変に補講等を行う。班に分けて調査作物を選定し、調査データをとりまとめる。実習日誌には、板書以外に必ず観察経過も記録しておく。							
IV. 試験と成績評価							
学習態度・(30%)、理解度(20%)、調査記録(20%)、調査結果のまとめ(20%)、外部研修レポート(10%)などに基づいて総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
作物の生育状況等、授業時間以外にも調査・観察が必要になる。生育状況等事前に指示するので、観察記録を取るようにすること。(作物の出芽や出芽揃い、開花や着蕾、出穂等) ほ場面積や機材の関係上、受講者数の上限を30名程度とする。適期作業を逃がさないように補講を行う。雨天などで作業が出来ない時、また、作業のピーク時には授業時間以外にも補講を行うことがある。							
VI. 使用教材							
教科書：							
参考書：授業内で紹介する							

科目名	野 菜 実 習	教員名	上西 孝明 藤田 寿雄	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
野菜は種類、栽培法、作型が多岐にわたっている。また、農業経営の中で、高収益を目指し野菜を導入することが多い。この実習では、実際の野菜の生産と栽培管理に対応できるよう実践的栽培力の養成に力を入れた実習内容を用意した。 ①大玉トマトの仕立て法と養液栽培、②長ネギの栽培、③メロンの栽培、④アスパラガスの露地栽培、⑤サツマイモの栽培、⑥ラッカセイの栽培、⑦イチゴの栽培、⑧ペポカボチャの栽培などを学生が班別に分かれて実践的な栽培を行い、観察、収穫調査等を行う。作業は担当者を中心に全員で行う。また、市場視察や農業試験場の視察を通じて流通と最新栽培技術にふれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・野菜栽培の基本と実践力を身につけることができる。 ・高収益野菜の栽培法について理解し、その栽培技術が習得できる。 ・農業経済に対する関心が高まり、野菜の生産と流通についての理解が深まる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：23回]							
[前期]				[後期]			
1. オリエンテーション、大玉トマト播種 2. ネギ類播種、大玉トマト鉢上げ、イチゴ鉢上げ 3. ハウス展張、施肥 4. メロン定植準備、ハウス管理 5. アスパラ収穫と品質 6. ラッカセイ播種、栽培管理 7. サツマイモ定植、キャベツ播種、栽培管理 8. ペポカボチャ播種、栽培管理 9. アスパラガス露地栽培残渣整理、施肥、収穫方法 10. 大玉トマト定植及び管理 11. ネギ類定植、栽培管理 12. イチゴ定植、栽培方法と管理 13. 札幌中央卸売市場視察 14. 大玉トマト収穫、品質調査 15. アスパラガス収穫後管理、メロン品質調査と糖度				1. ネギ培土、品質調査 2. ペポカボチャ収穫、品質 3. 野菜農業試験場視察 4. サツマイモ収穫、品質 5. サツマイモの加工 6. ラッカセイの収穫、品質 7. 越冬キャベツ収穫、冬野菜 8. 各野菜調査結果の検討			
III. 講義の進め方							
野菜栽培計画を年間作業から十分把握することから始め、各回の農作業、作物管理、処理、調査など学生が主体的に行う。後期は必要に応じて9回以降も行う。 授業計画は作物の生育・気候などにより前後する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
作業日誌(10%)、レポート(20%)、数回の小テスト(20%)、実習に対する姿勢・取り組み(50%)により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
授業後に実験・実習記録ファイルを整理し、農業用語および作業の意味に対する理解を深めること。 新野菜や最新の栽培方法に取り組む時、正しい情報をどう選び出せるか、実践をとおして技術を習得し日誌に記す。							
VI. 使用教材							
教科書：「北海道野菜地図その46」北海道農業協同組合連合会 参考書：授業内で紹介する							

科目名	花 卉 実 習	教員名	こばやし 孝夫 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
花は、美的な楽しみや心理的な安定感、環境への貢献など多くの面で人々の生活に豊かさをもたらす価値を持っており、国内消費は1兆円規模で推移している。北海道の花きは、夏季の冷涼な気候を活かした切り花生産が盛んであり、全国的にも最も重要な夏秋季出荷産地の一つとなっている。 本実習では、主に切り花、花壇苗を栽培し、それぞれの栽培管理(品種検討、は種、育苗、施肥、定植、灌水、温度管理、病虫害防除、摘心、採花、出荷等)の基礎について学ぶと共に、花卉園芸植物の形態や生理を理解する。また、花卉生産農家、花卉集出荷場、花卉卸売市場等の見学を実施し、生産から流通、消費までの流れを理解する。 到達目標は以下のとおりである。 ・主要な花卉園芸作物の生理・生態に関する基礎的な技術と経験を備えている。 ・切り花、花壇用苗物を生産できる基礎的な技術と経験を備えている。 ・花卉園芸作物の生産から流通、消費までの基礎的な知識を備えている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑧成長と雇用 ⑬陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：25回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 花壇苗播種				1. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製			
2. ビニールハウス被覆				2. 花き集出荷場・花き生産ほ場視察			
3. 鉢上げ準備、園芸用土の調製				3. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製			
4. 花壇苗鉢上げ				4. 切り花の採花・選花、品質判定			
5. 花壇苗鉢上げ、生育調査				5. 秋植え球根の定植			
6. 切り花ハウスの定植準備（畝立て、マルチ）				6. 花壇、プランターの片づけ			
7. ハウス花き類の定植				7. ビニールハウスの片づけ			
8. 花壇の整備				8. リースの作成			
9. 花壇・プランターへの定植				9. 各種調査のとりまとめⅠ			
10. 露地ほ場準備				10. 各種調査のとりまとめⅡ			
11. 露地花き定植、は種							
12. 花卉集出荷場、切り花生産農家の見学							
13. 切り花のほ場の管理、生育調査							
14. 花き市場視察							
15. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製							
III. 講義の進め方							
栽培及び見学を通して、生産から流通、消費までの流れを理解することに重点をおいて実習を展開する。主要切り花の定植から採花までの栽培管理の実際を体験し、栽培管理の概要を把握する。調査、観察結果についてのレポートを数回課す。							
IV. 試験と成績評価							
毎回の実習ノートおよびレポートや見学報告書（50％）及び実習意欲や作業の正確性（50％）などを総合的に勘案し評価する。実習ノートについては、花卉栽培の基礎的な技術ポイントを把握し、作物の生育を正しく観察できているかを評価する。レポートについては、作物を正しく調査し、そのデータから結論を導き出せるかを評価する。							
V. 授業外学修							
実習した花きについては、教科書や花き生産学のテキストを活用して実習内容の理解を深める。軍手や長靴、作業着、防寒着、雨具は各自が準備し、天候不良でも実習できるように準備すること。メモが取れるよう実習手帳等を準備し、授業中だけでなく授業外でもほ場をよく観察し、気づいた点はメモし、実習ノートに整理する。							
VI. 使用教材							
教科書：北海道フラワーガイド その3 2 北海道農業協同組合連合会							
参考書：							

科目名	施設園芸学	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開講 コース	環境農学	2年次	後 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
日本の園芸作物生産において、施設での栽培は不可欠な役割を果たしており、野菜や花きの周年供給は施設園芸技術の活用によるものである。寒冷な気候の北海道の園芸作物の生産は露地が主体であったが、気候の変動を受けにくく安定計画生産が可能な施設栽培への需要はこれから増加していく。 本講義では各種資材・施設の特徴、環境制御方法などの施設園芸の基礎に重点を置きつつ、最新の生産技術の動向についても解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・施設園芸学の基礎的な知識を理解し、指導書や専門書を読解することができるようになる。 ・施設の管理方法を理解し、実践できる知識を習得する。 ・高度な施設園芸技術のアウトラインを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ②飢餓																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[後期]																																					
<table><tr><td>1. 施設園芸の現状</td><td>(教科書 第1章)</td></tr><tr><td>2. ハウスの基本1 構造</td><td>(教科書 第3章)</td></tr><tr><td>3. ハウスの基本2 被覆資材</td><td>(教科書 第3章)</td></tr><tr><td>4. ハウスの付帯設備1 かん水</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>6. ハウスの付帯設備3 冷暖房</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>7. 作型開発</td><td>(教科書 第4章)</td></tr><tr><td>8. 土壌と施肥</td><td>(教科書 第7章)</td></tr><tr><td>9. 養液栽培</td><td>(教科書 第8章)</td></tr><tr><td>10. 養液土耕</td><td>(教科書 第8章)</td></tr><tr><td>11. 環境制御と植物1 光</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>12. 環境制御と植物2 温度</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>13. 環境制御と植物3 湿度・飽差</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>14. 環境制御と植物4 CO₂</td><td>(教科書 第10章)</td></tr><tr><td>15. 環境制御と植物5 統合環境制御</td><td>(教科書 第10章)</td></tr></table>								1. 施設園芸の現状	(教科書 第1章)	2. ハウスの基本1 構造	(教科書 第3章)	3. ハウスの基本2 被覆資材	(教科書 第3章)	4. ハウスの付帯設備1 かん水	(配布資料)	5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材	(配布資料)	6. ハウスの付帯設備3 冷暖房	(配布資料)	7. 作型開発	(教科書 第4章)	8. 土壌と施肥	(教科書 第7章)	9. 養液栽培	(教科書 第8章)	10. 養液土耕	(教科書 第8章)	11. 環境制御と植物1 光	(教科書 第9章)	12. 環境制御と植物2 温度	(教科書 第9章)	13. 環境制御と植物3 湿度・飽差	(教科書 第9章)	14. 環境制御と植物4 CO ₂	(教科書 第10章)	15. 環境制御と植物5 統合環境制御	(教科書 第10章)
1. 施設園芸の現状	(教科書 第1章)																																				
2. ハウスの基本1 構造	(教科書 第3章)																																				
3. ハウスの基本2 被覆資材	(教科書 第3章)																																				
4. ハウスの付帯設備1 かん水	(配布資料)																																				
5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材	(配布資料)																																				
6. ハウスの付帯設備3 冷暖房	(配布資料)																																				
7. 作型開発	(教科書 第4章)																																				
8. 土壌と施肥	(教科書 第7章)																																				
9. 養液栽培	(教科書 第8章)																																				
10. 養液土耕	(教科書 第8章)																																				
11. 環境制御と植物1 光	(教科書 第9章)																																				
12. 環境制御と植物2 温度	(教科書 第9章)																																				
13. 環境制御と植物3 湿度・飽差	(教科書 第9章)																																				
14. 環境制御と植物4 CO ₂	(教科書 第10章)																																				
15. 環境制御と植物5 統合環境制御	(教科書 第10章)																																				
III. 講義の進め方																																					
教科書を参考に、パワーポイントを利用した講義を中心に進める。教科書に掲載されていない学習項目は、資料を配布する。講義ごとに数人が前回講義の内容に関連する問題を出し、全体でそれに対する議論をする。講義の理解を確認するため数回の小テストも実施する。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
小テスト (40%)、期末テスト(40%)、講義中の発表態度 (20%) により総合的に成績を評価する。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書を使用する授業の際は、事前に指定された章を読んで予習しておくこと。小テストは復習材料として利用し、間違えた箇所は教科書や配布資料、参考書等で再確認しておくこと。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書 : 図解でよくわかる 施設園芸のきほん (誠文堂新光社) 参考書 : 最新施設園芸学 (朝倉書店)、施設園芸・植物工場ハンドブック (農文協) 環境制御のための植物生理 (農文協)																																					

科目名	土 壌 作 物 診 断 実 習	教員名	小林 孝夫 中村 隆一	開 講 コース	環境農学	2 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
従来型の多肥型農業は、化学肥料の過剰使用により土に養分を蓄積させ、これが環境にも大きな負荷をかけてきた。昨今の肥料高騰もあり、土に蓄積された養分を適正に評価し、データに基づいた適正な施肥が広く推進されている。この実習では、土の養分蓄積状況を把握するための土壌診断法を学ぶとともに、作物の栄養状態を外見の症状や分析によって把握し、適正な施肥管理手法の基礎を習得する。作物に必要な養分の適切な供給は、環境への負荷を最小限抑えながら、高品質な農産物を生産する上で不可欠である。この実習で学ぶ事項は、本学科の掲げる環境保全型農業の基盤をなす技術である。 到達目標は以下のとおりである。 ・土壌診断の主な項目の分析と作物栄養診断の分析を実際に経験する。 ・化学実験の基本操作を理解し、実践できる。 ・土壌診断結果に基づいた施肥対応を組み立てる能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ②飢餓							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：25 回]				2 コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. ガイダンス				1. 有効態リン酸の測定（ブレイリン酸）			
2. 実験基本操作（器具）				2. 有効態リン酸の測定（トルオーグ法）			
3. 土壌診断書説明・実験基本操作（分析機器）				3. リン酸吸収係数の測定			
4. 土壌サンプリング方法				4. 酸可溶性銅、亜鉛の測定			
5. 土壌サンプル乾燥、土性・腐植・土色判定				5. 分析結果に基づく施肥方法			
6. 土壌サンプル調整法、仮比重、乾燥土壌水分測定				6. 土壌断面調査、物理性調査（排水性調査）			
7. pH 測定、腐植の測定				7. 作物体分解			
8. 石灰中和量の測定（アレニウス表）				8. 作物体無機成分分析			
9. 石灰中和量の測定（炭カル添加・通気法）				9. これからの土壌診断、土壌バイオマス測定			
10. 湛水培養窒素の測定、可給態ケイ酸の測定				10. レポート作成方法			
11. アンモニア態窒素測定							
12. EC 測定、硝酸態窒素測定、							
13. 栄養診断（葉柄汁液診断、葉色測定）							
14. 熱水抽出性窒素の測定							
15. 交換性塩基の測定							
III. 講義の進め方							
分析実験を中心に授業を進める。土壌分析演習については、自ら土壌調査を行い採取したサンプルを用いて、土壌の化学性、物理性、生物性の分析を行い、その結果に基づいた施肥・肥培管理法を組み立てる。JAなどで実施される土壌診断結果を活用出来るようにする。作物分析については、拓大実験実習農場の作物を材料に栄養診断手法の演習を行う。 実験器具と実験スペースの制約や安全確保のために、受講生は 24 名を上限とする							
IV. 試験と成績評価							
実験方法の理解度や実験精度（40%）および分析結果に基づくレポート（60%）によって成績を評価する。							
V. 授業外学修							
実験が終了したら、分析項目ごとに実験方法やデータは正確に記録しておくこと。実験は危険を伴うので、慎重かつ真面目な態度で臨み、教員の指示を聞き逃さないようにする。実験演習時は必ず白衣を着用する。 レポートは自分で分析したデータを用い、「北海道施肥ガイド 2020」に基づいて作成するので、事前に本書に目を通しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 毎回プリントを配布する 参考書 : 『北海道施肥ガイド 2020』公益社団法人北海道農業改良普及協会。 : 『土壌・作物栄養診断のための分析法 2012』 https://www.hro.or.jp/agricultural/center/research-topics/bunseki2012.html							

科目名	日本酒製造実習	教員名	たなか ひでひこ 田中 英彦	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
日本酒製造は、並行複発酵方式により糖化と発酵を同時に進行させるなど、工程が複雑である。また、米の作柄や品質が酒の品質に影響するだけでなく、また同じ原料を配合し同じように仕込んだ醪（もろみ）でも微生物の働き方のちがいでタンクごとの発酵の進み具合が異なるなどの特徴がある。 本実習は、実験・実習農場において酒造好適米を生産するとともに、実験室内で実際の醸造工程に沿って日本酒製造技術の基礎を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・北海道の酒造好適米と栽培方法、求められる品質について理解する ・日本酒の醸造技術について理解する。 ・日本酒と微生物との関係について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：12回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 酒造好適米の播種 2. 酒造好適米の移植 3. 酒造好適米の精米実験 4. 麹菌の働き（麹甘酒の仕込み）				1. 酒造好適米の収穫 2. 酒造好適米の脱穀・調整 3. 酒造好適米の品質分析 4. 精米工場視察研修 5. 醸造技術（製麹） 6. 醸造技術（醪づくり） 7. 醸造技術（上槽） 8. 日本酒の品質評価			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、プリントを用いて講義を行った後に、各種の作業を行う。受講者は、毎回の実習内容を実習ファイルに記録し、レポート課題は後日提出する。 なお、同じ時間割に「植物資源応用実習」が配置され、作物の生育状況などにより、どちらの実習を行うかなど、授業計画は適宜変更される場合があるので、掲示板とアクティブメールをチェックし、担当教官からの連絡を必ず確認すること。							
IV. 試験と成績評価							
実習内容の理解度を、実習態度・実習ファイル(50%)、レポート(50%)から評価する。							
V. 授業外学修							
各種の実験は、実習当日のみでは完結せず、授業時間以外にも観察・調査が必要な場合がある。授業時間以外にも、自主的に観察を定期的に行い、実習ファイルにメモする習慣をつけること。							
VI. 使用教材							
教科書は使用しない。毎回プリントを配布する。参考書として、酒造実習（公益財団法人 日本醸造協会）を推奨する。実習ファイルを各自に配布する。授業には、必ず実習ファイルを持参すること。							

科目名	植物資源応用実習	教員名	たなか 田中 英彦	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
植物資源応用実習は、水稻を題材にして作物育種と種苗の管理の基礎を学ぶほか、各種作物栽培における雑草および病害虫の発生と対策、作物品質の評価として加工品の製造と評価法を学ぶ。							
到達目標は次のとおりである。							
・作物育種と種苗管理について、その要点を理解している。 ・病害虫・雑草について、発生状況に応じて適切な防除を行うための考え方を理解している。 ・実験計画に従って、個人及びチームで問題解決する基本的な能力を備えている。							
<SDGs（持続可能な開発目標）との関連>							
②飢餓 ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：12回]							
[前期]				2コマ連続授業			
1. 野草の栽培化（春の山菜） 2. 作物育種と種苗の管理①（黒米播種） 3. 雑草の発生と対策①（大豆除草剤試験） 4. 病害虫の発生と対策①（コナガフェロモントラップ） 5. 病害虫の発生と対策②（アカヒゲホソミドリカミカメの発生調査） 6. イネ科植物の分類と同定 7. 作物育種と種苗の管理②（中央農試遺伝資源部視察） 8. 作物育種と種苗の管理③（水稻人工交配）				[後期] 1. 作物育種と種苗の管理④（水稻の自然交雑率調査） 2. 作物品質の評価①（ショウガの加工） 3. 作物品質の評価②（冷凍枝豆の食味評価） 4. 作物品質の評価④（コンニャクの製造）			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、プリントを用いて講義を行った後に、各種の作業を行う。多くの場合には、試験処理区を設け、調査して得られた実験結果を取りまとめて考察する。受講者は、毎回の実習内容を日誌に記録し、レポート課題は後日提出する。							
なお、同じ時間割に「日本酒醸造実習」が配置され、どちらの実習を行うかなど、授業計画は適宜変更される場合があるので、掲示板とアクティブメールをチェックし、担当教官からの連絡を必ず確認すること。							
IV. 試験と成績評価							
実習内容の理解度を、実習態度・実習ファイル(50%)、レポート(50%)から評価する。							
V. 授業外学修							
各種の実験は、実習当日のみでは完結せず、授業時間以外にも観察・調査が必要な場合がある。授業時間以外にも、自主的に試験圃場の観察を定期的に行い、作物の生育と病害虫、雑草の発生状況を確認し、実習ファイルにメモする習慣をつけること。							
VI. 使用教材							
教科書：なし。プリントを毎回配布する。							
実習ファイル：各自に配布する。授業には、必ず実習ファイルを持参すること。							

科目名	農 業 機 械 研 修	教員名	じょうにし 上西 孝明	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
道立農業大学校農業機械研修センターにおいて、トラクタ基本操作+機械作業スキルアップ研修の講習に参加して研修を行う。トラクター、作業機の操縦及び農業機械の構造と整備方法、安全利用など専門知識について、学科と実技を習得する。本研修受講者は農業機械学（1年前期）の単位を取得していることが必須である。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業機械に関する専門知識を習得し、自分で簡易な修理を行うことができる。 ・トラクタ、トレーラーの運転操作、作業技術を習得し実践する力を備える。 ・自動操舵運転等の農業機械のICT技術の理解が進む。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：1単位、研修日数：5日〕							
〔前期〕 1日目 学科 農作業事故の実態とトラクタ作業の安全確保、危険予知トレーニング（KYT） 基本作業と耕法（プラウ、ロータリー） 2日目 演習 工具取扱い、トラクタの仕業点検 3日目 演習 トラクタの簡易整備1 作業機の着脱と調整8（プラウ、ロータリー、ディスク） 4日目 演習 耕起・整地作業の実践、自動操舵システム 5日目 演習 ガイダンスシステムと航空写真に基づく可変施肥、トラクタの簡易整備2							
III. 講義の進め方							
研修の時期は1,2年次8月下旬～9月上旬の5日間であり、道立農業大学校農業機械研修センター（中川郡本別町）にて全寮制で行う。拓大では研修前に事前授業を実施する。研修日程の詳細は各学期始めに農業大学校より提示されるので、事前授業で連絡する。事前授業では研修の概要を説明し、各自願書を書いて提出してもらう。願書提出時には免許証サイズの証明写真（3.0cm×2.5cm）1枚、本人及び現住所の証明できる公文書の写しが必要。その他連絡事項は必要に応じて掲示板に掲示する。							
IV. 試験と成績評価							
農業機械研修センターからの成績(80%)と受講中の寮生活における研修態度(20%)の報告をもとに評価する。							
V. 授業外学修							
農業機械研修受講には「農業機械学」（1年前期科目）の単位が必須。受講者はトラクター等の運転をするので大型特殊免許の取得を推奨する 営農に不可欠な農業機械を効率的に使用するため 予習、復習により理解を高める。							
VI. 使用教材							
教科書 : 農大推薦教科書使用 参考書 :							

科目名	作物栄養生理学	教員名	なかむら りゅういち 中村 隆一	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の前半は、作物の生長に欠かせない光合成とそれによって作られた炭水化物が収穫部位に蓄積していく仕組みを学ぶ。農業技術は、様々な環境に抗して作物による光合成の量を増やし、それを環境条件に対応して収穫部位に集中するための技であることや、そこに様々な植物ホルモンが作用していることを理解する。講義の後半には光合成を効率的に進行させ、最大収量を得るための無機成分役割と吸収の仕組み、吸収を促す施肥について基礎から学ぶ。 現在の農産物の生産は、単に量をとるばかりでなく、おいしさや環境保全の視点も求められる。作物の栄養状態は美味しさや品質、環境保全に直接関連するので、作物品質や環境保全にかかわる話題も講義の中に盛り込んで進める。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物生理を理解し、栽培法等を通じてそれを作物生産に活用できる。 ・作物栄養を理解し、それを施肥改善や環境保全に活用できる。 ・作物栄養、作物整理と作物の品質の関係を理解し、品質改善に活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 植物の起源、動物と植物の類似点と違い 2. 光合成の仕組み 3. 光合成産物の転流と貯蔵 4. 植物の生長と環境条件 5. 個体群の構造と機能 6. ストレスへの耐性、水分 7. ストレスへの耐性、温度 8. 光への作物の反応とその活用 9. 植物ホルモンとその活用 10. 作物の必要とする養分（多量要素） 11. 作物の必要とする養分（微量要素や有用要素） 12. 養分の吸収と代謝 13. 施肥の基本と適正な施肥量 14. 農業と環境保全 15. 農産物の品質と作物栄養							
III. 講義の進め方							
作物や植物を栽培する上で基礎となる事項を、様々な関連資料を活用して作成したプリントを元に講義する。授業内容の理解や習熟度を確かめるため、適宜小テストを実施する。							
IV. 試験と成績評価							
授業態度（30点）、小テスト(50点：数回)、レポート(20点：1回)を総合的に勘案し評価する。							
V. 授業外学修							
作物の授業の理解を深めるために、プリントを元に復習し、理解が不十分な点は参考書や教官への質問で補習すること。小テストは、この理解度を自ら把握してこれを深めるために有用なので、参考書等を活用して提出すること。							
VI. 使用教材							
教科書：プリントおよび関連資料を配付する。 参考書：『作物栄養のしくみ』高橋英一（農文協）、『植物生産生理学』石井龍一（朝倉書房） 『作物生産生理学の基礎』平澤 正（農文協）							

科目名	グリーン・ツーリズム論	教員名	むらかみ 村上 良一	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
グリーン・ツーリズムは日本では農村振興策の一つとして 20 世紀末の 1990 年代以降注目されるようになってきた。本講義では、グリーン・ツーリズムの概要と海外の事例、北海道内外の事例そしてやはり新しく生まれてきた地域資源を再発見する他のツーリズムについても紹介していく。そしてグリーン・ツーリズムを契機に生活全般を見直し環境と調和する持続可能な生活様式についても考えてゆくことを目標とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・グリーン・ツーリズムに関する基本的な知識を持っている。 ・日本と北海道のグリーン・ツーリズムの取組みの基礎的な知識を持っている。 ・都市農村交流の意義が理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 現代日本社会が抱える諸問題解決の糸口としてのグリーン・ツーリズム 2. 日本のグリーン・ツーリズムの普及過程 3. グリーン・ツーリズムへの多様なアプローチ 4. 農業の構造変化によるグリーン・ツーリズム創出の必然性 5. 日本のグリーン・ツーリズムの事例紹介 6. 西欧のグリーン・ツーリズム 7. 韓国のグリーン・ツーリズム 8. 台湾のグリーン・ツーリズム 9. 中国のグリーン・ツーリズム 10. 海外のグリーン・ツーリズムの事例紹介 11. 北海道のグリーン・ツーリズム（畑作地域） 12. 北海道のグリーン・ツーリズム（稲作地域 草地酪農地域） 13. 体験教育とグリーン・ツーリズム 14. 農家民泊とグリーン・ツーリズム 15. 日本社会とグリーン・ツーリズム——持続可能な生活様式を目指して							
III. 講義の進め方							
・スライド、プリント、板書を適宜使用して進める。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)とで評価することを予定している。							
V. 授業外学修							
・グリーン・ツーリズムや都市農村交流に関わるニュースを意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 山崎光博『グリーン・ツーリズムの現状と課題』(筑波書房)、井上和衛『グリーン・ツーリズム—軌跡と課題』(筑波書房)、長尾正克編著『グリーン・ツーリズム 北海道からの発信』(筑波書房)、佐藤真弓『都市農村交流と学校教育』(農林統計出版)、宮田静一『農泊のススメ』(弦書房)。							

科目名	食品・農産物流通論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、規制緩和が進行する現下の農産物流通の特徴や課題について明らかにすることを目的とする。そのために最初に流通論の基本的な講義を数回程度行い流通に関するイメージを与える。続いて、食品・農産物流通に関する講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・流通一般の意義や基本的な仕組みについて理解し、説明できるようになる。 ・農産物流通について基本的な理解ができ、説明できるようになる。 ・主要な農産物の流通の具体的な仕組みについて基本的な理解ができ説明できるようになる。 ・農産物地域ブランド戦略など農産物販売戦略に役立てられるような基礎的知識が身につけられるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. 講義の進め方や関連学問分野の紹介、流通論の基本について 2. 小売業・卸売業といった流通に関わる基本的概念や社会的意義などについて 3. 物流等流通に関する事例紹介と解説 4. 日本の商業・流通の発展史の概説 5. スーパーマーケット、コンビニ、ネット通販等流通の現在について 6. 農産物流通の独自性について特に農協共販の意義とその課題について 7. 卸売市場の発展過程と意義について 8. 流通再編下、改めて確認されるべき卸売市場の意義とその課題について 9. 食品流通の現状が及ぼす地球環境への影響についての事例紹介 10. 農産物地域ブランド戦略と事例紹介 11. 食管制度廃止以降“一般商品化”が進行する米の流通について 12. 消費上限なき農産物ともいわれる花卉の流通の現状と課題について 13. 畜産物輸入激増へと変貌したもとの畜産物の流通について（食肉） 14. 需給調整が著しく困難でありながら苦境にあえいでいる畜産物の流通について（牛乳・乳製品） 15. 今後の食品・農産物流通の課題と展望について							
III. 講義の進め方							
講義スライドを映写しながら、講義を行うことを基本とする。また、講義の内容理解を深めるため、数回程度、参考資料として解説を加えながらDVD視聴を行うことを予定している。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小レポート(30%)期末のレポート試験(70%)で行う。							
V. 授業外学修							
・食料品購入時において、価格変動や品ぞろえ、陳列方法の特徴などについて注意深く観察することを心掛けること。 ・食料品のならず、流通一般に関するニュースを日々チェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 桂 暎一編著『青果物のマーケティング』(昭和堂)、日本農業市場学会編『農産物・食品の市場と流通』(筑波書房)、藤島廣二他『フード・マーケティング論』(筑波書房)、藤島廣二他『実践農産物地域ブランド化戦略』(筑波書房)。							

科目名	キャリア技能Ⅰ (玉掛け技能)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 産業界の発展に伴い、生産及び流通段階では多様な荷物の運搬が増加し、クレーン等の運搬荷役機械の使用も増えている。農業分野においても、規模の拡大にともないクレーン等を使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、玉掛け作業に従事する者には玉掛けに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第61条では、つり上げ荷重1t以上の揚貨装置の玉掛け作業に従事する際には、玉掛け技能講習修了者等、一定の資格を持つ必要がある。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・玉掛け作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証の取得 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：3日] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。小型移動式クレーン運転技能講習修了者は一部講習が免除となる。 1日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（ワイヤーと荷重、玉掛け作業） 3日目 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（揚貨装置と玉掛け作業） 技能試験							
III. 講義の進め方 研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は7～20名とし、受講希望者が多いときは調整する。6名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚							
IV. 試験と成績評価 教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅰ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材 教科書 : 玉掛け作業教本（株）PCT） 参考書 :							

科目名	キャリア技能Ⅱ (小型移動式クレーン)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
産業界の発展に伴い、生産及び流通段階では多様な荷物の運搬が増加し、クレーン等の運搬荷役機械の使用も増えている。農業分野においても、規模の拡大にともないクレーン等を使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、クレーン作業に従事する者には移動式クレーンに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第61条において、つり上げ荷重1t以上5t未満の小型移動式クレーンの運転業務に従事する際には、移動式クレーン運転士免許所持者または、小型移動式クレーン運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・移動式小型クレーン運転作業に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による移動式小型クレーン運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：3日]							
[後期] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。玉掛け技能講習修了者は一部講習が免除となる。 1日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（運転のための合図） 3日目 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（クレーンの運転と荷作業） 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は7～20名とし、受講希望者が多いときは調整する。6名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による小型移動式クレーン運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅱ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書：小型移動式クレーン運転者教本（(株)PCT） 参考書：							

科目名	キャリア技能Ⅲ (フォークリフト)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
近年、物流システムの合理化と運搬荷役作業の省力化の進展に伴い、フォークリフトの普及が著しく進んでいる。農業分野においても、規模の拡大にともないフォークリフトを使用する作業が増加しており、その安全性を確保するためには、フォークリフト作業に従事する者にはフォークリフトに関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第61条において、最大荷重1t以上のフォークリフトの運転業務に従事する際には、フォークリフト運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・最大荷重1t以上のフォークリフト運転作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になる ・労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：2日]							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1日目 学科 フォークリフトに関する知識、原動機・走行装置に関する知識、荷役装置の構造・点検整備について 2日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したフォークリフト作業 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は7～20名とし、受講希望者が多いときは調整する。6名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証（大特）写し、写真（30×24mm）2枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅲ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：フォークリフト運転者教本（株）PCT 参考書 ：							

科目名	キャリア技能Ⅳ (車両系建設機械)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
建設機械の導入は省力化や作業時間の短縮をもたらし、建設業、土石採種業、農林業など幅広い業種で広く使用されている。農業分野においても掘削用機械（油圧式ショベル等）や整地・運搬・積み込み用機械（トラクターショベル等）の導入が拡大しており、作業の安全性を確保するためには、それら機械に関する知識と技能の習得が不可欠である。また、労働安全衛生法第61条において、機体質量3t以上のショベル等の車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）の運転業務に従事する際には、車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了者であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転作業者に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑩生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業日数：2日〕							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1日目 学科 車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）に関する知識、油圧装置・走行装置に関する知識、トラクタ系、ショベル系建設機械の構造・取り扱いについて 2日目 学科 車両系建設機械の安全、関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用した車両系建設機械（パワーショベル、ホイール式トラクタショベル）作業 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は7～20名とし、受講希望者が多いときは調整する。6名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証（大特）写し、写真（30×24mm）2枚							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅳ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書 車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転者教本（(株)PCT） 参考書							

科目名	キャリア技能Ⅴ (食品衛生責任者)	教員名	はたけやま 晶山 佳幸	開講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 食品衛生責任者は食品衛生責任者養成講習を受講した者などで、食品衛生責任者として選任されている者と定義している。食品衛生法に定められた許可営業者(食品衛生管理者の設置義務がある業種以外の飲食店営業など)は、営業許可施設ごとに食品衛生責任者を選任し保健所に届け出ることになっていることから、本養成講習を受講し、資格を取得する必要がある。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品衛生責任者養成講習会を受講し、食品衛生責任者資格を取得する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：1単位、集中講義] [集中] 1. 衛生法規(伝染病、疾病予防) 2. 衛生法規(環境衛生、労働衛生) 3. 公衆衛生学(食品衛生法、施設基準、管理運営基準等) 4. 食品衛生学(食品事故) 5. 食品衛生学(食品の取扱い) 6. 食品衛生学(施設の衛生管理、自主管理等) 7. 修了考査							
III. 講義の進め方 社団法人 北海道食品衛生協会が企画・運営する食品衛生責任者講習会を受講する。講習会の開催日時や講習会場については別途連絡する。なお、本養成講習会受講者は別途講習料(8,000円)を支払って受講する。							
IV. 試験と成績評価 本養成講習会を欠かさず受講し、修了考査に合格した者は、食品衛生責任者資格が取得できると共に「キャリア技能Ⅴ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 食品を取り扱う際の衛生管理や過去に起きた食中毒や食品事故について事前学習しておくことにより講習会の内容理解が深まる。							
VI. 使用教材 教科書：受講テキストは講習会当日、北海道食品衛生協会から支給される。							

科目名	キャリア技能Ⅵ (ガス溶接技能)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 可燃性ガスおよび酸素を使用して行う溶接や溶断の作業は、各現場で広く行われているが、使用機材の欠陥や不適切な作業方法による爆発や火災が発生することがある。農業分野においても各種機械や施設の修理・作成にガス溶接は欠かせない技能であり、その安全性を確保するためには、ガス溶接作業に従事する者にはガス溶接に関する知識と技能の習得が不可欠である。労働安全衛生法第61条に基づく労働安全衛生規則では、可燃性ガスと酸素を用いて行う金属の溶接・溶断・加熱の作業に従事する者は、ガス溶接作業主任者の免許又はガス溶接技能講習の修了等であることが必要である。本授業は、学生のキャリアアップを促進するために同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・ガス溶接、溶断の作業に必要な知識と技能の習得を通じて、安全な作業が可能になること ・労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：2日] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。 1日目 学科 設備の構造・取扱いの知識、可燃性ガス及び酸素の知識について 学科 関係法令 学科試験 2日目 演習 ガス溶接等の設備の取扱い実技							
III. 講義の進め方 研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は7～20名とし、受講希望者が多いときは調整する。6名以下の時は学内では実施しないが、教習センタ施設でも同様の研修を受講することは可能である。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証写しまたは本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚							
IV. 試験と成績評価 教習センタの授業を受講し、学科試験・技能取り扱いに合格した者は、労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅵ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材 教科書：ガス溶接技能教本（株）PCT 参考書：							

科目名	キャリア技能Ⅶ (農業用ドローンオペレーター教習)	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 ドローンをはじめとするロボットやAI 技術を駆使した新しい農業スタイル「スマート農業」は、高齢化や人手不足が問題視されるなか、作業の効率化やコスト削減を実現する施策として期待されている。 農業用ドローンでの農薬散布が年々増加しているなか、適正な管理、操縦技術、法律を守った運用が望まれている。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業用ドローンオでの農薬散布に必要な知識、技能の習得により安全に作業が行える。 ・農業用ドローンオペレーターの技能認定証を習得（対象機種 DGI 社 MG-1、T-10、T-20、T-30） <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業回数：5日〕 出張技能講習依頼先のカリキュラムによる。 1日目 学科 運用管理①（ドローンの概要）②（関連法律について） 散布飛行の知識①（オペレーターの心構え・機体の基礎知識・散布飛行について） 演習 散布飛行練習①～⑤（ドローンの操作実技） 2日目 学科 散布飛行の知識②③ 演習 散布飛行練習⑥～⑪ 3日目 学科 散布飛行の知識④ 農薬の知識①（農薬について使用に伴う注意事項） 演習 散布飛行練習⑫～⑰ 4日目 学科 農薬の知識② 作物保護の知識①②（作物保護、病害などについて） 筆記試験 演習 散布飛行練習⑱・実技試験 5日目 学科 自動航行について①～③（自動航行を活用した農薬散布について） 筆記試験（自動航行） 演習 自動航行の練習①～④（自動航行を活用した農薬散布についての実技）							
III. 講義の進め方 教習の時期は8月下旬～後期開始までの5日間に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。本学にて出張技能講習を依頼先講師で行う。 事前に受講説明会を開き、受講費用（教科書、試験費含む）、受講申請書の書き方などを指導するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板に張り出すので見落とさないこと。							
IV. 試験と成績評価 農業用ドローンオペレーター教習を受講し、合格した者は農業用ドローンオペレーターの技能認定証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅶ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 技能講習は出張講習（北短分校）の形を取っており、学外の教習講師の指導を受けるので、学生らしい態度、実技の出来る服装を心掛け、講習をより良く理解するためドローンの基礎用語の予習をすること。							
VI. 使用教材 教科書 : DJI AG GRAS 教習所 学科テキスト 参考書 :							

科目名	キャリア技能Ⅸ (ミュージカル)	教員名	各 担 当 教 員	開 講 コース	環境農学	2年次	集 中
I. 目的と内容および到達目標							
拓大ミュージカルは40年の実績と伝統に支えられた本学の特徴的学びの活動である。1年次では企画力・協調性・忍耐力・集中力など、様々な人間力を育み、感動の涙を自ら体験することを第一の目的として活動を体験するが、2年生としての関わりは、1年生を指導し、リーダーシップを発揮し、社会人として巣立つ前の最後の学び、特にリーダーシップ性を高めることを目標にしている。 組織運営の最初から最後までを責任を持って関わることで、1年次では知りえなかった様々な問題や課題を体験できる。その経験は、社会人として大きな糧になるものである。また、労苦を共に体験することも重要な目的である。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標達成のため努力をすることができる。 ・2年生としての責任感やリーダーシップなどを常に意識して活動することができる。 ・所属セクションでの役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、集中]				各担当教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。			
公演日は2025年2月中旬を予定。							
以下のような活動分野があり、それぞれの活動計画によって後期より制作が進められる。							
＜制作スタッフ＞ 1 キャスト 2 音響部 3 舞台美術部（大道具・小道具） 4 衣装部 5 舞台監督部							
＜事務局スタッフ＞ 1 総務会計部 2 広報渉外部							
III. 講義の進め方							
9月下旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常授業期間中の活動は原則として月・金（16:00～17:20）、土（9:10～16:00）。 なお、土曜日、休暇期間の活動は授業外時間（課外）活動となっている。 休暇期間を利用した活動は、日曜祭日を除く平日（9:10～16:00）。ただし、年末年始の活動は例年行わない。							
IV. 試験と成績評価							
試験は実施しない。成績評価は活動実践（90％）及び活動記録シート（10％）で行う。							
V. 授業外学修							
活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材							
教科書：台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。 参考書：毎年、活動過程・公演を収録したDVDが製作されるので参考にして欲しい。							

科目名	海外研修	教員名	じょうにし 上西 孝明	開講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、海外における研修および諸活動を対象とし、海外研修前後に単位認定に関わる所定の申請を行った者を対象に、学科会議等の審査を経て単位を付与するものである。 拓殖大学で実施される海外研修については、あらかじめ所定の手続きを済ませ、参加の可否は学内及び主催者による選考によっている。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 本学開講科目と関連する研修において研鑽につとめ、研修後に本学学習に生かせる。 ・ 海外生活を体験することにより、グローバルな視点を養い、広く社会に貢献できる人間になる。 ・ 海外生活における必要なコミュニケーション能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、現地研修日数：2～3週間程度〕							
・ 拓殖大学が実施する海外研修の場合は、事前研修は拓殖大学において実施されるが、本学においてもレポート課題説明等の事前研修を他コース・他学科と合同で行う。 ・ 研修後にはレポート提出指導、報告会等の事後研修を他コース・他学科と合同で行う。							
III. 講義の進め方							
・ 海外研修申請書の記入に当たっては、選考に関わる重要書類であることから、ゼミ担当教員の指導を受けた上で内容を精査して行うこと。所定のスケジュールに従い選考手続き書類を提出する。 ・ その他事務的な手続きについても学内の掲示などに注意が必要である。							
IV. 試験と成績評価							
・ 事前研修・現地研修・事後研修に関する評価をもとに、学科会議にて審議の上単位認定の可否を判定する。研修終了後はその旨ゼミ担当教員に申し出た上で、学務課窓口にて申請の手続きを行わなくてはならない。 ・ 拓殖大学実施の海外研修への参加の最終的な選考は学内で決定する。							
V. 授業外学修							
・ 海外研修に参加するにあたり、英語コミュニケーション、総合英語の履修などから英語の基礎力を身に付け、海外生活における必要なコミュニケーション能力を身に付けること							
VI. 使用教材							
教科書：担当教員の指示に従うこと。 参考書：							

科目名	卒 論 演 習	教員名	各専任教員	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、2年次に各学生が選択するゼミナール（以下、ゼミという）授業の成果等を卒業論文という形に結実するために開設される科目である。したがって、科目の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。 学生は2年ゼミを選択する際は、この点に留意しなければならない。 到達目標は以下のとおりである。 ・設定されたテーマに従って十分な根拠に基づく主張を論文としてまとめることができる。 ・学会形式に従った発表をすることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 など							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回] [前・後期] 授業は前期・後期をとおして2年ゼミの進行に即して実施するが、特定の時間帯に制約されずに展開する。							
III. 講義の進め方 各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などをもとに、各学生の自発的な学習を中心とした進め方となる。したがって、各学生は自己の研究テーマに応じた日常的な研究実践を継続して取り組むとともに、日々の記録を着実に実践することが極めて大切である。							
IV. 試験と成績評価 ゼミ毎に定められた形式の卒業論文が評価対象の中心であるが、卒業論文及びゼミ成果発表会の取組なども評価の対象となる。 成績評価は、設定されたテーマに従って十分な根拠に基づく主張を論文としてまとめることができたか（80%）、学会形式に従った発表をすることができたか（20%）、で評価する。							
V. 授業外学修 図書館にある過去の卒論を見て、書き方、表現の方法、取りまとめ方を参考にすると良いでしょう。							
VI. 使用教材 各ゼミ担当教員がゼミの時間及び研究活動時に具体的に指示する。							

科目名	心 理 学	教員名	あなみず 穴水 ゆかり	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
ヒトの何気ない行動や判断には、心が大きくかかわっている。心理学とは「こころとは何か」を解明する学問であり、目に見えない心のはたらきを研究する学問である。本講義では心理学の基礎的な理論をもとに、①自己や他者の理解に向けた心理学の学びを深めること、②心理学の理論を自分自身の生活と関連づけて理解すること、③心理学について学んだことを日常生活に適用できるようになること、を目的とする 到達目標は以下のとおりである。 ・心理学を学んだことがない人に対して、心理学の視点からヒトの行動をわかりやすく説明できる。 ・心理学の理論を理解し、それを自分自身の生活と関連づけて理解できる。 ・心理学について学んだことを、日常生活に適用できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. オリエンテーション - 「心理学」とは？ - 2. 胎児期～乳児期の発達 - 発達 - 3. 乳児期～幼児期の発達① - 発達、認知 - 4. 乳児期～幼児期の発達② - 発達、認知 - 5. 児童期の発達 - 発達、認知心理 - 6. 青年期～老年期の発達 - 発達、認知 - 7. SNS とうまくつきあおう - 炎上や SNS 疲れはなぜ起きる - 8. 自分を知るためのヒント① - 感情と情動 - 9. 自分を知るためのヒント② - 性格、パーソナリティ - 10. 相手を知るためのヒント - 行動、コミュニケーション - 11. 恋愛に役立つ心理学 - 社会 - 12. 仕事に役立つ心理学① - 感覚、知覚、認知、記憶 - 13. 仕事に役立つ心理学② - 社会、産業、経営、組織 - 14. 心の不調を知る① - メンタルヘルス - 15. 心の不調を知る② - メンタルヘルス -							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿って、スライドと配布資料を中心に授業を行う。適宜、映像資料などを用いる。 授業中は通信携帯機器の操作、申し出なくスライドの写真を撮ることを厳禁とする。これが守れない場合は退室を求め、以後の授業参加は不可とする。 なお、やむを得ず一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、定期試験（80%）及び提出物（20%）により行う。 演習の参加状況については提出物の内容により判断する。定期試験では配布資料の持ち込みを可とする。 単位取得のためには、授業への出席を前提条件とする。							
V. 授業外学修							
事前学修は特に必要ないが、興味のある回については、あらかじめ内容について調べておくことと学びが深まるだろう。 授業後は配布資料を整理しておく。疑問点や理解できなかったことについては随時、質問を受けつける。興味のある内容については文献等により、さらに学びを深めてほしい。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない。（適宜プリントを配布） 参考書：『Newton 別冊 ゼロからわかる心理学』『Newton 別冊 心理学 実践編』 横田正夫著『教養のトリセツ 心理学』（日本文芸社）ほか、講義の中で適宜紹介する。							

科目名	政 治 学	教員名	小林 秀高 こばやし ひでたか	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義では、政治学の基礎的な概念を身につけるために主に政治制度の観点から講義を行う。政治とは、一見無秩序に行われている様に見えるが、様々な制度の影響を受け成り立っている。政治学は今あるルールを固定的なものとは考えずに、ルールの作成、実行される仕組み、ルールの変更を対象とする。講義全体のテーマは「現代の民主制」とするが、内容はさらに「政治体制論」「政治過程論」「国際政治」の3つに分けられる。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代の民主制の基本的な考え方を理解する。 ・選挙および投票の仕組み、政党および政治家の役割を理解する。 ・日本の政治体制の基本的な仕組みを知り、ニュースや時事問題を理解する。 ・公務員試験などで要求される政治学の基礎的な知識を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑤ジェンダー ⑩不平等 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 民主主義論1：ガイダンス・政治とはなにか 2. 民主主義論2：民主主義の歴史 3. 民主主義論3：民主制と政治体制 4. 民主主義論4：現代の民主制 5. 民主主義論5：民主主義の変化（まとめ1） 6. 政治体制論1：大統領制と議院内閣制 7. 政治体制論2：大統領制と議院内閣制の長所と短所 8. 政治体制論3：政党とは何か 9. 政治体制論4：政党と政党システム 10. 政治体制論5：政治体制が政治に与える影響（まとめ2） 11. 政治過程論1：選挙と選挙制度 12. 政治過程論2：選挙における政党・候補者の行動 13. 政治過程論3：選挙における有権者の行動 14. 政治過程論4：投票のパラドクス 15. 政治過程論5：選挙が政治に与える影響（まとめ3）							
III. 講義の進め方							
講義主体で進める。講義で使用したスライドなどは授業終了後にブラックボードに掲載する。また、必要に応じて資料映像などの視聴も行う。また、初回時に各授業のテーマと参考文献を記載したシラバスを配布する。予習・復習に活用すること。講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業への取り組みを総合的に評価する。授業内容への質問や、毎回配布するコメントシート、授業中の発言授を評価に加える。また、授業の理解度を確認する試験を授業中に3回実施する。詳しくは初回に配布するシラバスを参照のこと。評価割合は試験60%、コメント40%となる。							
V. 授業外学修							
初回授業に毎回の講義に関するリーディングリストを配布する。各講義前にそれらの文献を読んでもることが予習となる。また、まとめの回（1～3）にはそれらの文献を読み直して参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書を使用しない 参考書：参考文献リストおよび授業のシラバスを初回講義時に配布する							

科目名	地 方 政 治 論	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義では、第一に、地方政治における議会の機能と役割、第二に、地方自治体における行政の役割、第三に、地方政治と中央政治の関係について解説する。地方政治は国政とことなり身近な人々が数多く関わり、具体的な生活に関わる業務を行っている。また、最近では住民投票や市町村合併、地方消滅、地方創成などの話題で注目を浴びることが多いが、その内容は関係者以外には理解しにくい。これらの内容を整理し具体的な事例を中心に解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・地方自治体における政治と行政の役割を理解する。 ・中央政府と地方自治体の役割と権限の違いを理解する。 ・地方政治と中央政治の関係を理解する。 ・公務員試験などで問われる政治学の基礎的な知識を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑧成長・雇用 ⑩都市							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 日本政治史 1：戦後改革と地方分権 2. 日本政治史 2：55 年体制の政治と地方政治 3. 日本政治史 3：55 年体制の崩壊と地方政治 4. 日本政治史 4：政権交代と地方政治 5. 日本政治史 5：日本の政治の特徴とは何か（試験とまとめ 1） 6. 地方分権改革 1：地方に政治はあるのか 7. 地方分権改革 2：日本における地方分権と中央集権 8. 地方分権改革 3：日本における地方分権の進展 9. 地方分権改革 4：地方分権と地方創生 10. 地方分権改革 5：日本ではなぜ地方分権改革が始まったのか（試験とまとめ 2） 11. 地方分権の課題 1：地方分権と住民の役割 12. 地方分権の課題 2：地方議員の質と選挙 13. 地方分権の課題 3：多選市長と官製談合 14. 地方分権の課題 4：大都市と地方 15. 地方分権の課題 5：地方における課題とは何か（試験とまとめ 3）							
III. 講義の進め方							
講義を中心とする。前期開講の「政治学」の知識を前提として授業は展開されるので履修していないものは必要な知識を自分で身につける必要がある。授業で使ったスライドは授業後 blackboard に掲載されるので、復習に利用すること。予習については初回授業時に配布のシラバスを参考のこと。							
IV. 試験と成績評価							
授業への取り組みを総合的に評価する。授業内容への質問や、毎回配布するコメントシート、授業中の発言授を評価に加える。また、授業の理解度を確認する作試験を授業中に 3 回実施する。評価割合は試験 60%、コメント 40%となる。							
V. 授業外学修							
初回授業に毎回の講義に関するリーディングリストを配布する。各講義前にそれらの文献を読んでもることが予習となる。また、まとめの回（1～3）にはそれらの文献を読み直して参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：教科書は使用しない。 参考書：講義で配布するシラバスを参照のこと。							

科目名	総 合 英 語 Ⅲ	教員名	平尾 まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
1 年次を終了して、2 年次に進級した学生は、この 4 月に向かって新たな英語の目標を検討している学生もいることであろう。これは、学業における大きなチャンスであり、英語の実力を資格試験の合格や留学への参加により更に向上させたいと考えている学生もいることであろう。この科目は、正にそのような学生にとっても、有益になるように構成されていて基礎力から大学生になり、初めて学ぶような語彙や表現も盛り込んである。「単に単位が取得できればよい」という学習姿勢から「英語を使って現在、及び将来、何をするのか？」というような積極的な思いが必要である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基本的な英文法である句と節、前置詞、接続詞を発展させた文型を修得し英文の基本的構造を理解することができる。 ・応用的な英文法である話法や関係代名詞を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・神道における赤ちゃん誕生の意味、文明と文化の違い、英語の早口言葉などという文化的な事柄に関する基礎的な英文を和訳することができる。 ・セクシャルハラスメント、いじめをテーマとした英文読解を通して社会における問題を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 句と節：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 11.） 2. 句と節：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 11.） 3. 句と節を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 11.） 4. 前置詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 12.） 5. 前置詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 12.） 6. 前置詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 12.） 7. 接続詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 13.） 8. 接続詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 13.） 9. 接続詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 13.） 10. 話法：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 14.） 11. 話法：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 14.） 12. 話法を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 14.） 13. 関係代名詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 15.） 14. 関係代名詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 15.） 15. 関係代名詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 15.）							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の ii ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：昨年度、使用した教科書『Access to Simple English』石井 隆之 他 著（成美堂）を使う。 昨年度の続きから学習する。							

科目名	総 合 英 語 IV	教員名	平尾 まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年次も後半となり、今期において新たな英語の目標を検討している学生もいるであろう。これは、大きなチャンスであり、英語の実力を資格試験の合格や留学への参加により更に向上させたいと思う学生もいるだろう。この科目は、基礎力から大学生になり、初めて学ぶような語彙や表現も盛り込んである。「単に単位が取得できればよい」という学習姿勢から「英語を使って現在、及び将来、何をするのか？」という積極的な思いが必要である。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 基本的な英文法である冠詞と名詞、代名詞、助動詞を発展させた文型を修得し英文の基本的構造を理解することができる。 ・ 応用的な英文法である関係副詞、仮定法を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・ 師とその弟子、失敗と成功、教育において褒めること、日本神話における男性と女性などという文化的な事柄に関する基礎的な英文を和訳することができる。 ・ 哺乳類カモノハシの生態をテーマとした英文読解を通して環境における事柄を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑭海洋資源							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 関係副詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 16.） 2. 関係副詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 16.） 3. 関係副詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 16.） 4. 助動詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 17.） 5. 助動詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 17.） 6. 助動詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 17.） 7. 仮定法：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 18.） 8. 仮定法：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 18.） 9. 仮定法を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 18.） 10. 冠詞と名詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 19.） 11. 冠詞と名詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 19.） 12. 冠詞と名詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 19.） 13. 代名詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 20.） 14. 代名詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 20.） 15. 代名詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 20.）							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の ii ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：前期に使用した教科書『Access to Simple English』石井 隆之 他 著（成美堂）を使う。 前期の続きから学習する。							

科目名	英語コミュニケーションⅢ	教員名	平尾 まさゆき ひらお まさゆき 政幸	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
英会話の上達に困難を感じている学生は、とても多いことであろう。この授業では、会話に必要な基礎的な内容が入ったシンプルな教材を用意した。教材には、就職活動・就職先での業務で遭遇するような場面を中心として英語を使用した題材を主として構成されている。学生は、このような教材を利用して、各自の英語による会話能力を上達させるように意識することが望まれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・自動車販売で顧客に対して言いたいことを簡単な英語で表現し、顧客の言うことを聞き取ることができる。 ・就職面接の場面で使われる応用的な英語の問答を聞き取ることができるようになる。 ・就職面接の場面で使われる応用的な英語の問答を英語で伝えることができる。 ・仕事における出張の際に必要な基本的な英会話を聞き取ることができる。 ・仕事における出張の際に必要な基本的なことを英語で表現することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑩実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. Recruitment (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 7.) 2. Recruitment (Conversation) (教科書：Unit 7.) 3. Recruitment (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 7.) 4. Recruitment (Short Reading) (教科書：Unit 7.) 5. Recruitment (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 7.) 6. Customer Needs (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 8.) 7. Customer Needs (Conversation) (教科書：Unit 8.) 8. Customer Needs (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 8.) 9. Customer Needs (Short Reading) (教科書：Unit 8.) 10. Customer Needs (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 8.) 11. Business Trip (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 9.) 12. Business Trip (Conversation) (教科書：Unit 9.) 13. Business Trip (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 9.) 14. Business Trip (Short Reading) (教科書：Unit 9.) 15. Business Trip (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 9.)							
III. 講義の進め方							
授業は、コミュニケーション能力増強を目的として教科書やCDを使用し会話を中心にして聴解を加え総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト (60%) やレポート等 (40%) により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」(教科書の2ページ下部のアドレス参照)を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書 : 教科書:『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著 (金星堂)。 参考書 : 少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば 小西友七 (編)「ジーニアス英和辞書」(株) 大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅣ	教員名	平尾 政幸 ひらお まさゆき	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年生の後期の段階においても英会話の上達に困難さを感じている学生は、とても多いことであろう。この授業では、会話に必要な基礎的な内容が入ったシンプルな教材を用意した。教材には、仕事上の業務や銀行における相談をする場面を中心とした題材を主として構成されている。学生は、このような教材を利用して、各自の英語による会話能力を上達させるように意識することが望まれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・仕事上の業務で使われる基本的な英語を聞き取ることができるようになる。 ・仕事上の業務で使われる基本的なことを、英語で伝えることができる。 ・仕事における企画・立案を行う際に必要な応用的な英語の問答を含む英会話を聞き取ることができる。 ・仕事における企画・立案を行う際に必要な応用的な英語の問答を含む英語で表現することができる。 ・銀行における相談の際に使用する会話を簡単な英語で表現し、相談相手の言うことを聞き取ることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. Advertising (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 10.) 2. Advertising (Conversation) (教科書：Unit 10.) 3. Advertising (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 10.) 4. Advertising (Short Reading) (教科書：Unit 10.) 5. Advertising (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 10.) 6. Factory Tour (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 11.) 7. Factory Tour (Conversation) (教科書：Unit 11.) 8. Factory Tour (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 11.) 9. Factory Tour (Short Reading) (教科書：Unit 11.) 10. Factory Tour (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 11.) 11. Money Matters (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 12.) 12. Money Matters (Conversation) (教科書：Unit 12.) 13. Money Matters (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 12.) 14. Money Matters (Short Reading) (教科書：Unit 12.) 15. Money Matters (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 12.)							
III. 講義の進め方							
授業は、コミュニケーション能力増強を目的として教科書やCDを使用し会話を中心にして聴解を加え総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト (60%) やレポート等 (40%) により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」(教科書の2 ページ下部のアドレス参照) を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著 (金星堂)。 参考書：少なくとも7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば 小西友七 (編)「ジーニアス英和辞書」(株) 大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	総 合 中 国 語 Ⅲ	教員名	ふじた まある 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 1 年間の中国語の学習を通して、中国語の大体の輪郭をつかむことができたはずである。この科目は、やや複雑な中国語を「読む」、「書く」ことができる能力の習得に力を入れる。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約 500 語による発音（ピンイン）及び単語の意味が分かる。 ・上記の単語を使用して、単文の日本語訳や中国語訳ができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 〔単位数：1 単位、授業回数：15 回〕 〔前期〕 1. 1 年次の学習項目の活用練習（教科書「第 4 課から第 5 課」） 2. 教科書「第 8 課」の新出単語と文法（経験、介詞 3） 3. 教科書「第 8 課」の文法（「有」、位置を表す語）と本文 4. 教科書「第 8 課」の練習問題と第 9 課の新出単語 5. 教科書「第 9 課」の文法（動作の進行、主述述語文、助動詞 2） 6. 教科書「第 9 課」の文法（複雑な目的語）と本文 7. 教科書「第 9 課」の練習問題 8. 教科書「第 8 課」と「第 9 課」の活用 9. 教科書「第 10 課」の新出単語と文法（様態補語、助動詞 3、動詞の重ね型） 10. 教科書「第 10 課」の文法と本文 11. 教科書「第 10 課」の練習問題と第 11 課の新出単語 12. 教科書「第 11 課」の文法（比較、「少し」という意味の副詞、動作の結果の残存） 13. 教科書「第 11 課」の本文 14. 教科書「第 11 課」の練習問題 15. 教科書「第 10 課」と「第 11 課」の活用							
III. 講義の進め方 授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修 正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材 教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	総合中国語Ⅳ	教員名	ふじた 藤田 まる 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、複雑な中国語を「読む」、「書く」ことができる能力の習得に力を入れる。例えば、類似表現であればそれぞれの中心的意味を把握するだけではなく、どういうときに区別されずに使用されるのかなども把握してもらう。 到達目標は以下のとおりである。 ・常用語 700 語以上による発音（ピンイン）及び単語の意味が分かる。 ・上記の単語を使用して、単文の日本語訳や中国語訳ができる。 ・中国語検定試験 4 級に挑戦できる力をつける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. 前期の学習項目の活用練習（教科書「第 8 課」から「第 11 課」） 2. 教科書「第 12 課」の新出単語と文法（述語に数字が使用される名詞述語文、状態の変化、「是～的」） 3. 教科書「第 12 課」の文法（二重目的語）と本文 4. 教科書「第 12 課」の練習問題と第 13 課の新出単語 5. 教科書「第 13 課」の文法（結果補語、存現文、近未来表現） 6. 教科書「第 13 課」の本文 7. 教科書「第 13 課」の練習問題 8. 教科書「第 12 課」と「第 13 課」の活用 9. 教科書「第 14 課」の新出単語と文法（方向補語） 10. 教科書「第 14 課」の文法（使役）と本文 11. 教科書「第 14 課」の練習問題と第 15 課の新出単語 12. 教科書「第 15 課」の文法（可能補語、受け身、「把」） 13. 教科書「第 15 課」の本文 14. 教科書「第 15 課」の練習問題 15. 教科書「第 14 課」と「第 15 課」の活用							
III. 講義の進め方 授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修 正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材 教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅢ	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
中国語コミュニケーションⅠとⅡで学習した発音に関する基礎知識及び基礎語彙、基礎文法、簡単な会話能力を踏まえ、更なる中国語コミュニケーション能力の向上を目指す。正確な発音を身につけるための音読学習を続けながら、語彙、文法を適切に使った日常会話能力の養成に力点を置く。中国語の文の構造を的確に理解し、身近な事柄について自らの言葉で表現できるようにする。更に、言葉の背景にある中国人の意識構造、文化背景に触れながら、円滑なコミュニケーションのための「中国語話術」を考えるきっかけを与える。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約 500 語による「聴く」「話す」「書く」能力を身につける。 ・上記単語を用いた短文の日中間通訳ができる。 ・一般的な日常会話能力を身につけ、場面に応じて適切に使うことができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 一年次に学習した内容の復習 2. 教科書「第 8 課」の新出単語と文法の習得 3. 教科書「第 8 課」会話本文 4. 教科書「第 8 課」の練習問題とその応用「第 9 課」の新出単語の習得 5. 教科書「第 9 課」の文法とその習得 6. 教科書「第 9 課」会話本文 7. 教科書「第 9 課」の練習問題とその応用 8. 教科書「第 8 課」と「第 9 課」の活用 9. 教科書「第 10 課」の新出単語と文法の習得 10. 教科書「第 10 課」の会話本文 11. 教科書「第 10 課」の練習問題とその応用「第 11 課」の新出単語の習得 12. 教科書「第 11 課」の文法とその習得 13. 教科書「第 11 課」の会話本文 14. 教科書「第 11 課」の練習問題とその応用 15. 教科書「第 10 課」と「第 11 課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、単語の読み方、書き方を覚える。第二に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第三に、学習した基本文型を使って日常会話の練習を行なう。第四に、状況に応じて、参考資料を用いてのディスカッションを行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価							
まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅣ	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲで学習した基礎語彙、基礎文法、簡単な会話能力を土台に、生きた言葉としての中国語運用能力の向上を目指す。正確な発音を身につけるための音読学習を続けながら、語彙、文法を適切に運用したやや複雑な文章の「聴く」「話す」「書く」能力の向上に力点を置く。更に、中国語の類似表現におけるそれぞれの中心的意味および使い分けなどの能力を身につける。また、引き続き言葉の背景にある中国人の意識構造、文化背景についての考察を通し、他言語・異文化に対する理解の柔軟性を培う。 到達目標は以下のとおりである。 ・常用語 700 語以上による「聴く」「話す」「書く」能力を身につける。 ・上記単語を用いた短文の日中間通訳ができる。 ・中国語検定試験の 4 級レベルに相応する聴解力及び会話力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 中国語コミュニケーションⅢで学習した内容の確認と活用練習 2. 教科書「第 12 課」の新出単語と文法の習得 3. 教科書「第 12 課」の会話本文 4. 教科書「第 12 課」の練習問題とその応用「第 13 課」の新出単語 5. 教科書「第 13 課」の文法とその習得 6. 教科書「第 13 課」の会話本文 7. 教科書「第 13 課」の練習問題とその応用 8. 教科書「第 12 課」と「第 13 課」の活用 9. 教科書「第 14 課」の新出単語と文法の習得 10. 教科書「第 14 課」の文法とその習得、会話本文 11. 教科書「第 14 課」の練習問題と「第 15 課」の新出単語の習得 12. 教科書「第 15 課」の文法とその習得 13. 教科書「第 15 課」の会話本文 14. 教科書「第 15 課」の練習問題とその応用 15. 教科書「第 14 課」と「第 15 課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、単語の読み方、書き方を覚える。第二に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第三に、学習した基本文型を使って日常会話の練習を行なう。第四に、状況に応じて、参考資料を用いてのディスカッションを行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価							
まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	総合日本語Ⅲ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標 2年次の留学生には学科で定める学習到達目標は日本語能力試験N1の合格またはJ. TEST700点到達である。従って、本演習の目的はそれに必要な継続的自習能力の養成となる。総合日本語Ⅰ・Ⅱにおいて習得した日本語力を活用して中級文法要点を整理し、総合練習を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・応用的な日本語において統語的に正しく意味が通る文を組み立てたり、文や文章の内容に合った文法形式を判断したりする。 ・生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしの応用的なテキストを読んで、内容が理解する。 ・書き下ろした解説、エッセイなど350字程度の応用的なテキストを読み、キーワードや因果関係等を理解する。 ・解説、エッセイ、手紙など550字程度の応用的なテキストを読み、概要や論理の展開などが理解する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑩都市 ⑪実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [前期] 1. ガイダンス及び学習計画指導・教科書・読解「試験に出る言葉」 2. 教科書・読解「第1章 短文・中文」①指示語の内容 3. 教科書・読解「第1章 短文・中文」②事実関係 4. 教科書・読解「第1章 短文・中文」③言葉の意味 5. 教科書・読解「第1章 短文・中文」④話の展開 6. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑤人物の気持ち 7. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑥理由や根拠 8. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑦全体の内容 9. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑧筆者が言いたいこと 10. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑨連絡文 11. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑩情報検索 12. 教科書・読解「第2章 長文A事実関係・論理関係に注目するパターン」①解説 13. 教科書・読解「第2章 長文A事実関係・論理関係に注目するパターン」②論説 14. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」①エッセイ 15. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」②エッセイ							
III. 講義の進め方 授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価 評価の内訳は、課題提出状況（50%）と授業中の質疑応答（50%）とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、7月に実施される日本語能力試験またはJ. TEST 日本語検定の受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場とし、欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修 語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること。 その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること。 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること。 それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること。							
VI. 使用教材 教科書：日本語能力試験N1 読解 必修パターン J リサーチ出版							

科目名	総合日本語Ⅳ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後期
I. 目的と内容および到達目標 総合日本語科目の総まとめの科目として、自習能力の完成を目指す。これまで養った日本語力を活用して読解問題の解答手続きの要領を整理のうえ総合練習を継続する。 到達目標は以下のとおりである。 ・応用的な日本語において統語的に正しく意味が通る文を組み立てたり、文や文章の内容に合った文法形式を判断したりする。 ・生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしの応用的なテキストを読んで、内容が理解する。 ・書き下ろした解説、エッセイなど350字程度の応用的なテキストを読み、キーワードや因果関係等を理解する。 ・解説、エッセイ、手紙など550字程度の応用的なテキストを読み、概要や論理の展開などが理解する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] 1. 教科書・読解「試験に出る言葉」 2. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」②小説 3. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」③紀行文 4. 教科書・読解「第1章 対策準備」①指示語の内容 5. 教科書・読解「第1章 対策準備」②事実関係 6. 教科書・読解「第1章 対策準備」③指示語(コソアド表現)の整理 7. 教科書・読解「第1章 対策準備」④文末表現の整理 8. 教科書・読解「第1章 対策準備」⑤接続表現の整理 9. 教科書・読解「第2章 実戦練習」①内容理解(短文) 10. 教科書・読解「第2章 実戦練習」②内容理解(中文) 11. 教科書・読解「第2章 実戦練習」③内容理解(長文) 12. 教科書・読解「第2章 実戦練習」④統合理解 13. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑤主張理解(長文) 14. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑥情報検索a 15. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑥情報検索b							
III. 講義の進め方 授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。また、授業には国語(日本語)辞典(電子辞典も可)を持参すること。							
IV. 試験と成績評価 評価の内訳は、課題提出状況(50%)と授業中の質疑応答(50%)とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、日本語能力試験(12月)またはJ.TEST日本語検定(11月)の受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修 語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること。 その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること。 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること。 それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること。							
VI. 使用教材 教科書：日本語能力試験N1読解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅢ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
1年次科目からの積み上げにより日常会話ができることが前提である。1年次に身に付けた日本語力を活用して日本語能力試験N1に合格することが2年次の学習目標となるため、日本語能力試験N1レベルに耐えうる高度なレベルが求められる。2年次は専門科目の履修などに備えるため、日本語力を最大限高められるよう趣旨を十分理解すること。これらに対応するため、必要に応じて会話・討論・プレゼンテーションなどの練習も予定する。 到達目標は以下のとおりである。 ・具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できる。 ・事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができる ・テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できる。 ・イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話が選択できる。 <SDGs(持続可能な開発目標)との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画[単位数：1単位、授業回数：15回]							
1. 教科書・聴解 「試験に出る言葉」 2. 教科書・聴解 基礎編「音の特徴を聞き分けよう」 3. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習(1) 助詞」 4. 教科書・聴解 基礎編「音の変化を聞き取ろう」 5. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習(2) 副詞」 6. 教科書・聴解 基礎編「終助詞」 7. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習(3) 接続詞」 8. 教科書・聴解 基礎編「イントネーション」 9. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習(4) 敬語」 10. 教科書・聴解 基礎編「指示詞」 11. 教科書・文法 PART1「2. N2・N3文型の復習」 12. 教科書・聴解 基礎編「副詞の省略表現」 13. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備(2) 言葉をつなぐ練習」 14. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備(1) N1文型の整理」① 15. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備(1) N1文型の整理」②							
III. 講義の進め方							
授業は予習が完了していることを前提とし日本語で演習形式により進める。聞き取るための具体的な方法を学ぶため、予習の段階で新出語句、発音などで理解できなかった個所を整理把握したうえで臨むと効果的である。							
IV. 試験と成績評価							
評価は課題提出状況(50%)、授業中の質疑応答(50%)により判定する。また、学習目標の到達度の客観的把握のため、日本語能力試験(7月)または、J.TEST日本語検定(7月)の受験を必須とする。携帯電話、スマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席と扱う。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること。 文法は問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること。 それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること。 聴解は教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること。 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること。(なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである) 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること。 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 日本語能力試験N1 文法 必修パターン Jリサーチ出版 日本語能力試験N1 聴解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅣ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 日本語コミュニケーション科目の総まとめの科目である。これまでに身に付けた日本語力を活用して日本語能力試験N1に合格することが2年次の学習目標となるため、日本語能力試験N1レベルに耐えうる高度なレベルが求められる。編入後の学習にも意識を向け積極的な学習姿勢を身に着けるため、必要に応じて会話・討論・プレゼンテーションなどの練習も実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できる ・事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができる ・テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できる ・イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話が選択できる <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [後期] 1. 教科書・文法「試験に出る言葉」 2. 教科書・聴解 基礎編「会話の流れ」 3. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備(3) 文と文をつなぐ練習」 4. 教科書・聴解 対策編「第1章 課題理解」 5. 教科書・文法 PART2「第2章 実戦練習(1) 問題5に挑戦」 6. 教科書・聴解 対策編「第2章」ポイント理解 7. 教科書・文法 PART2「第2章」実戦練習(2) 問題6に挑戦 8. 教科書・聴解 対策編「第3章」概要理解 9. 教科書・文法 PART2「第2章」実戦練習(3) 問題7に挑戦 10. 教科書・聴解 対策編「第4章」即時応答 11. 教科書・文法「模擬問題」① 12. 教科書・文法「模擬問題」② と 教科書・聴解 対策編「模擬問題」① 13. 教科書・聴解 対策編「模擬問題」② 14. 教科書・聴解 対策編「第5章 統合理解」① 15. 教科書・聴解 対策編「第5章 統合理解」②							
III. 講義の進め方 授業は予習が完了していることを前提とし日本語で演習形式により進める。聞き取るための具体的な方法を学ぶため、予習の段階で新出語句、発音などで理解できなかった個所を整理把握したうえで臨むと効果的である。							
IV. 試験と成績評価 評価は課題提出状況(50%)、授業中の質疑応答(50%)により判定する。また、学習目標の到達度の客観的把握のため、日本語能力試験(11月)または、Jtest 日本語検定(12月)の受験を必須とする。携帯電話、スマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席と扱う。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修 語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること。 文法は問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること。 それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること。 聴解は教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること。 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること。(なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである) 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること。 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと。							
VI. 使用教材 教科書 : 日本語能力試験N1 文法 必修パターン Jリサーチ出版 日本語能力試験N1 聴解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	ク リ ー ン 農 業 論	教員名	佐藤 毅 さとう たかし	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期																																													
I. 目的と内容および到達目標																																																				
20 世紀は大量生産・大量消費の時代となり、農業においては食の安全・安心が危ぶまれるとともに、環境に及ぼす負荷が増大し、このままの近代化には限界が見えてきた。本講義は、このような視点で農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 人類の農耕開始から現代に至るまで、農業が環境とどのようにかかわってきたかを正しく認識する。 ・ 急速に近代化した農業がどのような環境問題を抱え、これからの農業がどうあるべきかを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑧経済成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源																																																				
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]																																																				
[後期]																																																				
<table><tr><td>1. クリーン農業を学ぶ意味</td><td>:</td><td>そもそも農業とは何か、環境とは</td></tr><tr><td>2. 農業生態系に関する基礎知識</td><td>:</td><td>自然生態系と農業生態系の違い</td></tr><tr><td>3. 拡大を続ける人類の活動</td><td>:</td><td>DVD; 18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか</td></tr><tr><td>4. 化学肥料の発明と普及</td><td>:</td><td>化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術</td><td>:</td><td>化学肥料の使用量を合理的に減らすには</td></tr><tr><td>6. 有害生物の防除と化学農薬の開発</td><td>:</td><td>化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>7. 農薬登録と安全性の確保</td><td>:</td><td>我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは</td></tr><tr><td>8. 減農薬をいかに達成するか</td><td>:</td><td>IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは</td></tr><tr><td>9. IPN と天敵</td><td>:</td><td>DVD ; 実際例)</td></tr><tr><td>10. 遺伝子組換え作物</td><td>:</td><td>遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み</td></tr><tr><td>11. 食料と肥料の収支</td><td>:</td><td>日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡</td></tr><tr><td>12. 農業の規範・基準</td><td>:</td><td>農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean</td></tr><tr><td>13. クリーン農業とは</td><td>:</td><td>めざすべき環境保全型農業とは</td></tr><tr><td>14. 環境行政と環境関連法令</td><td>:</td><td>DVD; 時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策</td></tr><tr><td>15. クリーン農業を学ぶ意味</td><td>:</td><td>おさらい</td></tr></table>								1. クリーン農業を学ぶ意味	:	そもそも農業とは何か、環境とは	2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い	3. 拡大を続ける人類の活動	:	DVD; 18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか	4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか	5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには	6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか	7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは	8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは	9. IPN と天敵	:	DVD ; 実際例)	10. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み	11. 食料と肥料の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡	12. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean	13. クリーン農業とは	:	めざすべき環境保全型農業とは	14. 環境行政と環境関連法令	:	DVD; 時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策	15. クリーン農業を学ぶ意味	:	おさらい
1. クリーン農業を学ぶ意味	:	そもそも農業とは何か、環境とは																																																		
2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い																																																		
3. 拡大を続ける人類の活動	:	DVD; 18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか																																																		
4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか																																																		
5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには																																																		
6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか																																																		
7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは																																																		
8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは																																																		
9. IPN と天敵	:	DVD ; 実際例)																																																		
10. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み																																																		
11. 食料と肥料の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡																																																		
12. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean																																																		
13. クリーン農業とは	:	めざすべき環境保全型農業とは																																																		
14. 環境行政と環境関連法令	:	DVD; 時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策																																																		
15. クリーン農業を学ぶ意味	:	おさらい																																																		
III. 講義の進め方																																																				
授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施し、次回に採点した答案を返却する。																																																				
IV. 試験と成績評価																																																				
毎回の小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。																																																				
V. 授業外学修																																																				
毎回配布するプリントだけではなく、ルーズリーフ等を活用して、授業ファイルを作成することを勧める。予習として、関連する参考書を読んで生じた疑問点などをファイルに書きだして出席し、積極的に質問すること。復習として、プリントの記載だけではなく、ファイルに重要事項をまとめておくこと。																																																				
VI. 使用教材																																																				
教科書：プリントを毎回配付する。 参考書：『クリーン農業時代』相馬 暁監修（チクマ秀版社）、『北海道いま農業が面白い』『2020 年農業が輝く』相馬 暁（北海道新聞社）、『クリーン農業導入手引き書』北海道農政部編（北海道農業改良協会）2002、『地球をめぐる不都合な物質』日本環境化学会編集（講談社ブルーバックス）、『世界で最初に飢えるのは日本』鈴木宣弘（講談社+α 新書																																																				
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像について教授します。																																																				

科目名	2 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各 専 任 教 員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年 次	前 ・ 後 期
I. 目的と内容および到達目標							
学生が選択した各ゼミナールの基本テーマに基づいた調査・研究を行う取り組みであるが、ゼミナール内の学生相互による啓発活動により、設定した具体的なテーマの課題解決に向けた取り組みが主な内容である。 各学生は、ゼミナール担当教員の指導、学内外の関係先からの助言など受けながら、学生生活の集大成として、自らのテーマに取り組むことになる。1 2 月に開催する「卒業制作発表」で、その成果を学内外に発表するとともに、「卒業論文」という形で結実させる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 自己の研究目的、研究方法、内容等を説明できる。 ・ 自己の研究課題について、十分な根拠に基づいて説明・論述できる。 ・ グループワークやディスカッションなどの協働的活動を遂行することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回]							
[前・後期] 授業は各ゼミナールの研究テーマ、展開に応じて行われる。 学生が設定した研究課題について、様々な手段を活用して調査を進めることとなる。 特定の課題、内容に制約されることなく、学生の自主的な活動を中心に授業が展開される。 なお、卒業制作発表会は2年ゼミナールに位置づける。							
III. 講義の進め方							
各ゼミナール担当教員が提示する、資料・教材、方法を基に進められる。 各学生の自発的な学習を中心とした進め方とする。							
IV. 試験と成績評価							
ゼミナール毎に提示された課題レポートの成果物、ゼミナール活動が評価対象の中心であるが、卒業制作発表会への取り組み状況なども評価の対象となる。 卒業制作発表会では、自ら設定した研究課題に基づいて、調査・研究した内容を適切にプレゼンテーションできたかを評価するが、具体的な配点は各ゼミで説明する。							
V. 授業外学修							
ゼミナール担当教員が適時指示する課題やテーマについて、次時までには調査をしておくことで、本時の理解が深まる。 限られた講義の時間内で、調査、研究、発表の準備などは到底できないため、空き時間等を有効につかうこと。 学内施設の利用の規定を守り、他の学生と譲り合いながら使用することで、計画的で効率的な研究の方法を身につけることができる。							
VI. 使用教材							
教科書 : 各ゼミナール担当教員が指示する。 参考書 : 各ゼミナール担当教員が適宜指示する。							

科目名	ビジネス実務演習Ⅰ	教員名	我妻・米野・畠田	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標 社会人として職場に必要な基礎知識・技術の修得を目指す。また、「発信力」、「表現力」を問われる昨今のビジネスで必要なプレゼンテーション能力の向上も、本科目で目指す重要な目的のひとつである。 到達目標は以下のとおりである。 ・職業意識の意義を知り、基礎知識を持っている。 ・人前でのプレゼンテーションができる。 ・基礎的なビジネス常識とビジネスマナーを身につけている。 ・社会人に必要な労働法規や税制の初歩的な知識を身につけている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用 ⑩不平等 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔前期〕 1. キャリアと仕事へのアプローチ 2. 仕事の基本となる8つの意識 3. コミュニケーションとビジネスマンの基本 4. 指示の受け方と報・連・相 5. 話し方と聞き方のポイント 6. 来客対応と訪問の基本マナー 7. 会社関係でのつきあい 8. 仕事への取り組み方 9. ビジネス文書の基本 10. 電話対応 11. 統計・データの読み方とまとめ方 12. 情報収集とメディアの活用 13. 企業を取り巻く環境と経済の基本 14. 産業と経済の基本構造と動向 15. ビジネス用語の基本							
III. 講義の進め方 ビジネスキルを修得するために必要な知識については主に講義形式で行うが、事例研究を中心に学生自身のプレゼンテーションなど主体的な参加が必須となる実践的な演習として行われる。 進路希望別クラス編成を実施するので、各クラス担当教員からの具体的計画の説明に留意すること。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は演習中のプレゼンテーション50%、レポート50%で行う予定である。詳しくは、授業計画の具体的な内容に即して担当者より説明を行う。							
V. 授業外学修 ・企業経営、社会問題、国際関係、政治動向などのニュースを日々チェックし、興味関心のあるものについては、自分の意見や感想などを加えてPCに記録・保存する習慣を身につけること。							
VI. 使用教材 教科書：授業時に指示する。 参考書：『ビジネス能力検定ジョブパス3級公式テキスト』ビジネス能力検定研究会著（日本能率協会マネジメントセンター）							

科目名	ビジネス実務演習Ⅱ	教員名	我妻・米野・畠田	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 社会人として職場に必要な基礎知識・技術の修得を確実にすることを目指す。また、「発信力」、「表現力」を問われる昨今のビジネスに必要なプレゼンテーション能力の一層の向上も、本科目で目指す重要な目的のひとつである。 到達目標は以下のとおりである。 ・職業意識の意味を知り、基礎知識を修得している。 ・人前でのプレゼンテーションが効果的にできる。 ・基礎的なビジネス常識とビジネスマナーを活用できる。 ・社会人に必要な労働法規や税制の初歩的な知識を活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔後期〕 1. キャリアと仕事へのアプローチ 2. 会社活動の基本 3. 話し方と聞き方 4. 接客と営業の進め方 5. クレーム対応 6. 会議への出席とプレゼンテーション 7. チームワークと人のネットワーク 8. 情報社会での仕事の進め方 9. 多様なビジネス文書 10. 統計・データ分析 11. 情報収集とメディアの活用 12. 会社数字の読み方 13. ビジネスと法律・税金知識 14. 産業と経済の基礎知識 15. 社会人基礎力とビジネス実務							
III. 講義の進め方 ビジネスキルを修得するために必要な知識については主に講義形式で行うが、事例研究を中心に学生自身のプレゼンテーションなど主体的な参加が必須となる実践的な演習として行われる。 進路希望別クラス編成を実施するので、各クラス担当教員からの具体的計画の説明に留意すること。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は演習中のプレゼンテーション 50%、レポート 50%で行う予定である。詳しくは、授業計画の具体的内容に即して担当者より説明を行う。							
V. 授業外学修 ・各自で決めたテーマに関わるニュースや文献・資料などを収集し、それぞれの要点をまとめることを習慣化すること。							
VI. 使用教材 教科書：授業時に指示する。 参考書：『ビジネス能力検定ジョブパス2級公式テキスト』ビジネス能力検定研究会著（日本能率協会マネジメントセンター）							

科目名	経営学総論	教員名	わがつま 我妻 きみひろ 公裕	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
ビジネスを学ぶ上で、企業と呼ばれる組織・事業体に関する基礎的知識は不可欠であり、しかも持続的に進化し続けている。これら企業の経営に関する仕組みや戦略などを理論的に学ぶことで、ビジネス社会で活躍する有為な人材としての役割を果たせるよう、課題解決能力の育成を目指す。 マーケティング、組織マネジメントなど、企業経営に必要な知識・技術を含めた、将来必要となるキャリアスキルを身に付ける。政治・経済の情勢とも深く関わることから、今日的な課題からも学ぶこととする。 到達目標は以下のとおりである。 ・株式会社、多様な企業・組織の種類と特徴についての理解。 ・マーケティングやマネジメントについての理解（販売戦略と組織管理）。 ・SDGsへの取り組みの理解（企業の社会的役割）。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥水・衛生 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑭海洋資源 ⑮陸上資源 ⑯平和 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数： 2単位、授業回数：15回]																																					
[前期]																																					
<table><tr><td>1. 経営学の基礎（ドラッカー）</td><td>(教科書第1章)</td></tr><tr><td>2. 組織論（バーナード）</td><td>(教科書第2章)</td></tr><tr><td>3. 人的資源管理（メイヨー）</td><td>(教科書第3章)</td></tr><tr><td>4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）</td><td>(教科書第4章)</td></tr><tr><td>5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）</td><td>(教科書第4章)</td></tr><tr><td>6. 生産管理（テイラー）</td><td>(教科書第5章)</td></tr><tr><td>7. マーケティングⅠ（バーテレス）</td><td>(教科書第6章)</td></tr><tr><td>8. マーケティングⅡ（コトラー）</td><td>(教科書第6章)</td></tr><tr><td>9. 営業管理・意思決定（マズロー、サイモン）</td><td>(教科書第7章、第8章)</td></tr><tr><td>10. 会計・財務管理</td><td>(教科書第9章、第10章)</td></tr><tr><td>11. 企業経営のグローバル化</td><td>(教科書第11章)</td></tr><tr><td>12. 経営情報管理</td><td>(教科書第12章)</td></tr><tr><td>13. 個人・企業のあり方</td><td>(教科書第13章)</td></tr><tr><td>14. 現代社会の課題（2030年に向けて）</td><td>(教科書第14章)</td></tr><tr><td>15. 現代社会の課題（2050年に向けて）</td><td></td></tr></table>								1. 経営学の基礎（ドラッカー）	(教科書第1章)	2. 組織論（バーナード）	(教科書第2章)	3. 人的資源管理（メイヨー）	(教科書第3章)	4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）	(教科書第4章)	5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）	(教科書第4章)	6. 生産管理（テイラー）	(教科書第5章)	7. マーケティングⅠ（バーテレス）	(教科書第6章)	8. マーケティングⅡ（コトラー）	(教科書第6章)	9. 営業管理・意思決定（マズロー、サイモン）	(教科書第7章、第8章)	10. 会計・財務管理	(教科書第9章、第10章)	11. 企業経営のグローバル化	(教科書第11章)	12. 経営情報管理	(教科書第12章)	13. 個人・企業のあり方	(教科書第13章)	14. 現代社会の課題（2030年に向けて）	(教科書第14章)	15. 現代社会の課題（2050年に向けて）	
1. 経営学の基礎（ドラッカー）	(教科書第1章)																																				
2. 組織論（バーナード）	(教科書第2章)																																				
3. 人的資源管理（メイヨー）	(教科書第3章)																																				
4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）	(教科書第4章)																																				
5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）	(教科書第4章)																																				
6. 生産管理（テイラー）	(教科書第5章)																																				
7. マーケティングⅠ（バーテレス）	(教科書第6章)																																				
8. マーケティングⅡ（コトラー）	(教科書第6章)																																				
9. 営業管理・意思決定（マズロー、サイモン）	(教科書第7章、第8章)																																				
10. 会計・財務管理	(教科書第9章、第10章)																																				
11. 企業経営のグローバル化	(教科書第11章)																																				
12. 経営情報管理	(教科書第12章)																																				
13. 個人・企業のあり方	(教科書第13章)																																				
14. 現代社会の課題（2030年に向けて）	(教科書第14章)																																				
15. 現代社会の課題（2050年に向けて）																																					
III. 講義の進め方																																					
基本は講義形式とするが、専門的な用語が多出するため、ケーススタディ（事例や新聞記事等）を活用した対話的学びによって理解を深める。そのため、ビジネス活動に関するトピックに注視しておくことよい。 毎時の終了時（理解度の確認）に小テストを実施する。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（40％）、小テスト（40％）、課題レポートの内容・完成度（20％）を基本とする。 講義テーマの理解につながる積極的な発問、回答の内容も評価に加算する。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書に事前に目を通し、新出用語（専門用語）を抜き出すなどして理解を深めておくこと。 毎時間に使用するプリントは本時終了後に回収、次時の始めに採点後に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：プレスステップ経営学＜第2版＞北中英明著（拓殖大学商学部教授） 弘文堂 参考書：適宜紹介する。																																					

科目名	現 代 企 業 論	教員名	むらかみ りょういち 村上 良一	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の前半では、日本経済の変遷と現状も交えながら企業の構造的特徴や企業統治、社会的責任といった今日的課題について、後半では主としてグローバル化の下で国内外の企業が行動する際の特徴や課題について講義を行う。上記項目についてできるだけ事例紹介を交えた講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代企業の特徴と課題について基本的な理解ができるようになる。 ・日本企業の海外展開の歴史と現状について基本的な理解ができるようになる。 ・グローバル化の下での多国籍企業の新しい行動について基本的な理解ができるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔前期〕 1. 会社と企業 2. 企業とは何か——各視点による区分とそれぞれの諸特徴 3. 株式会社の特徴と仕組み(1)株式とは何か——株式会社の原理 4. 株式会社の特徴と仕組み(2)株式の役割の変化 5. 企業集団と系列(1)——トヨタシステムの事例紹介を中心に 6. 企業集団と系列(2)企業集団と系列の理論 7. 日本企業の特徴とその変容 8. コーポレートガバナンスと「株主主権」論がもたらす意味 9. グローバル経済の現段階と企業 10. 多国籍企業の定義と成長理論 11. ビッグ・テック成長をもたらしたもの(1)技術開発と企業戦略の発展 12. ビッグ・テック成長をもたらしたもの(2)古くて新しい利得手段タックスヘイブンの活用など 13. 多国籍企業の新戦略の実態——アジアを中心に 14. 日本企業のグローバル化対応への課題 15. 企業の社会的責任とSDGs							
III. 講義の進め方							
配布プリントを中心にスライド、板書等を利用して講義形式で行う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート（30％）期末レポート試験(70％)の合計で評価する。							
V. 授業外学修							
自分の関心のある分野で事業展開している企業のニュースを集め、コメントをつけて記録し保存しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：三戸浩他『企業論(第4版)』（有斐閣）、夏目啓二『21世紀ICT企業の経営戦略』文真堂、橋本寿朗他『現代日本経済(第4版)』（有斐閣）、丸山恵也編著『現代日本の多国籍企業』新日本出版社							

科目名	マ ク ロ 経 済 学	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
標準的な経済理論にはミクロ経済学とマクロ経済学という二つのアプローチがある。本講義では、国民所得・投資・消費・失業率などの巨視的な集計概念を用いて、システム全体としての経済の運行法則を分析するマクロ経済学の基本的な考え方を学ぶ。多くの経済時事の話題はマクロ経済学の考え方をを用いて読み解くことができる。現在の日本経済が抱える課題と見通しなど、実際の経済問題を取り上げながら基本理論を応用して理解する。 マクロ経済学の基礎的な考え方が現実の経済分析にどれほど有効であることを示しつつ、マクロ経済学の基本的な考え方を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ニュースや新聞の経済記事に出てくる、主要な経済指標間の相関関係を理解し説明できる。 ・主要な経済指標の変化が経済全体にどのような変化を引き起こすかを説明することができる。 ・財政政策・金融政策の基本的な手法とその効果を説明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑬貧困 ⑭成長・雇用 ⑮不平等 ⑯実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業週数：15 回]							
[後期] 1. 経済学とはどのような学問か 2. マクロ経済学の基礎概念 3. マクロ経済学における需要と供給 4. 有効需要の原理と国民所得の決定 5. 貨幣の機能と貨幣市場 6. マクロ経済政策 7. IS-LM 分析 I：IS-LM 分析とはなにか 8. IS-LM 分析 II：IS-LM 曲線の導出 9. マクロ経済政策の効果分析 I：財政政策の効果 10. マクロ経済政策の効果分析 II：金融政策の効果 11. 総需要と総供給 I：総需要曲線と総供給曲線 12. 総需要と総供給 II：物価水準の決定と 2 つの市場観 13. インフレーションと失業 14. 経済成長と経済発展 15. マクロ経済学の全体像と近年の動向							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。各種試験対策に向けて基本的な計算問題も取り扱う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・小テスト(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。マクロ経済理論の理解には一つ一つの積み重ねが非常に重要である。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書：指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書：『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『入門 経済学 第4版』伊藤元重(日本評論) 『マクロ経済学』アセモグル・レイブソン・リスト(東洋経済新報社)							

1 科目名	ミ ク ロ 経 済 学	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
標準的な経済理論にはミクロ経済学とマクロ経済学という二つのアプローチがある。本講義では、家計行動と企業行動の理論から導き出される需要供給分析の基礎的な内容を学ぶ。具体的には、完全競争における部分均衡分析と余剰分析、一般均衡分析とパレート最適、不完全競争市場、市場の失敗など、主要なトピックを取りあげる。機会費用・サンクコスト・不完全競争市場の知識は現実の企業行動を理解するのに役立つほか、余剰分析や市場の失敗の議論を通じて政府の経済的な役割とその政策を評価するための基本的な見方を学ぶことができる。 到達目標は以下のとおりである。 ・完全競争における部分均衡と余剰の分析の基礎を理解している。 ・不完全競争市場について理解している。 ・一般均衡の妥当性と市場の失敗の存在を理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑨イノベーション ⑧成長・雇用 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. ミクロ経済学とはなにか 2. 家計の行動 I: 無差別曲線と予算制約線 3. 家計の行動 II: 所得効果と代替効果 4. 家計の行動 III: 需要曲線とその性質 5. 企業の行動 I: 費用関数 6. 企業の行動 II: 最適行動と供給曲線 7. 企業の行動 III: 供給曲線の性質 8. 完全競争市場における均衡 9. 不完全競争市場 I: 独占企業の最適行動 10. 不完全競争市場 II: 独占的競争の均衡 11. 効率と公平 I: 経済学における望ましさ 12. 効率と公平 II: 競争均衡の効率性 13. 一般均衡とパレート最適 14. 市場の失敗 15. 伝統的なミクロ経済学の全体像と近年の動向							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。各種試験対策に向けて基本的な計算問題も取り扱う。また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・小テスト(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。ミクロ経済理論の理解には一つ一つの積み重ねが非常に重要である。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『入門 経済学 第4版』伊藤元重(日本評論) 『ミクロ経済学』アセモグル・レイブソン・リスト(東洋経済新報社)							

科目名	日 本 酒 学	教員名	専任教員 非常勤講師	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 日本酒学をととして、日本酒の歴史・文化・分類・楽しみ方・風土など日本酒を育む背景を理解するとともに、酒米生産、醸造技術など日本酒ができるまでの過程を学習する。また、アルコール飲料にかかる法規制、アルコールと健康、販売戦略、日本酒による地域振興など、日本酒を題材にして幅広い内容を分野横断的に学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本酒醸造は我が国が誇るべき食品加工技術及び文化であることを理解する。 ・地域で生産された米を活用した日本酒造りの基礎的な知識と技術を理解する。 ・日本酒検定 3 級取得レベルの知識を得る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. 概説（清酒の歴史と文化、なぜ日本酒学を学ぶか） 2. 酒類総説（製造法・糖化、発酵、酒税法による分類） 3. 酒を科学し造り手を支える国税局鑑定官室の取り組み 4. 北海道における酒造好適米の生産と販売 5. 北海道における酒造好適米の品種改良と今後の課題 6. 北海道における酒造好適米の栽培技術 7. 発酵とは ～ 酵母と麹・微生物の世界 8. 日本酒の製造工程 9. 私の目指す酒造り 10. 酒蔵の経営とマーケティング戦略 11. 食彩豊かな日本の食卓 ～ 料理と酒のハーモニー 12. アルコール飲料にかかる法規制 13. アルコールと健康 14. 日本酒と地域振興 15. 総括 ～ 日本酒検定 3 級に向けて							
III. 講義の進め方 授業は、本学専任教員が専門分野に係る講義を行うほか、各界の専門家を非常勤講師に招いて、オムニバス形式で実施する。主に対面の講義形式で実施するが、場合によって Zoom 等を用いたオンライン授業を行う。講師の都合などで、授業計画に変更があることに留意する。							
IV. 試験と成績評価 各授業における小テスト（100％）により評価する。							
V. 授業外学修 オムニバス形式のため、事前にプリントを配布することは難しいので、授業外学習は復習中心となる。予習については、参考書等により関連する内容を予習し、疑問点を整理したうえで授業に臨むこと。日本酒検定 3 級取得をぜひ目指してほしい。							
VI. 使用教材 毎回プリントを配布する。 参考書として、「新訂 日本酒の基 唎酒師必携」NPO 法人 FBO（料飲専門家団体連合会）を推薦する。							

科目名	グリーン・ツーリズム論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
グリーン・ツーリズムは日本では農村振興策の一つとして 20 世紀末の 1990 年代以降注目されるようになってきた。本講義では、グリーン・ツーリズムの概要と海外の事例、北海道内外の事例そしてやはり新しく生まれてきた地域資源を再発見する他のツーリズムについても紹介していく。そしてグリーン・ツーリズムを契機に生活全般を見直し環境と調和する持続可能な生活様式についても考えてゆくことを目標とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・グリーン・ツーリズムに関する基本的な知識を持っている。 ・日本と北海道のグリーン・ツーリズムの取組みの基礎的な知識を持っている。 ・都市農村交流の意義が理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 現代日本社会が抱える諸問題解決の糸口としてのグリーン・ツーリズム 2. 日本のグリーン・ツーリズムの普及過程 3. グリーン・ツーリズムへの多様なアプローチ 4. 農業の構造変化によるグリーン・ツーリズム創出の必要性 5. 日本のグリーン・ツーリズムの事例紹介 6. 西欧のグリーン・ツーリズム 7. 韓国のグリーン・ツーリズム 8. 台湾のグリーン・ツーリズム 9. 中国のグリーン・ツーリズム 10. 海外のグリーン・ツーリズムの事例紹介 11. 北海道のグリーン・ツーリズム（畑作地域） 12. 北海道のグリーン・ツーリズム（稲作地域 草地酪農地域） 13. 体験教育とグリーン・ツーリズム 14. 農家民泊とグリーン・ツーリズム 15. 日本社会とグリーン・ツーリズム——持続可能な生活様式を目指して							
III. 講義の進め方							
・スライド、プリント、板書を適宜使用して進める。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)とで評価することを予定している。							
V. 授業外学修							
・グリーン・ツーリズムや都市農村交流に関わるニュースを意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 山崎光博『グリーン・ツーリズムの現状と課題』(筑波書房)、井上和衛『グリーン・ツーリズム—軌跡と課題』(筑波書房)、長尾正克編著『グリーン・ツーリズム 北海道からの発信』(筑波書房)、佐藤真弓『都市農村交流と学校教育』(農林統計出版)、宮田静一『農泊のススメ』(弦書房)。							

科目名	食品・農産物流通論	教員名	村 ^{むら} 上 ^{かみ} 良 ^り 一 ^{よういち}	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、規制緩和が進行する現下の農産物流通の特徴や課題について明らかにすることを目的とする。そのために最初に流通論の基本的な講義を数回程度行い流通に関するイメージを与える。続いて、食品・農産物流通に関する講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・流通一般の意義や基本的な仕組みについて理解し、説明できるようになる。 ・農産物流通について基本的な理解ができ、説明できるようになる。 ・主要な農産物の流通の具体的な仕組みについて基本的な理解ができ説明できるようになる。 ・農産物地域ブランド戦略など農産物販売戦略に役立てられるような基礎的知識が身につけられるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 講義の進め方や関連学問分野の紹介、流通論の基本について 2. 小売業・卸売業といった流通に関わる基本的概念や社会的意義などについて 3. 物流等流通に関する事例紹介と解説 4. 日本の商業・流通の発展史の概説 5. スーパーマーケット、コンビニ、ネット通販等流通の現在について 6. 農産物流通の独自性について特に農協共販の意義とその課題について 7. 卸売市場の発展過程と意義について 8. 流通再編下、改めて確認されるべき卸売市場の意義とその課題について 9. 食品流通の現状が及ぼす地球環境への影響についての事例紹介 10. 農産物地域ブランド戦略と事例紹介 11. 食管制度廃止以降“一般商品化”が進行する米の流通について 12. 消費上限なき農産物ともいわれる花卉の流通の現状と課題について 13. 畜産物輸入激増へと変貌したもとの畜産物の流通について(食肉) 14. 需給調整が著しく困難でありながら苦境にあえいでいる畜産物の流通について(牛乳・乳製品) 15. 今後の食品・農産物流通の課題と展望について							
III. 講義の進め方							
講義スライドを映写しながら、講義を行うことを基本とする。また、講義の内容理解を深めるため、数回程度、参考資料として解説を加えながらDVD視聴を行うことを予定している。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小レポート(30%) 期末のレポート試験(70%)で行う。							
V. 授業外学修							
・食料品購入時において、価格変動や品ぞろえ、陳列方法の特徴などについて注意深く観察することを心掛けること。 ・食料品のならず、流通一般に関するニュースを日々チェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 日本農業市場学会編『農産物・食品の市場と流通』(筑波書房)、藤島廣二他『フード・マーケティング論』(筑波書房)、桂 暎一編著『青果物のマーケティング』(昭和堂)。							

科目名	N P O 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
NPO(Non Profit Organization)は非営利組織と訳される。大規模自然災害時の復興支援活動や福祉教育分野などで積極的に活動していることでその名称は聞いた人も多かろう。講義では、広義の非営利組織について概説した後に、その構成部分である NPO の組織・運営、支援制度、政府・企業との関係、課題などについて紹介・解説することを目的・内容とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・非営利組織の存在意義について理解できるようになる。 ・非営利組織の活動・運営の基本について理解できるようになる。 ・非営利組織と政府・営利企業との関係性について理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑪実施手段 ⑩不平等 ①貧困 ③保健 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. NPO活動の事例紹介の動画視聴を交えて営利、営利の意味などを解説 2. NPOの定義と存在理由 3. NPOの現状と構造 4. NPO活動の事例紹介 5. NPOと法・制度（NPO法） 6. NPOと法・制度（公益法人制度など） 7. NPOと行政（国・地方公共団体）との関係（新しい公共など） 8. NPOの基礎的事項に関する理解を促進するための解説と意見交換 9. NPOと行政（国・地方公共団体）との関係（指定管理者制度など） 10. NPOと企業との関係（企業の社会的責任） 11. 社会起業家と社会的企業について 12. 社会起業家の事例紹介 13. NPOの運営（マネジメント） 14. NPOの資金調達と評価 15. 今後のNPOの課題と展望について							
III. 講義の進め方							
基本は、スライドとプリントを併用しながら講義形式で行う。動画視聴とそれについての意見交換など双方向式形式も適宜取り入れる。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は2回の小レポート30%、期末レポート70%の点数配分で評価する。							
V. 授業外学修							
非営利組織に関わる福祉・医療・雇用支援・教育・防災・災害復興支援活動などのニュースについて注意を払っておくこと。そして非営利組織の社会的な意義を確認し、将来の進路選択のひとつとしてもとらえられるようになることも想定し、資料収集しておくことよい。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない。 参考書：澤村 明他『はじめてのNPO論』（有斐閣）、乙武洋匡他『NPOの教科書』（日経BP）、斎藤慎『社会起業家』（岩波書店）、山本隆編著『社会的企業論』（法律文化社）。							

科目名	地域観光ビジネス論	教員名	ながやま しげる 永山 茂	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この授業の目的は、観光立国を掲げる我が国の中で、北海道地域でのその政策や現状、社会的役割を理解するとともに、将来を見据えた課題などに関する基礎知識を習得する事にある。 前半の講義では観光政策論をベースした他国・他地域の事例を学び、北海道での地域観光ビジネスの実態を学ぶ基礎知識を習得する。後半の講義では応用観光論の視点を用いて、北海道で展開される観光ビジネスの実態を知り、特徴的な事例や先進事例などを参考にしながら、抱える課題や将来展望を学ぶ。 レポート指導を実施し、指定されたテーマ分量の提出を求め学力を評価する。 到達目標は以下のとおりである。 ・観光ビジネス全般に関する基礎知識を習得し、これらの業界構造や社会的位置づけ、課題等を学ぶこと。 ・地元北海道における観光ビジネスの実態を知り、新たな観光プランを創出できる基礎知識を得ること。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑬平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. はじめに・・・観光産業と地域観光ビジネスの学び方（ガイダンス・第Ⅰ・Ⅱ部の振り返り） 2. 観光立国と国際観光（教科書第10章の1） 3. 近年の国際観光の動向（教科書第10章の2） 4. 国際観光と社会変容（教科書第10章の3） 5. 諸外国の観光政策（教科書第11章の1） 6. 観光政策の事例研究（教科書第11章の2・3） 7. 地域観光とまちづくり、およびSDGsと地方創生（教科書第12章） 8. 北海道の観光政策と身近な事例研究（教科書第12章付属） 9. 北海道地域での応用観光論 ①コンテンツツーリズムとクールジャパン（教科書第13章） 10. 北海道地域での応用観光論 ②ブライダルツーリズム（教科書第14章） 11. 北海道地域での応用観光論 ③メディカルツーリズム ④ダークツーリズム（教科書第15章） 12. 北海道地域での応用観光論 ⑤フードツーリズム（食文化観光）（レポート指導・教科書第16・17章） 13. 北海道地域での応用観光論 ⑤祭礼文化と観光（イベント型観光）（教科書第18章）＊レポート指導 14. 特別講義 「旅行産業最前線レポート（仮題）」 15. まとめ 地域観光ビジネスの展望（レポート提出）（＊講義順は進捗により変更する場合があります）							
III. 講義の進め方							
各回講義要綱・教科書の章立てに添った講義を行う。また必要に応じてパワーポイントや動画も利用する。また講義内容はできる限り1講義完結型で行ない、分かりやすく講義を進めて行く。							
IV. 試験と成績評価							
授業への参加度（50％）とレポート提出（50％）で評価する。 全授業数の3分の1を欠席した場合は、単位取得の資格がなくなるため「F評価」となる。 なお授業開始20分以内に入室した場合のみ「遅刻」とする。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある教科書の指定された範囲を予め読んでから授業に参加すること。 授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示します。 予習で生じた疑問などは事前にノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書：「入門 観光学」竹内正人/竹内利江/山田浩之（編著）ミネルヴァ書房刊 参考書：授業の中で必要に応じて紹介する。							
＊実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、旅行業での実務経験を有し、当該科目における北海道地域での基幹産業としての観光ビジネスについて教授します。							

科目名	ボランティア論	教員名	我妻 公裕	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
ボランティア活動は、社会のさまざまな課題を背景に行われている。そのため、ボランティア活動は持続的な地域社会を築く上でも重要な役割を果たしている。また、ボランティア活動をする人自身の自己開発などの機会でもある。 本講義では、ボランティア活動の基本概念・歴史・社会的意義など基礎的な知識を学ぶ。また、ボランティア活動の活動領域・活動形態・活動動機の多様性を知り、ボランティア活動を実践する素地を養う。 到達目標は以下のとおりである。 ・ボランティア活動の定義、意義について理解できるようになる。 ・ボランティア活動の多様な領域、活動実践について理解できるようになる。 ・現代社会や地域が抱える課題に対するボランティア活動の役割と可能性を検討することができるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑪実施手段 ①貧困 ③保健 ④教育 ⑩不平等 他							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 授業ガイダンス、ボランティアとは 2. ボランティア活動の基本的性格、理念・理想 3. ボランティア活動の意義・役割 4. ボランティアの歴史 5. ボランティア活動の現状 6. ボランティア活動の行動プロセス 7. ボランティアと公共活動 8. 地域課題とは 9. 福祉分野のボランティア活動 10. 災害分野・環境分野のボランティア活動 11. 教育とボランティア 12. まちづくりとボランティア 13. 国際協力とボランティア 14. ボランティア・マネジメント 15. ボランティア活動の未来							
III. 講義の進め方							
スライド、プリントを用いる。小テスト、レポートなど演習課題に取り組む。 なお、毎時の終了時（理解度の確認）に小テストを実施する。							
IV. 試験と成績評価							
授業プリント（40%）、小テスト（40%）、課題レポートの内容・完成度（20%）を基本とする。 講義テーマの理解につながる積極的な発問、回答の内容も評価に加算する。							
V. 授業外学修							
現実社会における事象と関連付けて理解することで、レポート課題がより具体的に執筆できる。 深い洞察力に基づく考察を書くためには、国内外や地域で行われているボランティア活動や社会問題等に関するニュース、文献・資料、統計データなどを実際に自分で調べるなどして普段から情報収集を行い、考えや感想などを記録しておくことが必要となる。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない（適宜プリントを配布） 参考書：『ボランティアのすすめ―基礎から実践まで』（ミネルヴァ書房） 『これだけは理解しておきたいボランティアの基礎』（日本橋出版）他							

科目名	会 計 学	教員名	わがつま 我妻 公裕	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
簿記は、経済事象を数字（貨幣）により記録・計算・整理する普遍的な技術である。一方、会計は社会規範と結びつき、財務会計、管理会計および社会会計など制度会計として確立した社会科学分野の学びである。会計の理論に触れ、簿記の本質を理解することで、変化の激しいビジネス社会において、会計情報を積極的に活用する能力を身に付ける。 「会計」が担う役割に触れ、職業・職種選択における「会計人」についての理解を深める。 到達目標は以下のとおりである。 ・企業会計の原理・原則の理解（ステークホルダーとしての分析力の習得）。 ・ビジネス社会で有為な人材に必要な会計言語の習得（社会の発展に寄与する人材）。 ・日本商工会議所主催簿記検定の合格。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[前期]																																					
<table><tr><td>1. 初級簿記・中級簿記の復習</td><td>(教科書スタートアップ)</td></tr><tr><td>2. 純資産会計</td><td>(教科書 Chapter 01、02、03、04)</td></tr><tr><td>3. 資産会計①</td><td>(教科書 Chapter 05、06、07)</td></tr><tr><td>4. 資産会計②</td><td>(教科書 Chapter 08、09、10、11)</td></tr><tr><td>5. 負債会計</td><td>(教科書 Chapter 11、12)</td></tr><tr><td>6. 損益会計</td><td>(教科書 Chapter 13、14)</td></tr><tr><td>7. 外貨建取引</td><td>(教科書 Chapter 15)</td></tr><tr><td>8. 財務諸表（決算整理）①</td><td>(教科書 Chapter 16、17、18)</td></tr><tr><td>9. 財務諸表（決算整理）②</td><td>(教科書 Chapter 16、17、18)</td></tr><tr><td>10. 財務諸表（決算整理）③</td><td>(教科書 Chapter 16、17、18)</td></tr><tr><td>11. 財務諸表（決算整理）④</td><td>(教科書 Chapter 16、17、18)</td></tr><tr><td>12. 本支店会計、連結会計①</td><td>(教科書 Chapter 19、20)</td></tr><tr><td>13. 連結会計②</td><td>(教科書 Chapter 21、22)</td></tr><tr><td>14. 製造業会計</td><td>(教科書 Chapter 23)</td></tr><tr><td>15. まとめ（企業会計の役割）</td><td>(教科書 Chapter 24)</td></tr></table>								1. 初級簿記・中級簿記の復習	(教科書スタートアップ)	2. 純資産会計	(教科書 Chapter 01、02、03、04)	3. 資産会計①	(教科書 Chapter 05、06、07)	4. 資産会計②	(教科書 Chapter 08、09、10、11)	5. 負債会計	(教科書 Chapter 11、12)	6. 損益会計	(教科書 Chapter 13、14)	7. 外貨建取引	(教科書 Chapter 15)	8. 財務諸表（決算整理）①	(教科書 Chapter 16、17、18)	9. 財務諸表（決算整理）②	(教科書 Chapter 16、17、18)	10. 財務諸表（決算整理）③	(教科書 Chapter 16、17、18)	11. 財務諸表（決算整理）④	(教科書 Chapter 16、17、18)	12. 本支店会計、連結会計①	(教科書 Chapter 19、20)	13. 連結会計②	(教科書 Chapter 21、22)	14. 製造業会計	(教科書 Chapter 23)	15. まとめ（企業会計の役割）	(教科書 Chapter 24)
1. 初級簿記・中級簿記の復習	(教科書スタートアップ)																																				
2. 純資産会計	(教科書 Chapter 01、02、03、04)																																				
3. 資産会計①	(教科書 Chapter 05、06、07)																																				
4. 資産会計②	(教科書 Chapter 08、09、10、11)																																				
5. 負債会計	(教科書 Chapter 11、12)																																				
6. 損益会計	(教科書 Chapter 13、14)																																				
7. 外貨建取引	(教科書 Chapter 15)																																				
8. 財務諸表（決算整理）①	(教科書 Chapter 16、17、18)																																				
9. 財務諸表（決算整理）②	(教科書 Chapter 16、17、18)																																				
10. 財務諸表（決算整理）③	(教科書 Chapter 16、17、18)																																				
11. 財務諸表（決算整理）④	(教科書 Chapter 16、17、18)																																				
12. 本支店会計、連結会計①	(教科書 Chapter 19、20)																																				
13. 連結会計②	(教科書 Chapter 21、22)																																				
14. 製造業会計	(教科書 Chapter 23)																																				
15. まとめ（企業会計の役割）	(教科書 Chapter 24)																																				
III. 講義の進め方																																					
講義を欠席しないこと（積み重ね学習のため、欠席後の講義に支障が起きる）。 毎時の終了時に小テスト（理解度の確認）を実施する。 演習問題を数多く解くことで、講義内容の理解度・定着度が上がる（予習・復習を積極的に）。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（30％）、小テスト（20％）、前期終了テスト（50％）を基本とする。 日本商工会議所主催の簿記検定に合格した学生（簿記2級以上の取得者）は、単位取得とする。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書に事前に目を通し、本時の講義内容に関する理解を深めておくこと。 毎時間に使用するプリントは本時終了後に回収、次時の始めに採点后に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。 教科書に掲載の練習問題に忘れずに取り組み、知識の定着を図ること。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：みんなが欲しかった簿記の教科書（日商2級・商業簿記）（TAC出版） ※1年次に購入済み 参考書：必要に応じて紹介する																																					

科目名	情報技術の運用 I	教員名	米野 祐司 よねの ゆうじ	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、例題を通じ、コンピュータの知識と利用技術を発展的に習得する。大学でのデータ分析能力は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・使用するソフトの正確な操作の習得を図り適切な機能の活用ができる。 ・数値データを活用し、分析、判断することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [前期] 1. Microsoft PowerPoint の活用 (第4章) 2. 効果的なプレゼンテーション資料の作成 (第4章) 3. 効果的なプレゼンテーション資料の作成 (第4章) 4. プレゼンテーションの実行 (第4章) 5. プレゼンテーションの実行 (第4章) 6. Microsoft Excel の知識 (第1章) 7. ワークシートへの入力 (第1章) 8. ワークシートの設定 (第1章) 9. リストのデータ操作 (第2章) 10. リストのデータ操作 (第2章) 11. リストのデータ操作 (第2章) 12. グラフの編集 (第4章) 13. グラフの編集 (第4章) 14. Excel の応用 (第3章) 15. Excel の応用 (第3章)							
III. 講義の進め方 Microsoft PowerPoint の活用、Microsoft Excel の応用的な知識について実習する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（80％）授業への参加（意欲）状況（20％）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『大学生の知の情報スキルーWindows10・Office2016 対応ー』 共立出版 教科書：『コンピュータサービス技能評価試験表計算部門 2 級テキスト&問題集改訂版』 中央職業能力開発協会							

科目名	情報技術の運用Ⅱ	教員名	米野 祐司 よねの ゆうじ	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、例題を通じ、コンピュータの知識と利用技術を発展的に習得する。大学でのデータ分析能力は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・表作成における様々な機能を使い応用的な活用ができる。 ・情報の管理、表現、効果的な発信技術を習得し活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [後期] 1. Microsoft Excel による数値データの解析（第2章） 2. 数値データの解析（第2章） 3. 数値データの解析（第2章） 4. 数値データの解析（第2章） 5. カテゴリーデータの集計（第3章） 6. カテゴリーデータの集計（第3章） 7. カテゴリーデータの集計（第3章） 8. カテゴリーデータの集計（第3章） 9. データ解析の応用（第4章） 10. データ解析の応用（第4章） 11. データ解析の応用（第4章） 12. データ解析の応用（第4章） 13. Excel マクロ VBA の実行環境の設定 14. Excel マクロ 記録と実行 15. Excel マクロ 定義関数の作成と利用							
III. 講義の進め方 Microsoft Excel の応用的な知識について実習する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（80%）授業への参加（意欲）状況（20%）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『大学生の知の情報スキル—Windows10・Office2016 対応—』 共立出版 教科書：『コンピュータサービス技能評価試験表計算部門 2 級テキスト&問題集改訂版』 中央職業能力開発協会 参考書：『Excel マクロ&VBA やさしい教科書』 SB Creative							

科目名	政治理論史	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、現代社会における価値を巡る議論を対象として扱う。講義で扱うのは「自由」の概念とその発達である。講義では、第一に17世紀以降の理論家が自由をどのように考えてきたのか、第二に、自由の概念が現代社会ではどのような問題と関わっているかを、具体的な事例とディスカッションを通じて考える。また講義の内容に関連するため「政治学」を受講していることが望ましい。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代における国家と社会、個人の関係について基本的な知識を身につける。 ・自由の概念の発達と現代社会における自由をめぐる問題について議論ができる。 ・国家公務員試験および地方公務員試験に出題される水準の政治学説の基礎を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑤ジェンダー ⑩不平等 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. ガイダンス：トロッコ問題 2. 政治とは何か：政治学と他の学問との違い 3. リベラリズム1：自由とは何か：カルネアデスの舟板 4. リベラリズム2：自由と強制：「あなたのため」に強制することは許されるか 5. リベラリズム3：積極的自由と消極的自由 6. リベラリズム4：財産の社会的概念：累進課税制度は必要か 7. リベラリズム5：ケインズとハイエク 8. レポートの書き方1：問いの立て方 9. レポートの書き方2：巨人の肩に乗る 10. リバタリアニズム1：馬鹿なことをする自由 11. リバタリアニズム2：臓器移植市場 12. リバタリアニズム3：戦争の自由と民間軍事会社 13. リバタリアニズム4：商業的代理出産 14. レポートとディスカッション1 15. レポートとディスカッション2							
III. 講義の進め方							
この講義は「講義」と「ディスカッション・パート」(DP)の二つからなる。DPでは時事的な問題と絡めながら、受講者で議論をおこなう。受講学生は主体的な議論への参加が求められる。毎回ディスカッションを行うため遅刻者は授業に参加出来ない。また、2回連続の欠席や合計3回以上欠席した学生は受講を制限する場合がある。 講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
受講者が多数の場合は期末試験をおこなうが、基本的には授業への貢献度(60%)とレポート(40%)により評価をする。授業への貢献度の詳細は、ディスカッションと発表であるが、評価方式の詳細は授業で説明する。							
V. 授業外学修							
毎回の授業後に簡単なレポートを課す。その内容が復習課題となる。また、各講義内容は関連しているため、欠席した回に関しては、初回授業で指定する参考文献を読んだ上で次の講義に参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：初回に説明する。							

科目名	経 済 学 史	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
経済学史は「経済学」の歴史を対象とし、経済学がどのように変化・発展してきたかを扱う。経済学は目の前の経済問題を対象として分析し、その理論化を行った成果である。それゆえ、経済全体に対してどのような見方をするか、あるいは経済問題をどのように捉えるかによっていくつかの異なった枠組み(学派)がある。それらを大きく三つにわけ、ミクロ的・マクロ的・制度的アプローチとしよう。経済学の発展を辿り、それぞれのアプローチとその背後にある経済の見方・捉え方を明らかにするとともに、現代社会に対する主要な見方を理解する。 到達目標は以下のとおりである。 ・社会に対する多様な分析アプローチが有意義な成果を生み出すことを理解している。 ・現代の経済学における主要なアプローチを知っている。 ・過去の主要な経済学者と現代の経済学との関係を理解している。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ①貧困 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑫生産・消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 経済学の歴史と現代の経済学 2. 重商主義 3. 重農主義とケネーの経済表 4. スミスと古典派経済学の成立 5. リカードと古典派経済学の展開 6. J. S. ミルによる古典派経済学の集大成 7. マルクスによる制度的接近法の貢献 8. 古典派経済学と限界革命 9. ワルラスと一般均衡理論 10. ジェボンズと裁定行動 11. メンガーとオーストリア学派 12. マーシャルとケンブリッジ学派 13. ケインズとマクロ的接近法の復興 14. ケインズ以降の現代経済学 15. 現代の経済学と3つの接近方法							
III. 講義の進め方							
経済学の歴史に関する動画を副教材として用いて講義を進行する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・期末レポート(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。 経済時事の話題にふれる際に、いろいろな見方・理解の仕方があることを意識して理解を深めたい。経済事象に対するさまざまな見方が経済学を豊かなものにしてきたことを理解し、ものごとを深く考える手がかりとなろう。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『若い読者のための経済学史』 ナイアル・キシティニー(すばる舎) 『資本主義の思想史』 ジェリー・Z・ミュラー(東洋経済) 『経済思想史辞典』 経済学史学会編(丸善) 『経済学大図鑑』 ナイアル・キシティニー他(三省堂)							

科目名	キャリア技能Ⅴ (食品衛生責任者)	教員名	はたけやま 晶山 佳幸	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 食品衛生責任者は食品衛生責任者養成講習を受講した者などで、食品衛生責任者として選任されている者と定義している。食品衛生法に定められた許可営業者(食品衛生管理者の設置義務がある業種以外の飲食店営業など)は、営業許可施設ごとに食品衛生責任者を選任し保健所に届け出ることになっていることから、本養成講習を受講し、資格を取得する必要がある。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品衛生責任者養成講習会を受講し、食品衛生責任者資格を取得する。 <SDGs(持続可能な開発目標)との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：1単位、集中講義] [集中] 1. 衛生法規(伝染病、疾病予防) 2. 衛生法規(環境衛生、労働衛生) 3. 公衆衛生学(食品衛生法、施設基準、管理運営基準等) 4. 食品衛生学(食品事故) 5. 食品衛生学(食品の取扱い) 6. 食品衛生学(施設の衛生管理、自主管理等) 7. 修了考査							
III. 講義の進め方 社団法人 北海道食品衛生協会が企画・運営する食品衛生責任者講習会を受講する。講習会の開催日時や講習会場については別途連絡する。なお、本養成講習会受講者は別途講習料(8,000円)を支払って受講する。							
IV. 試験と成績評価 本養成講習会を欠かさず受講し、修了考査に合格した者は、食品衛生責任者資格が取得できると共に「キャリア技能Ⅴ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 食品を取り扱う際の衛生管理や過去に起きた食中毒や食品事故について事前学習しておくことにより講習会の内容理解が深まる。							
VI. 使用教材 教科書：受講テキストは講習会当日、北海道食品衛生協会から支給される。							

科目名	キャリア技能Ⅸ (ミュージカル)	教員名	各担当教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	集中
I. 目的と内容および到達目標							
拓大ミュージカルは40年の実績と伝統に支えられた本学の特徴的学びの活動である。1年次では企画力・協調性・忍耐力・集中力など、様々な人間力を育み、感動の涙を自ら体験することを第一の目的として活動を体験するが、2年生としての関わりは、1年生を指導し、リーダーシップを発揮し、社会人として巣立つ前の最後の学び、特にリーダーシップ性を高めることを目標にしている。 組織運営の最初から最後までを責任を持って関わることで、1年次では知りえなかった様々な問題や課題を体験できる。その経験は、社会人として大きな糧になるものである。また、労苦を共に体験することも重要な目的である。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標達成のため努力をすることができる。 ・2年生としての責任感やリーダーシップなどを常に意識して活動することができる。 ・所属セクションでの役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、集中]							
公演日は2025年2月中旬を予定。 以下のような活動分野があり、それぞれの活動計画によって後期より制作が進められる。 <制作スタッフ> 1 キャスト 2 音響部 3 舞台美術部（大道具・小道具） 4 衣装部 5 舞台監督部 <事務局スタッフ> 1 総務会計部 2 広報渉外部				各担当教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 菊地清大 講師 演技指導・舞台製作指導 藤井綾子 講師 衣装製作指導・ダンス指導 ※その他、演技指導アドバイザー・衣装製作アドバイザー等を置く。 ※キャストを含め、演目に見合う参加者が集まらない場合は、開講できないことがある。			
III. 講義の進め方							
9月下旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常授業期間中の活動は原則として月・金（16:00～17:20）、土（9:10～16:00）。 なお、土曜日、休暇期間の活動は授業外時間（課外）活動となっている。 休暇期間を利用した活動は、日曜祭日を除く平日（9:10～16:00）。ただし、年末年始の活動は例年行わない。							
IV. 試験と成績評価							
試験は実施しない。成績評価は活動実践（90%）及び活動記録シート（10%）で行う。							
V. 授業外学修							
活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材							
教科書：台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。 参考書：毎年、活動過程・公演を収録したDVDが製作されるので参考にして欲しい。							

科目名	インターンシップ	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 地域振興の担い手の育成及び学生の就業能力の向上のため、インターンシップを通じた社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う。このような就業体験により、地域企業と学生及び教職員とが相互理解を図り、地域社会に貢献できる人材を育成する。 2年次の休業中の一定期間、事業所（企業又は公共機関）において日帰りで、職業の現場における実地的な知識や技術・技能に触れることにより、主体的な職業選択能力や高い職業意識を育成することを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 勤労観や職業観の理解の深化を図り、将来の進路について考え、職業選択能力を養う。 ・ 事業所などの現場において、現実の知識や技術に触れ、大学における学習の取組みに役立てる。 ・ 学生が教職員や保護者以外の社会人と接することで新たなコミュニケーション能力を育てる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：30回〕 （事前学習） 1. インターンシップの目標について 2. 地域の事業所の概要について 3. 地域の産業構造と特色について 4. 労働環境等について 5. インターンシップ先について 6. インターンシップの心構えについて （インターンシップ実施） 7. ～27. 一定期間のインターンシップ実施 （事後学習） 28. インターンシップの総括について 29. インターンシップ体験報告会の準備 30. インターンシップ体験報告会							
III. 講義の進め方 事前・事後の学習については、学生自身の企業及び業界の調査・研究を重視しながら、インターンシップで体得すべき内容の認識を深めるようにするとともに、事後学習ではインターンシップ体験の検証を体験報告会実施によって成果を客観的に見直すことを重視する。一部の研修や説明は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、学生が提出する「インターンシップ日誌」20%、インターンシップ先が提出する「インターンシップ評価表」30%、巡回指導に当たった専任教員の報告書20%、体験報告会の内容30%で行う。							
V. 授業外学修 インターンシップは実施する企業および業界の研究に事前の課題として取り組む。予習・復習については履修後に個別に指示をする。							
VI. 使用教材 教科書：指定しない 参考書：事前学習時に適宜指示する。							

科目名	地域特別演習 A～D	教員名	各専任教員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
地域活動に積極的に参加し、企画・運営のスタッフの一員として主催担当者や市民とともに、協働しながら、自己啓発や地域貢献できる人材の育成を目指す。また、地域の実状に直接触れることで、課題を発見・解決する手順や得られる成果を通じて、地域振興に役立つ「地域活性化プラン」策定の一助とする。地域活動の一部を担うとともに地域活動の改善策などの作成を通じて、地域をデザインすることができる人材の養成を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域社会の実状を理解し、地域協働の活動を円滑に遂行することができる。 ・地域社会の実態に対応する地域活性化プランを作成することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業週数：15回]							
[前期] *前期に実施の場合				[後期] *後期に実施の場合			
1. ガイダンス①：取組みの仕方と事例紹介 2. ガイダンス②：取組みの確定 3. 事前研修 4～ 1 3. 担当教員との協議・打ち合わせ（2時間）、 取り組みの実施（4時間） 実施後の改善協議（1時間）、 改善された取り組み（3時間） 1 4. 取組みのまとめと地域活性化プランの立案 1 5. 地域活性化プランの発表				1. ガイダンス①：取組みの仕方と事例紹介 2. ガイダンス②：取組みの確定 3. 事前研修 4～ 1 3. 担当教員との協議・打ち合わせ（2時間）、 取り組みの実施（4時間） 実施後の改善協議（1時間）、 改善された取り組み（3時間） 1 4. 取組みのまとめと地域活性化プランの立案 1 5. 地域活性化プランの発表			
III. 講義の進め方							
演習の実施にあたっては、希望する学生の自主的な取り組みによって進められる。 実際の取り組みは、講義終了後や土・日・祝祭日や長期休業、学外による場合が想定されるため、移動や実施に際しての安全に配慮して行う。							
IV. 試験と成績評価							
深川市等の地域活動の事前・事後の研修に対し真摯に、積極的に取組んだか。また、実施時の活動状況や報告レポートの作成・発表等で行う。 成績評価の方法は、各演習毎に明らかにする。							
V. 授業外学修							
地域活動に参加することになるため、事前に本市・近隣市町村の概況について文献などで理解しておくといよい。 継続的に参加することで、様々な人とつながり、視野を広げることができる。 関わった分野への理解を深めることで、自己のスキルを一層高めることができる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：使用しない。 参考書 ：各担当教員が適宜指示する。							

科目名	海外研修	教員名	農学ビジネス学科 専任教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、海外における語学研修および諸活動を対象とし、研修前後に単位認定に関わる所定の申請を行った者を対象に、学科会議等の審査を経て単位を付与するものである。 例えば、拓殖大学の政経学部と国際学部で実施される海外研修については、前期と後期に各学科の学生掲示板に募集要項が掲示されるので、学生は、それを見て応募する。あらかじめ所定の手続きを済ませ、参加可否を主催担当者による選考に委ねている。このほか、民間旅行会社等で実施される海外研修に参加する場合においても対象となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・国際化社会・グローバル化社会で必要な国際感覚を身につける。 ・海外研修に必要な十分な語学力を身につける。 ・海外での職業生活や社会生活に必要なコミュニケーション能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 〔単位数：2単位、現地研修日数：約10日間以上〕 1. 海外研修応募のための書類作成・申し込み 2. 履修指導 3. 海外研修の単位認定の学務学生課への事前申請 4. 海外研修に関する諸手続き指導 5. 事前研修（現地事情、研修課題、外国語、危機管理） 6. 海外研修参加 7. 事後研修（修了報告書作成・提出） 8. 口頭発表 9. 修了報告書の学務学生課への提出 10. 単位認定の申請手続き							
III. 講義の進め方 海外で語学研修および諸研修活動を行う。具体的なスケジュールや研修内容は、研修によって異なる。							
IV. 試験と成績評価 事前研修（33%）・現地研修（33%）・事後研修（34%）に関する担当者の評価をもとに、学科会議にて審議の上、単位認定の可否を判定する。よって、研修終了後はその旨をゼミナール担当教員に申し出た上で、学務学生課窓口において単位認定の申請手続きをあらかじめ行うこと。							
V. 授業外学修 訪問地の地理的、文化的概況を事前に調査することで、語学以外のスキル向上につながる。 「百聞は一見にしかず」であるが、物見遊山ではないので、事後のまとめに必要な情報のメモを忘れない。 獲得した能力の活用方法、目的を明確にすることで、効果的な研修と進路実現に結びつけられる。							
VI. 使用教材 教科書：担当教員が指示する。 参考書：担当教員が適宜指示する。							

科目名	卒 論 演 習	教員名	各専任教員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
2年間の学びの一つの到達点を「卒業論文」と位置づけ、全学生が卒論演習を履修する。所属ゼミナール教員の指導のもとでテーマを選択し指導を受ける。卒論演習は時間割にコマは割り当てられず、授業時間とは別に個別指導を中心とした論文指導が行われる（講義の進め方参照）。論文の作成は、指導教員とのミーティングと個別添削、2年ゼミナールでのディスカッションを繰り返しながら進められる。 到達目標は以下のとおりである。 ・関心にもとづいて課題設定をすることができる。 ・適切な資料を自ら収集し、読解することができる。 ・論理的な一定量の文章を書くことができる。 ・人前で自分の成果を発表・説明することができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回]							
1 課題の設定				3 文章の作成			
・社会現象を対象とした課題の発見 ・主体的なテーマの設定 ・テーマを論じるために必要な論文構成の作成				・論文としての一定水準・分量の文章作成 ・文章作成と添削の重要性 ・参考・引用・注解の適切な使用法			
2 文献の収集・読解				4 プレゼンテーション			
・論文作成に必要な図書館の使い方 ・テーマに関する基本的な資料の検索と収集 ・一定水準・分量の文献・論文などの読解 ・集めた情報の適切な整理法				・与えられた時間を活用したプレゼンテーション ・目的を明確にしたプレゼンテーション ・適切な質疑応答			
III. 講義の進め方							
「卒論演習」は「2年ゼミナール」と連動して展開される科目であるが、ゼミナールの時間外で教員が設定する時間に行われる活動である。 「2年ゼミナール」の時間は、主に卒業論文作成に必要な学習、知識の習得および学生間の議論や情報共有のためにあてられるが、「卒業演習」のための教員との個別の指導や執筆時間にかかる活動も一部あてられる。具体的な進め方は各ゼミナール担当教員の指示に従うこと。							
IV. 試験と成績評価							
卒論演習の評価は、1. 論文の完成度（40%）、2. 論文への主体的な取り組み（30%）、3. 論文の発表（30%）の3項目で行う。1は短期大学として要求される論文の質と形式の達成度、2は論文作成への積極性、ゼミナールでの議論の貢献度、卒業制作発表会の運営など、3は卒業制作発表会での発表、論文完成への取り組みの状況を評価する。							
V. 授業外学修							
卒業論文の作成にあたっては、研究テーマの設定、論文の構成・展開等、ゼミナール担当教員と適宜協議し、指導を受けながら進めると良い。 調査研究にあたっては、図書館の活用、Internet 検索等、読み込むまでに相当の時間を要するため、計画的に取り組むこと。なお、情報の信憑性、時間の経過など、複数の出典元からの情報を精査すること。 様々な期日を守ることも大切な評価の要素である。							
VI. 使用教材							
教科書：各ゼミナール担当教員が指示する。 参考書：各ゼミナール担当教員が適宜指示する。							